

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第68集

ぎ ちょう しょう らく じ い せき

# 儀長正楽寺遺跡

1 9 9 6

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター



#### ▲口絵 1 遺跡遠景

儀長正楽寺遺跡周辺の航空写真。南側から撮影している。写真中央部に儀長正楽寺遺跡。遺跡の東には三宅川が蛇行して流れる。儀長正楽寺遺跡の北側には尾張国分尼寺、三宅川左岸には尾張国分寺が所在する。

なお、右上を斜めに横切る鉄道は東海道新幹線。

#### ◀口絵 2 遺跡近景

今回の調査地点を西から撮影した。





◀ 口絵3 井戸

今回の発掘調査で最も明瞭に検出できたのは、鎌倉・室町時代の居住域となる。写真は、屋敷地中に設定された井戸(SE01)。井戸枠の構造は縦板組隅柱横棧どめ。井戸枠内から灰釉系陶器などが出土している。



◀ 口絵4 SK18遺物出土状況

この土坑は、93区中央部から検出された。南側の一部が平安時代末～鎌倉時代の溝により破壊されている。多量の遺物が出土したのを特色とする。なお、土坑内での同一個体の出土位置は上下にばらつきを有しており、この土坑が短時間で埋まっていることを予測させる。



◀ 口絵5 SK18

SK18より出土した土器群。写真左側の浄瓶は器高27cmをはかる。良好な一括資料といえる。

# 序

愛知県稲沢市は、肥沃な濃尾平野のほぼ中央部分に位置します。現在では名古屋市のベッドタウンとして発展を続けていますが、この街は歴史的にも古代においては国府や国分寺、中世においては尾張守護所が設置されるなど、尾張国の中枢部として繁栄した場所でもあります。

このたび、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは県道馬飼・井堀線建設に伴う、儀長寺通遺跡の発掘調査を、愛知県の委託事業として実施致しました。

その結果、先人の生活・文化に関するいくつかの貴重な知見を得ることができました。そして、今回これらをまとめ、報告書として刊行するにいたしました。本書が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

なお、文末で恐縮ではありますが、発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々を始め関係諸機関及び関係者から多大なご指導とご協力をいただいております。深く感謝を申し上げます。

平成8年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 安部 功

## 例 言

1. 本書は愛知県稲沢市に所在する儀長正楽寺遺跡（『愛知県遺跡地図』（I）尾張地区による遺跡番号は9027、9028、9153）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は愛知県土木部が進めている県道馬飼～井堀線の建設に先立つもので、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じ委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成6年3月と平成6年9月～平成7年3月である。
4. 発掘調査は平成5・6年度をこれにあて、平成5年度を大竹正吾（本センター主査、現佐織町立西川端小学校教諭）・前田雅彦（本センター主査）・池本正明（本センター調査研究員）、平成6年度を福岡晃彦（本センター課長補佐）・水谷寛明（本センター主査）・池本正明が担当した。
5. 調査に際しては、次の機関から指導・協力を受けた。  
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県土木部・稲沢市教育委員会
6. 遺物の整理・製図などについては、次の方々のご協力を得た。  
石川倫子・大藤妙子・河合征治・河野美佳子・杉田記久子・竹之内芳美・田口雄一・田中由紀子・中西和子・野村信生・水野多栄・山内富正・山田由紀夫・吉兼千絵  
(五十音順・敬称略)
7. 本書をまとめるにあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を得た。  
愛甲昇寛・天野暢保・内田智久・小嶋廣也・柴垣勇夫・城ヶ谷和広・新行紀一・立松彰・檜崎彰一・日野幸治・北條献示・三宅唯美・森達也（五十音順・敬称略）
8. 石材鑑定は、堀木真美子（本センター調査研究員）の肉眼観察による。
9. 本書で使用する色調名は1989年度版 『新版標準土色帳』小山正忠・竹原秀雄編に依拠した。
10. 調査区の座標は、建設省告示の平面直角座標VII系に準拠した。
11. 本書の編集は池本正明が担当し、執筆は前田雅彦・水谷寛明・池本正明・鬼頭剛（本センター調査研究員）・水野多栄（本センター調査研究補助員）がこれにあたった。
12. 調査に関する資料はすべて愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

# 目次

第1章 はじめに	1
(1) 調査の経過と経緯	1
(2) 環境と周辺の遺跡	4
第2章 遺構	6
(1) 基本層序	6
(2) 遺構	7
① 古墳時代の遺構	8
② 奈良・平安時代の遺構	12
③ 平安時代末～鎌倉・室町時代の遺構	13
④ 江戸時代の遺構	26
第3章 遺物	31
(1) 土器・陶器	31
① 弥生時代～古墳時代前期の土器	31
② 古墳時代の土器	32
③ 奈良・平安時代の土器	34
④ 平安時代末～鎌倉・室町時代の土器	36
⑤ 江戸時代の土器	43
(2) そのほかの土器・土製品	46
① 製塩土器	46
② 土錘	46
③ 陶丸	46
④ 加工円盤	49
⑤ 瓦	49
(3) 石製品	50
(4) 木製品	51
(5) 金属製品	53
第4章 考察	54
(1) 儀長正楽寺遺跡の地形・地質	54
第5章 まとめ	56
(1) 主要遺構の変遷	56
(2) 出土遺物の検討	61
付表	65

## 挿図目次

図1	調査進行表	1	図15	弥生時代～古墳時代の土器	31
図2	調査区位置図	3	図16	須恵器杯の分類	35
図3	周辺の主要遺跡	5	図17	灰釉系陶器椀・小皿、土師器皿の分類	36
図4	層位模式図	6	図18	近世土器	45
図5	土坑A・B	7	図19	そのほかの土器・土製品	46
図6	SB01・SB02	8	図20	加工円盤	47
図7	NR01断面図	11	図21	瓦 1	48
図8	掘立柱建物	14	図22	瓦 2	49
図9	SE01	16	図23	石製品	50
図10	SE02・SE04	17	図24	木製品	52
図11	SE07・SE08	19	図25	金属製品	53
図12	SE10	21	図26	儀長正楽寺遺跡の位置と周辺の地形	55
図13	SD変遷図 1	27	図27	遺構変遷図 1	58
図14	SD変遷図 2	29	図28	遺構変遷図 2	59



## 図版目次

図版 1	図版割付図	図版20	土器11
図版 2	遺構 1	図版21	遺構 1
図版 3	遺構 2	図版22	遺構 2
図版 4	遺構 3	図版23	遺構 3
図版 5	遺構 4	図版24	遺構 4
図版 6	遺構 5	図版25	遺構 5
図版 7	遺構 6	図版26	遺構 6
図版 8	遺構 7	図版27	遺構 7
図版 9	遺構 8	図版28	遺構 8
図版10	土器 1	図版29	遺構 9
図版11	土器 2	図版30	遺構10
図版12	土器 3	図版31	遺構11
図版13	土器 4	図版32	遺構12
図版14	土器 5	図版33	遺物 1
図版15	土器 6	図版34	遺物 2
図版16	土器 7	図版35	遺物 3
図版17	土器 8	図版36	遺物 4
図版18	土器 9	図版37	遺物 5
図版19	土器10	図版38	遺物 6

## 口絵

口絵 1	遺跡遠景
口絵 2	遺跡近景
口絵 3	井戸
口絵 4	SK18遺物出土状況
口絵 5	SK18遺物

## 付表

主要遺構計測一覧
遺物計測一覧



この地図は国土地理院発行の  
20万分の1地勢図「名古屋」  
を使用したものである

伊勢湾

# 第1章 はじめに

## (1) 調査の経過と経緯

愛知県土木部道路建設課では、県道馬飼・井堀線建設を計画したが、この予定用地内に **原因** は古代の寺院跡である『正楽寺跡』、室町～戦国時代の城跡である『儀長城跡』、古墳時代～近世にかけての集落遺跡である『儀長寺通遺跡』が所在しており、事前に発掘調査を実施し、記録保存する必要性が認められた。このため、新県道建設に先だって発掘調査が計画され、愛知県土木部より愛知県教育委員会をとおして委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターがこれを実施した。

調査は、平成5年度～6年度の2ケ年にわたって、地下水位の低下する冬季に実施した。 **調査手順** 調査の総面積は5630㎡となり、これを5地区に分割実施した。平成5年度には、調査区東端にあたる1地区のみの460㎡、平成6年度には4地区5170㎡を調査した。付け加えるならば、平成6年度の4地区の面積の内訳は、A区：732㎡、B区：1314㎡、C区：1492㎡、D区：1632㎡となる。なお、調査に要した日程などは、図1に示した工程による。

調査方法は、現地表面から表土のみをバック・ホウにより除去したのち、建設省告示によって定められた平面直角座標第七系に準拠した5mグリッドを設定し、手掘りて包含層を掘削して遺構を検出する方法をとった。遺構測量については、ヘリコプターによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50基本平面図を作成したほか、重要部分については補助測量図を手測りにより実施した。

今回の調査区は図3に示すように東西に長く設定してあることから、『正楽寺跡、儀長城跡』(北條 1985)と、西側に近接する『儀長寺通遺跡』の境界部分に該当している。しかし本センターの調査の結果、調査区内では有機的なまとまりをもって遺構が展開していたため(池本 1995b、池本他 1994a)、これら2遺跡は一連のものである可能性を考えることができた。こうした状況を整理するため、本センター調査課課長中川真文と、稲沢市教育委員会社会教育課主査北條献示氏が協議し、『儀長正楽寺遺跡』として呼称することでまとまった。なお、今後周辺地域の調査が進行した段階で同様の事が指摘できるのであれば、これら2遺跡を同一の遺跡として把握することも射程に入れたものである。 **遺跡名称**

年 度	担 当 者	調 査 区	期 間
93	大 竹 正 吾 前 田 雅 彦 池 本 正 明		1 ⇒ 3月
94	水 谷 寛 明 池 本 正 明	A	12⇒1月
		B	9 ⇒10月
		C	11⇒12月
		D	1 ⇒ 3月

図1 調査進行表

また、調査に参加いただいた方々は、以下の通りである。

浅野文善、飯野香代子、石黒芙佐子、伊藤とよ、稲垣美登里、今井春義、今田利彦、岩田明美、岩本三季子、上田茂寿、上田利子、内園洋子、奥田美由岐、各務則子、垣見和昭、片岡健二、片野百合子、加藤悟子、鎌田智子、黒谷日佐子、小崎暢子、後藤栄次、後藤喜久江、近藤洋子、酒井敏子、桜井乃布香、柴山香代子、柴山まさえ、新海澄子、杉田千代子、杉原利明、関田美千代、竹川美知子、棚橋豊子、田深多美子、東松道昭、徳永悟士、中村幸一、西村澄子、橋口為義、羽田野明美、服部富子、服部三枝子、服部礼二、久田友子、日比芳子、平野加奈子、平野比芦子、平林八寿子、藤井美代子、堀田真理子、松田典子、三輪美恵子、百瀬詔子、森清和、森本千歳、森律子、山崎久美子、山田由起夫、山田芳美、山之内なつ子、山本真紀子、雪松町子、渡辺康子

## 学生

内蔵菜穂子（愛知学院大学）、加藤優子（名古屋女子大学）、河合征治（三重大学）新海洋規（名古屋経済大学）、田口雄一（花園大学）、富田智恵（豊田短期大学）富永晶子（佛教大学）、中島新治（花園大学）、中村晋也（三重大学）、野村信生（日本大学）、堀田真理子（愛知淑徳大学）、山内富正（佛教大学）、吉兼千絵（同朋大学）、吉田由香（敦賀女子短期大学）  
（五十音順・敬称略）



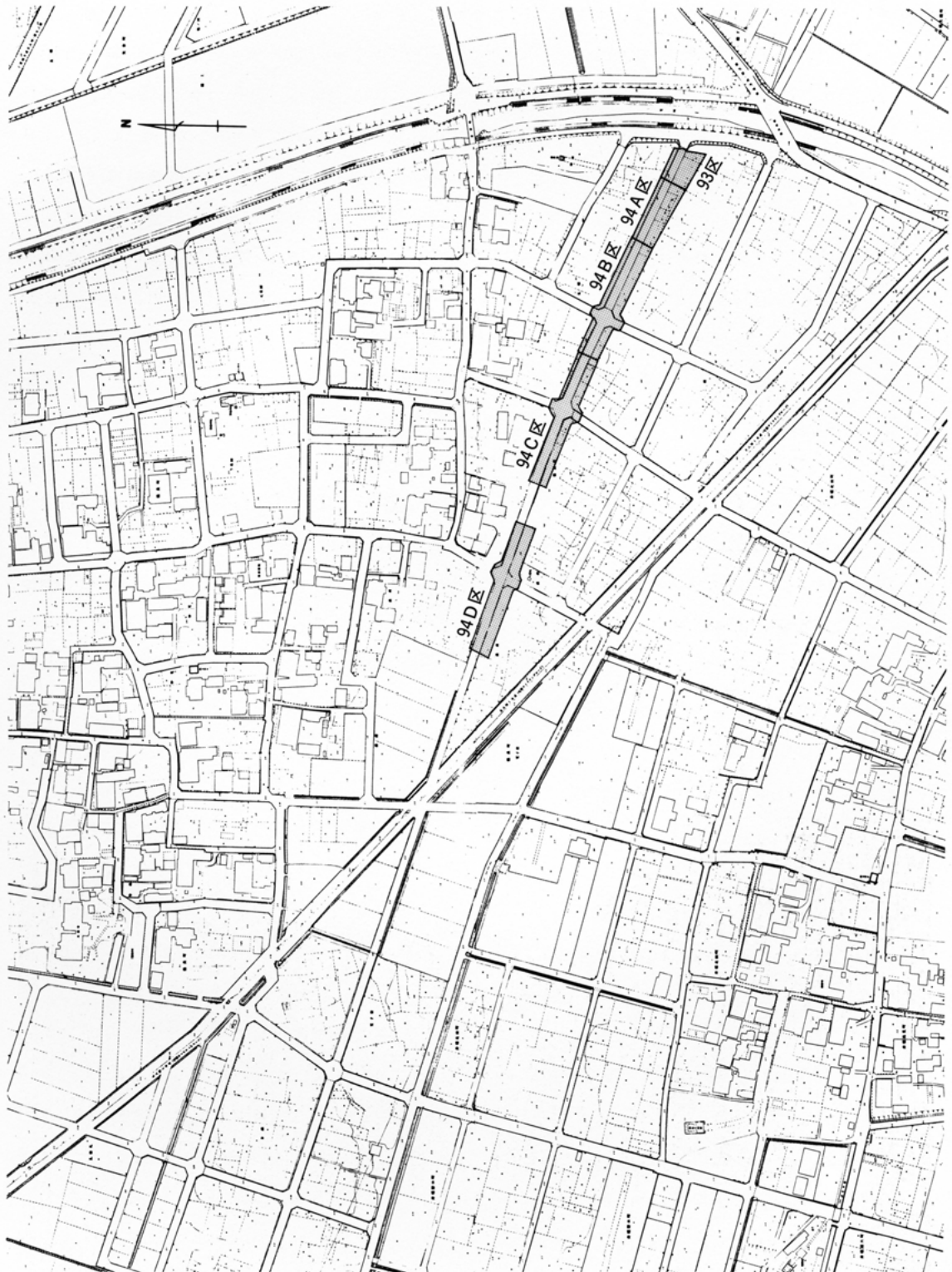


図2 調査区位置図 (1 : 2000)

## (2) 環境と周辺の遺跡

### 地形

東西と北の三方を山に囲まれ、揖斐・長良・木曾の3川によってうるおされる濃尾平野は、そこに分布する多数の遺跡が物語るように、古くから肥沃な平野として開発されてきた。低く平らな沖積平野の上を自由に流れるこれらの河川は、洪水のたびに流路を変えてきた。川は洪水の氾濫によって、上流から運んできた礫や砂泥を河道の周囲と河川の先の沖合に堆積させて、平野をつくっていく。木曾川下流には川がつくった堆積平野（河成堆積平野）がよく発達し、扇状地帯、自然堤防地帯、三角州地帯といった典型的な堆積地形がみられる。木曾川の扇状地は大きく、平野北東端の谷口に当たる犬山を扇頂として半径12~13kmの四分円を描く。扇状地の下流には、勾配0.5~0.8/1000の平坦な自然堤防地帯がひろがっている。前述のように木曾川も現在の位置に定まる以前、幾度となく流路を変えたため自然堤防と後背湿地が複雑に錯綜した地域を形成しているのがこの自然堤防地帯である。そして木曾川の支流である三宅川もその旧流路としての景観がみられる。三宅川は、一宮市市街地から稲沢市に至って南下する間に大きく4回蛇行を繰り返す。最後の蛇行を終えて、流路を南西に向ける辺りの右岸の自然堤防上に、『儀長正楽寺遺跡』は所在する。調査区域の現況は畑地および農道で、畑地は苗木栽培に利用されている。この地は、苗木栽培では全国でも有数の産地であり、地場産業の確固たる地位を占めている。地籍は稲沢市儀長町佛畑・前南で、標高は約2.5mをはかる。

### 周辺の遺跡

遺跡の周辺には、西方1.0~1.5kmに弥生時代中期末の集落遺跡である『一色青海遺跡』（一色青海町・儀長町・中島郡平和町須ヶ谷）・『一色長畑遺跡』（一色長畑町）・『跡ノ口遺跡』（一色跡之口町）が所在する。一方、三宅川の対岸には『堀之内花ノ木遺跡』（堀之内町）・『尾張国分寺』（矢合町）、さらに北1.2kmには『尾張国分尼寺』（法花寺町）、そして北東3.5kmに位置する稲沢市松下一丁目には尾張大国霊神社が存在することから「尾張国府」に推定されている。以上のことから古代尾張地域の行政的な中心地として、この地域が発達していたことが伺える。

本遺跡は、古代には「正楽寺」（儀長町元薬師）、中世には「儀長城」（儀長町同）が存在したと伝承をもつ地域とされている。前者の正楽寺は、尾張国分寺の四至に設定された四楽寺の一つで、尾張国分寺から西方へ0.6~1.0kmの距離を有する。後者の儀長城は「片原一色城」（片原一色町）の支城として、在地勢力である「橋本伊賀守」の一族または家臣が居住していたとされている。橋本氏は、南朝に属した武将で、のち、応永（1394~1428）の頃から8代180年余ここに居住し、4つの支城（儀長城の他に矢合城・井堀城・三宅城）を持ったとされる。5代目の一把（いっば）は、織田信長の鉄砲師範をつとめ、その子道一は、豊臣秀吉が朝鮮に出兵したとき、鉄砲頭として従軍したといわれる。元和元年（1615）一国一城令により、片原一色城と共に廃城となった。すなわち、儀長城は室町~江戸時代初頭までこの地に出城として存在していたことになろう。なお、儀長城は、本城である片原一色城からは南東2.0kmに位置する。（前田雅彦）

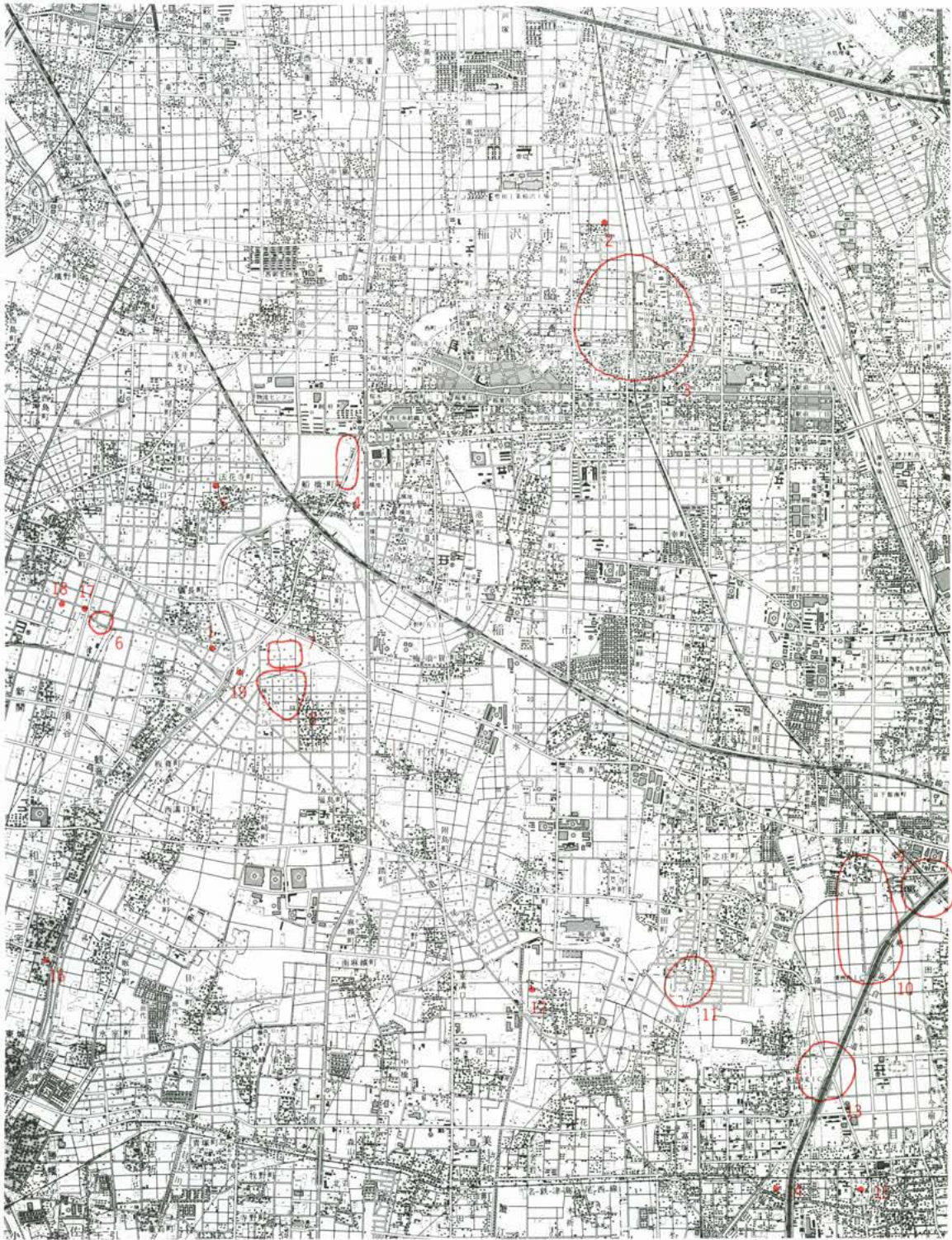


図3 周辺の主要遺跡 (1 : 50000)

※この地図は国土地理院発行の2万5千分の1  
地形図「一宮」・「清州」を使用したものである。

凡例			
1 儀長正楽寺遺跡	6 一色斎海遺跡	11 森開遺跡	16 三宅庵寺
2 東柳庵寺	7 尾張國分寺	12 ニツ寺遺跡	17 一色長畑遺跡
3 尾張國府	8 堀之内花ノ木遺跡	13 阿弥陀寺遺跡	18 跡ノ口遺跡
4 船橋宮裏遺跡	9 堀間遺跡	14 大洞遺跡	19 大縄遺跡
5 尾張國分尼寺	10 土田遺跡	15 誓旨寺	

## 第2章 遺構

### (1) 基本層序

今回設定した調査区の基本的な層位は、表土層（1層）、オリーブ褐色粘質土層（2層）、黄褐色粘質土層（3層）である。今回の遺構検出面は黄褐色粘質土層上面となる。調査地点の地表面の標高は2.5m前後をはかるが、A区、D区ではこれより若干低くなる。この状況は、遺構検出面でもおおむね一致しており、遺跡の位置する微高地の地形とよく整合している。

なお、今回の調査区は作業開始直前の地目が植木の苗畑であった関係上、場所によっては地表面から2～3m程度まで及ぶ天地返しが実施されており、この部分については遺構は完全に消滅している。また、調査区に並行する中央の農道は、地面を削平して建設された道路で、周囲の畑地と50cm程度の比高差が認められる。このためこの部分は、掘り込みが浅い遺構はすでに消滅していることが予想できる。

以下、調査区の基本的な層序を上層から順に説明を加える。

各層の内容

- 1層 基本的には遺跡の覆土である。全体に軟質で、厚さはほぼ10cm程度。古代～近世の陶磁器片などに混ざって、現代のビニール片などを含む。
- 2層 厚さは10～20cm程度で、調査区全域に分布しない。いわゆる遺物包含層で、炭化物、焼土ブロックのほか、3層ブロックなども混入する。
- 3層 厚さは不明。上面が遺構検出面となる。

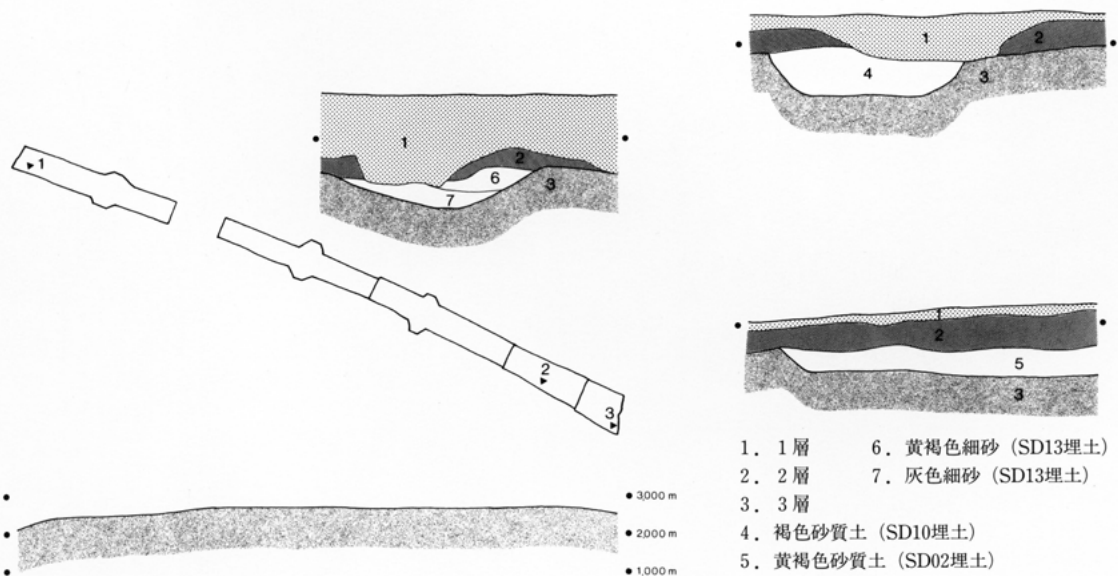


図4 層位模式図（断面図は1：40）

## (2) 遺 構

今回検出した遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、柵、土坑、溝などがみられる。分布状況は93区、94A区が濃密で、西側ほど希薄となる。

各種の遺構

次にこれを時期別に整理すると、古墳時代と奈良・平安時代、鎌倉時代、江戸時代にまとまりをみることができる。まず、古墳時代の遺構は、竪穴住居、土坑、溝を検出している。遺構の分布範囲は、93区、94A区で濃密、94C・94D区で希薄となる。次に奈良・平安時代の遺構であるが、検出できた遺構は乏しく、土坑が数基検出されているにとどまる。また、鎌倉・室町時代の遺構は、掘立柱建物・井戸・土坑・溝で構成される遺構群となる。全面に溝による方格地割が設定され、調査区には屋敷地が構成される。江戸時代の遺構は、鎌倉・室町時代の地割りを継承する形で、数条の溝を確認している。このほか主軸方位の異なる溝が、一部前者の溝を破壊して3条確認されている。

以下、各々の遺構について時期別に報告するが、これらのうち、土坑については、形状などによっていくつかのまとまりを指摘することができる。今回はこれを土坑A～Dと4

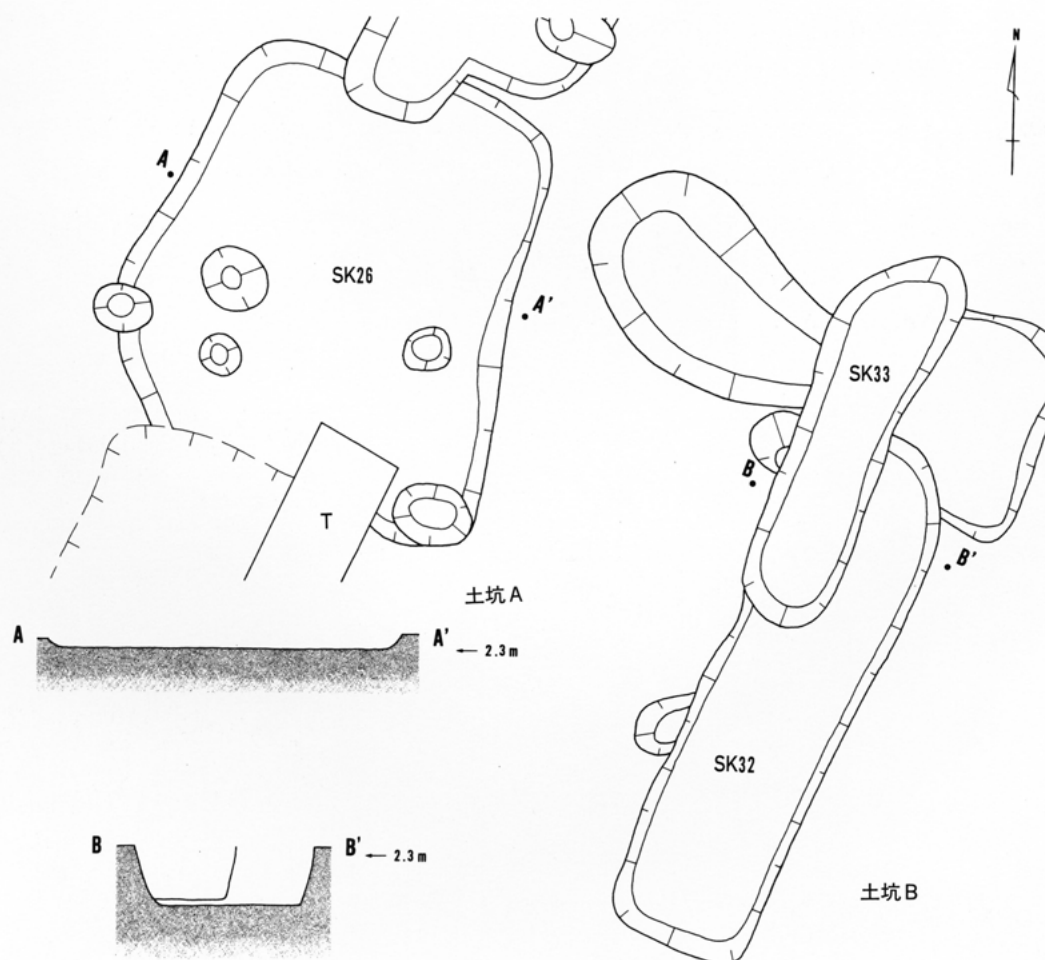


図5 土坑A・B (1:50)

**土坑の種類** つに区分して報告する。まず、土坑Aは、プランが正方形を呈し、竪穴住居に類似したものを呼称する。ただし、柱穴や竈などは確認できない。埋土は基本的に単一。総数12基を検出している。分布状況は、93区、94A区、同B区に集中する傾向がみられる。次に土坑Bは、プラン隅丸長方形の土坑を呼称する。壁面は多くが垂直で、埋土は基本的に単一となる。また、主軸方向の類似がみられる。総数11基を検出している。分布状況は、93区、94A区、同B区の範囲のみに存在する。時期はいずれも鎌倉・室町時代に属する。次に土坑Cは、大量の遺物が出土する土坑で、埋土は基本的に単一。土器の廃棄に関連する可能性が強い。2基検出している。最後に、そのほかの土坑を土坑Dとしてまとめる。従って土坑Dには明瞭な傾向を窺うことはできない。

① 古墳時代の遺構

**A期の遺構**

古墳時代の遺構は、竪穴住居、土坑A、土坑D、溝がある。分布状況は93区、94A同B区に集中する傾向がある。

**竪穴住居**

竪穴住居は2棟検出した。

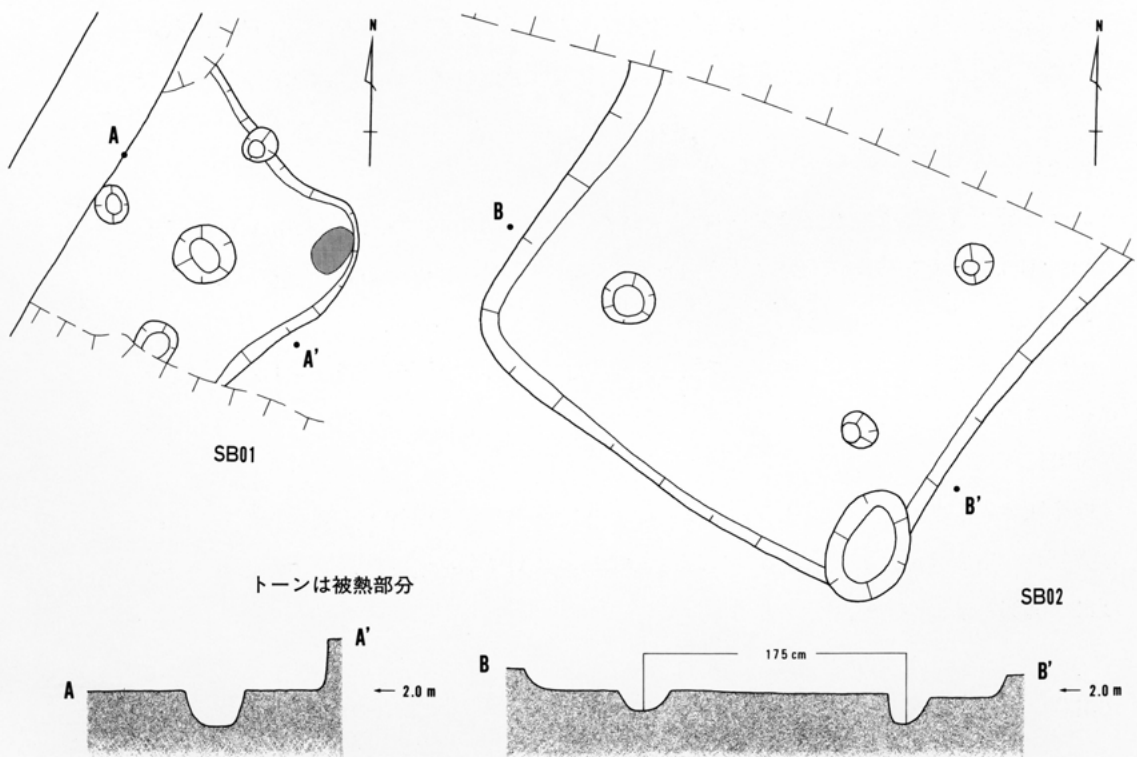


図6 SB01・02 (1:50)

**SB01**

93区の南西部で検出した。調査時に設定したトレンチによって西側の一部分が、耕作によって南側が破壊されるため規模は不明。検出面からの深さは0.1mをはかる。北西のコーナー一部分が若干突出し、この部分の底面が被熱する。竈と考えられる。出土遺物には須恵器杯（図版10-1）などがある。

**SB02**

94D区の中央部で検出した。南側の一部を現代埋設管により破壊される。プランは一辺3.3mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.2mをはかる。また、南東のコーナー一部分が突出し、底面の一部が被熱していた。竈と考えられる。主柱穴は三ヶ所確認した。出土遺物には土師器甕（図版10-2）などがある。

**土坑A**

土坑Aは5基確認した。

**SK01**

93区東部で検出した。南側をSD02に切られ、西側を「天地返し」により破壊される。残存する一辺の中央部は突出するが、この部分には被熱が確認できない。出土遺物には須恵器杯（図版10-3）などがある。

**SK02**

94A区東部で検出した。東側は鎌倉・室町時代の土坑に切られる。なお、北側は現代の排水溝が所在するため、調査不能となる。出土遺物は須恵器杯、甗（図版10-4、5）などがある。

**SK03**

94A区部で検出した。東側はSK35に切られる。なお、北側は、現代の排水溝が所在するため、調査不能となる。形状はやや不整形となる。出土遺物には土師器片などがある。

**SK04**

94C区中央部で検出した。南半分は調査区外となり、北側をSD36、37に切られる。出土遺物には須恵器、土師器の小片がある。

**SK05**

94C区中央部で検出した。北側を道路面により破壊され、南側は調査区外となる。規模は大きい。出土遺物には須恵器杯、高杯、土師器甕（図版10-6～15）などのほか、金属製品（図25-3）がある。

**土坑C**

土坑Cは1基確認した。

SK06

94B区中央部で検出した。西側をSD11により切られる。プランは隅丸方形を呈する。検出面での一辺は1.7mで、埋土は基本的に単一。須恵器甕一個体（図版11-16）などが出土したのを特色とする。

土坑D

土坑Dは10基確認した。

SK07

93区中央部で検出した。東側をSK32により切られる。プランは楕円形か。検出面での長径は0.4mをはかる。出土遺物には土師器高杯（図版11-17）がある。

SK08

94A区東部で検出した。南側が調査区外となる。プランは円形か。検出面での長径は1.4mをはかる。出土遺物には土師器壺（図版11-18）などがある。

SK09

94A区西部で検出した。プランは隅丸長方形を呈する。検出面での長辺は1.4mをはかる。出土遺物には須恵器高杯（図版11-19）などがある。

SK10

94B区東部で検出した。東側をトレンチにより破壊される。プランは円形を呈する。検出面での長径は1.1mをはかる。出土遺物には須恵器杯、土師器甕（図版11-20~22）などがある。

SK11

94B区東部で検出した。南側が調査区外となる。形状は不整形。出土遺物には須恵器杯、土師器甕（図版11-23~25）などがある。

SK12

94B区中央部で検出した。プランは円形を呈する。検出面での直径は0.4mをはかる。出土遺物には土師器甕（図版12-26）などがある。

SK13

94C区東部で検出した。プランは円形を呈する。検出面での直径は0.4mをはかる。出土遺物には須恵器杯、甕、土師器甕（図版12-27~32）などがある。

SK14

94C区中央部で検出した。南側が調査区外となる。検出面での一辺は2.3mをはかる。プランは隅丸方形を呈するのか。出土遺物には須恵器高杯、土師器甕（図版12-33、34）などがある。

SK15

94D区東部で検出した。南側が調査区外となる。プランは楕円形か。短径は0.5mをはか

る。出土遺物には土師器壺（図版12-35）などがある。

#### SK16

94D区東部で検出した。SE07により北側の一部が切られる。プランは楕円形を呈する。検出面での長径は2.1mをはかる。出土遺物には土師器高杯（図版12-36）などがある。

#### 溝

溝は1条確認した。

#### SD01

94B区のNR01底部で検出した。全長は3.0mをはかる。南側は調査区内部で帰結する。検出面での幅は0.8~1.0m。出土遺物には須恵器・土師器片などがある。

#### 谷地形

自然地形であるがここで扱う。

#### NR01

94B区中央部分で検出した。B区の約50パーセントを占有する。古墳時代のうちに自然埋没し、埋土上面には同時代の遺構も掘削されている。埋土は黄褐色砂質土でほぼ単一となる。なお底面には、SD01のほかにも多数の土坑Dが検出されている。出土遺物には須恵器・土師器片などがある。

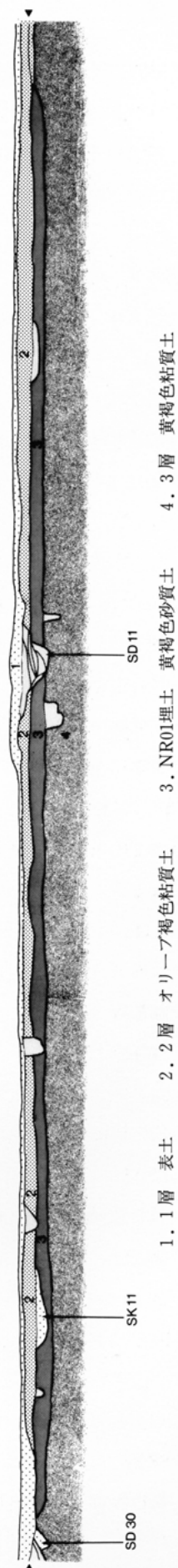


図7 NR01断面図 (94B区南壁 1:80)

## ② 奈良・平安時代の遺構

**B期の遺構** 奈良・平安時代に属する遺構は乏しく、若干の土坑が検出したに留まる。検出できた遺構には土坑A、土坑C、土坑Dがある。

### 土坑A

土坑Aは1基確認した。

### SK17

93区中央部で検出した。西側をSD06により切られ、SK19の西側を切る。残存する一辺の中央部は突出するが、この部分には被熱が確認できない。出土遺物には灰釉陶器碗（図版14-103、104）などがある。

### 土坑C

土坑Cは1基確認した。

### SK18

93区東部で検出した。プランは円形。南側をSD03により切られる。検出面での直径は2.0m、検出面からの深さが、0.5m程度の規模となる。埋土は基本的に単一。多量の須恵器が出土したのを特色とする。なお、土坑内での同一個体の出土位置は上下にばらつきを有しており、この土坑が短時間で埋まっていることを予測させる。出土遺物には多量の須恵器、土師器（図版13-56~87、図版14-88~102）などがある。

### 土坑D

土坑Dは6基報告する。

### SK19

93区中央部で検出した。プランは楕円形か。東側をSK30に西側をSK17に切られる。出土遺物には須恵器杯（図版14-105）などがある。

### SK20

94B区西部で検出した。プランは楕円形を呈する。検出面での長径は0.5mをはかる。出土遺物は製塩土器（図19-1）がある。

### SK21

94B区西部で検出した。プランは楕円形を呈する。検出面での長径は1.5mをはかる。出土遺物には須恵器杯（図版14-106）などがある。

### SK22

94B区西部で検出した。プランは楕円形を呈する。検出面での長径は1.1mをはかる。出土遺物には須恵器蓋（図版14-107）などがある。

#### SK23

94C区東部で検出した。プランは円形を呈する。検出面での長径は0.5mをはかる。出土遺物には須恵器短頸壺（図版14-108）などがある。

#### SK24

94C区東部で検出した。プランは楕円形を呈する。検出面での長径は1.0mをはかる。出土遺物には須恵器杯（図版14-109）などがある。

### ③ 平安時代末～鎌倉・室町時代の遺構

鎌倉・室町時代の遺構には掘立柱建物、柵、井戸、土坑A、土坑B、土坑D、溝などがある。遺構は調査区全域に分布している。

C期の遺構

#### 掘立柱建物

掘立柱建物については細長い調査区の形状に合わせ、前述したように基盤層の攪乱が全体的に著しいため、十分に検出できていない可能性を残す。確認できたのは6棟である。時期決定に情報が乏しく、若干の躊躇を残すものであるが、方位が後述する溝の軸線と一致していることを理由に、すべてこの時期に含めて報告する。なお、柱穴と同規模の土坑は、93区西部～94A区東部に集中する傾向にある。

#### SB03

94A区東部で検出した。規模は2×2。柱穴数は8基。SB04と接する。柱通りはよくない。柱穴埋土中から灰釉系陶器片などが出土している。

#### SB04

94A区東部で検出した。規模は2×3。柱穴数は8基。SB03と接する。柱通りはよくない。柱穴埋土中から灰釉系陶器広口瓶、小椀（図版15-115、116）などが出土している。

#### SB05

94A区西部で検出した。規模は1×2。柱穴数は6基。柱穴埋土中から灰釉系陶器片などが出土している。

#### SB06

94B区西部で検出した。規模は2×3。柱穴数は9基。柱通りはよくない。柱穴埋土中から灰釉系陶器椀、小皿（図版15-117、118）などが出土している。

#### SB07

94B区西部で検出した。規模は1×2。柱穴数は5基。柱通りはよくない。柱穴埋土中から灰釉系陶器椀（図版15-119）などが出土している。

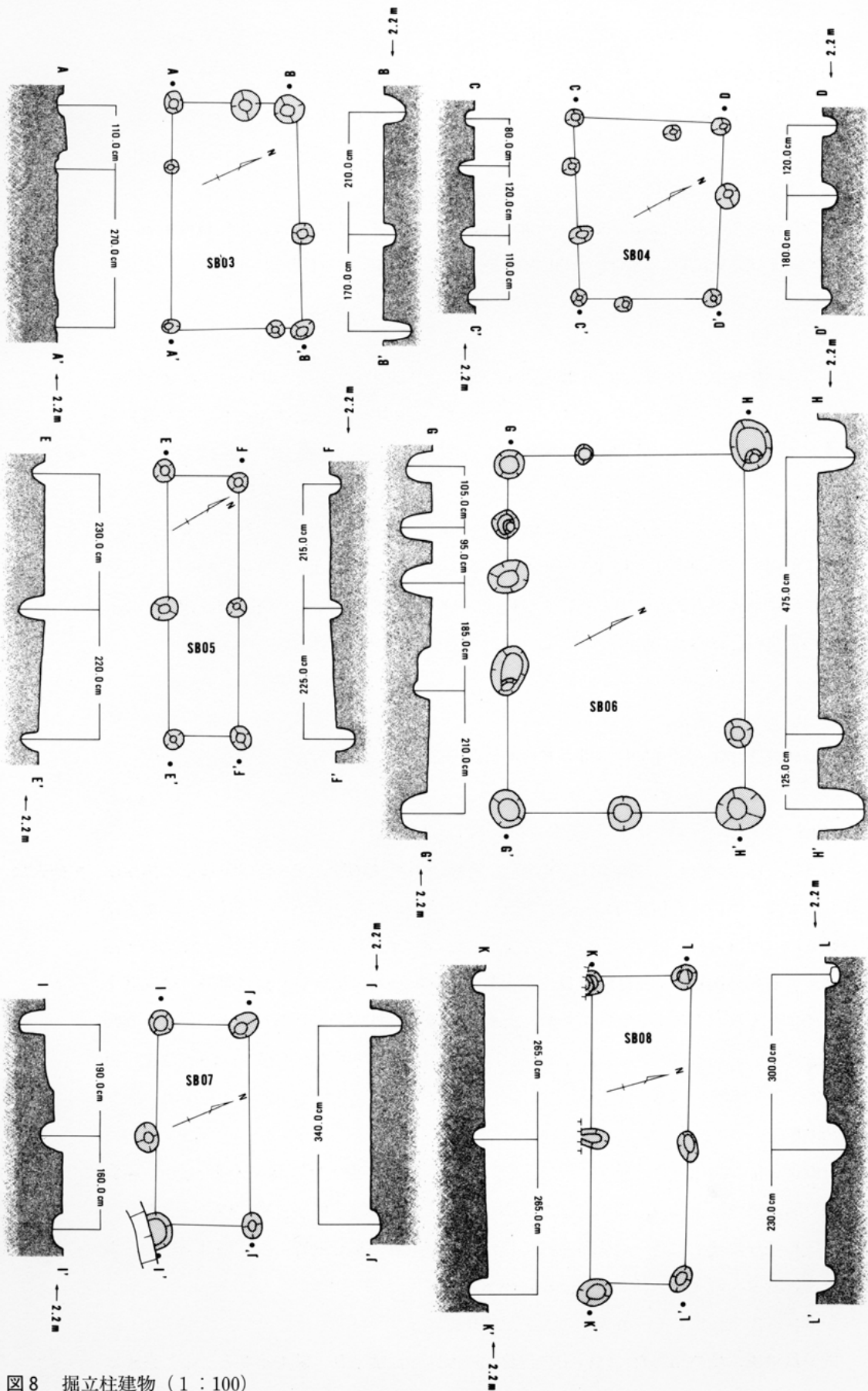


図8 掘立柱建物 (1:100)

## SB08

94D区西部で検出した。規模は1×2。柱穴数は6基。SA02と近接し、主軸がこれと一致する。出土遺物は得られなかったが、埋土の特徴などからこの時期に含めた。

## 柵

2条検出している。掘立柱建物と同様の理由で、すべてこの時期に含めて報告する。なお、やはり掘立柱建物と同様に調査区内に未検出の柵が存在した可能性が考えられる。

## SA01

94D区で検出した。柱穴数は5基。SB08の東側に位置する。全長7.4mを検出した。各柱穴の中心からはかる柱間は、東から1.9m、2.3m、1.8m、1.4m。出土遺物は須恵器片が認められるのみであるが、埋土の特徴などからこの時期に含めた。

## SA02

94D区で検出した。柱穴数は6基。SB08に近接し、主軸がこれと一致する。全長13.2mを検出した。土坑Dにより柱穴が一か所掘り取られた可能性を残す。各柱穴の中心からはかる柱間は、東から2.5m、2.1m、4.5m、1.5m、2.6m。出土遺物は得られなかったが、埋土の特徴などからこの時期に含めた。

## 井戸

11基確認できた。基本的には井戸枠を持つ形状となる。

## SE01

94A区西部で検出した。掘り方の長径は6.1mとやや大規模となる。形状は壁面の角度がなだらかな、播鉢状を呈する。また、底部には井戸枠が残存している。構造は、縦板組隅柱棧どめ(宇野1982)となる。なお、中央部には曲物が一段設置されていた。曲物の上部には、管状の植物質が直立した状態で出土したが、民俗事例にみる井戸廃絶儀礼に関連するものであるかは判断できない。枠材以外の出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿、鉢、土師器皿、鍋、貿易陶磁碗(図版15—120~161)などのほか、金属製品(図25—1)、加工円盤(図20—1~3)がある。

大規模な  
井戸

## SE02

94A区西部で検出した。掘り方の長径は3.0mをはかる。南半分は調査区外となり、西側をSD28により破壊される。底部には井戸枠が残存し、構造は、縦板組隅柱棧どめとなる。なお、中央部には曲物が一段設置されていた。枠材以外の出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿、土師器鍋(図版16—162~171)などがある。

## SE03

94B区中央部で検出した。ほぼ中央に現代の水路が設置され、調査不能となる。底部に

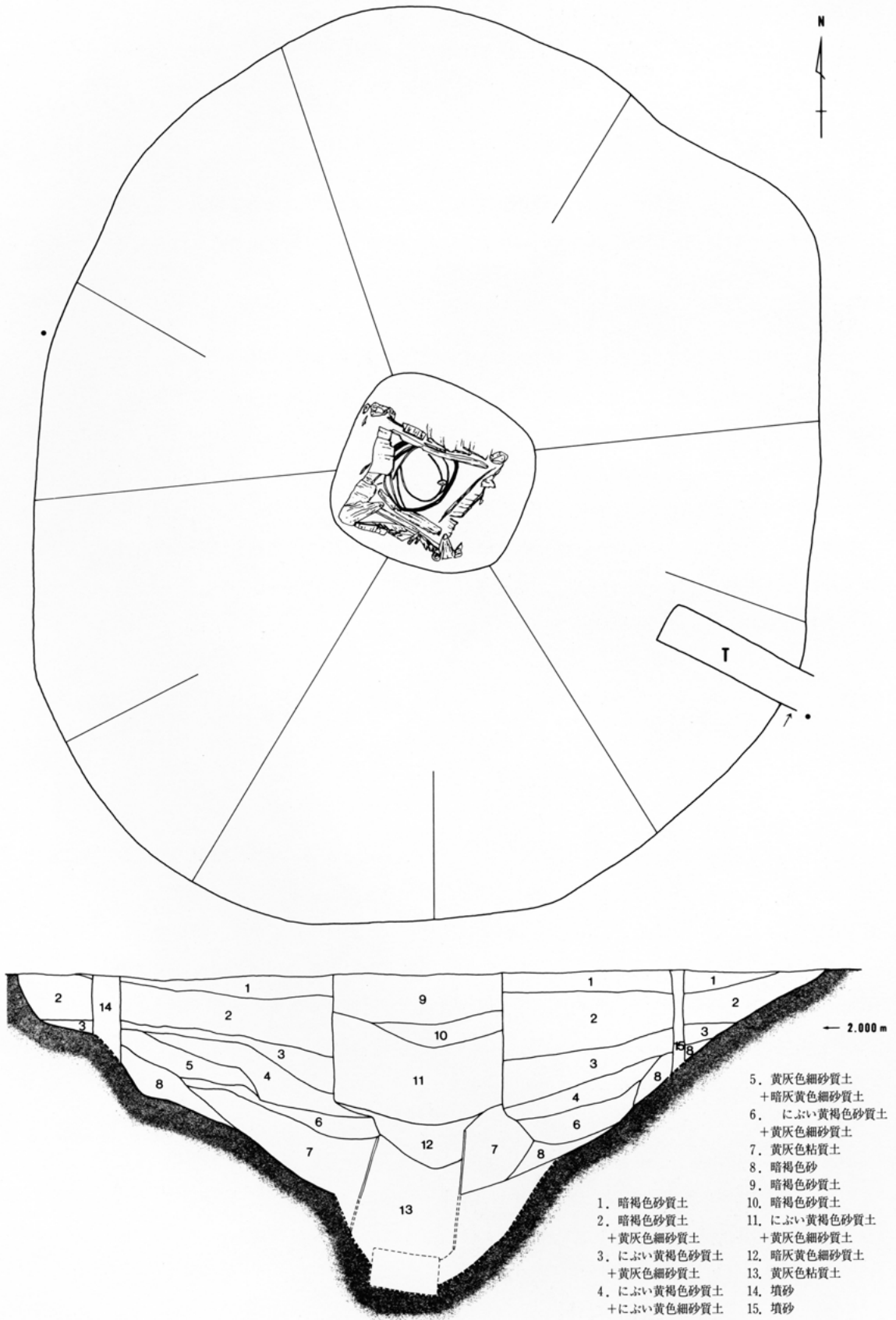


図9 SE01 (1:40)

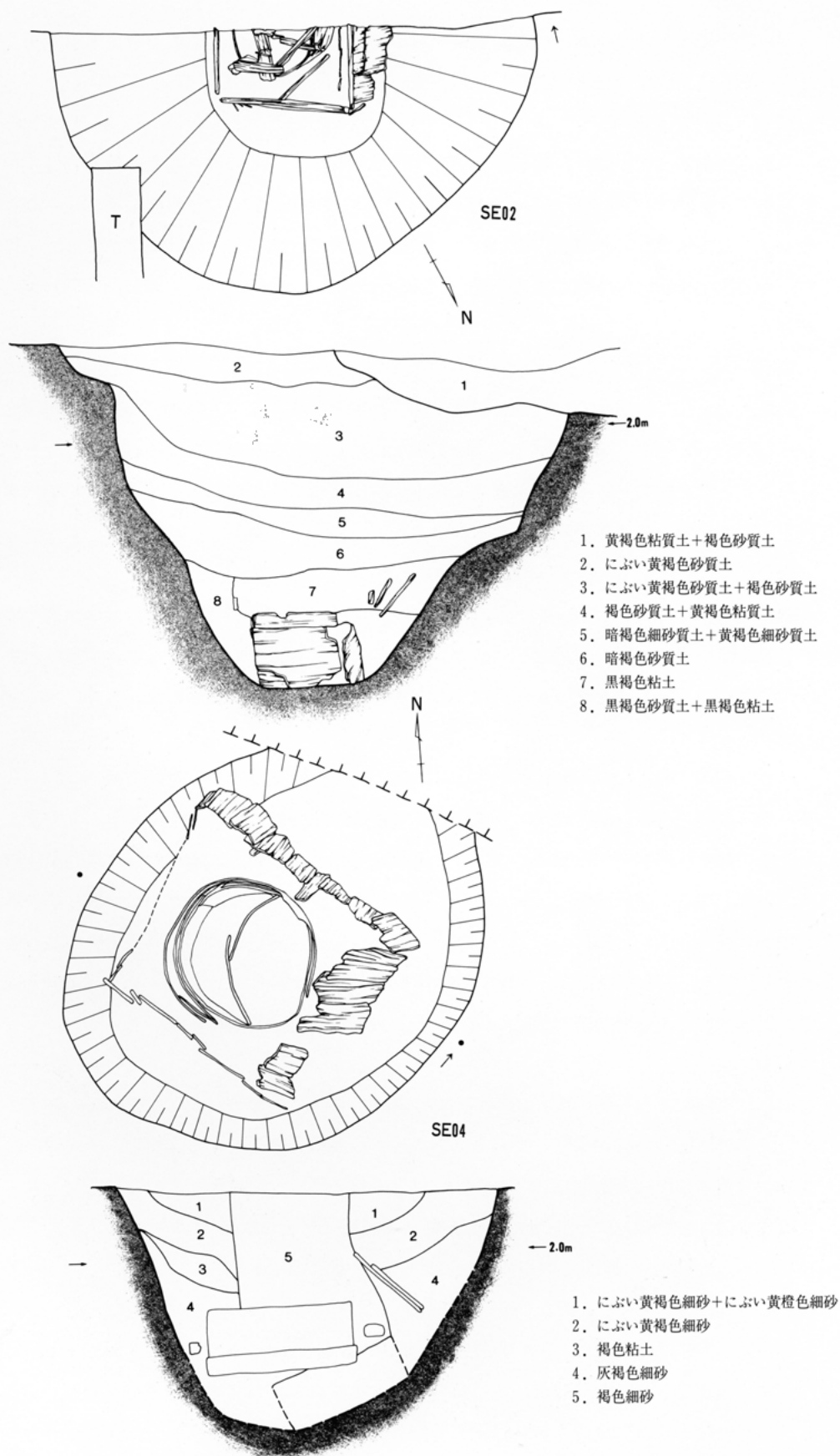


図10 SE02・04 (1:40)

は井戸枠が確認できないが、埋土の観察からこれが抜き取られた可能性を考えることができる。出土遺物には灰釉系陶器椀、小皿、壺（図版16—172～184）などがある。

SE04

94B区西南部で検出した。北側の一部を現代埋設管によって破壊される。掘り方はやや楕円形で、短径は2.3mをはかる。底部には井戸枠が残存し、構造は、縦板組隅柱棧どめとなる。なお、中央部には曲物（図24—1）が二段設置されるが、下段は風化が著しい。枠材以外の出土遺物には灰釉系陶器小皿（図版16—185、186）などのほか、金属製品（図25—2）がある。

SE05

94C区北東部で検出した。北側の一部が調査区外となる。掘り方はやや楕円形で短径は2.1mをはかる。井戸枠が確認できないが、埋土の観察からこれが完全に抜き取られた可能性を考えることができる。また、底面には小土坑が確認でき、曲物の痕跡である可能性を残す。出土遺物には灰釉系陶器片などがある。

SE06

94C区中央部で検出した。掘り方の長径は1.0mをはかる。小型となるが、底部が湧水層まで達していることから井戸と判断した。井戸枠は確認できない。出土遺物は須恵器、土師器の小片が確認できたのだが、埋土などの特徴からこの時期に含めた。

SE07

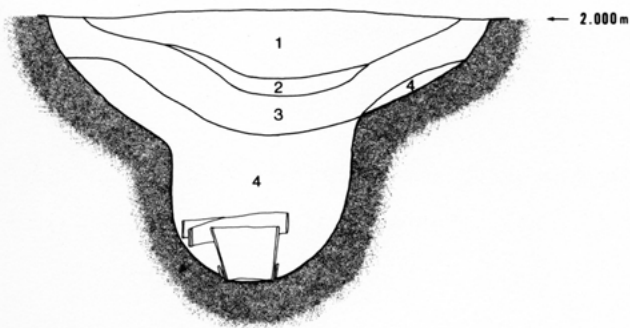
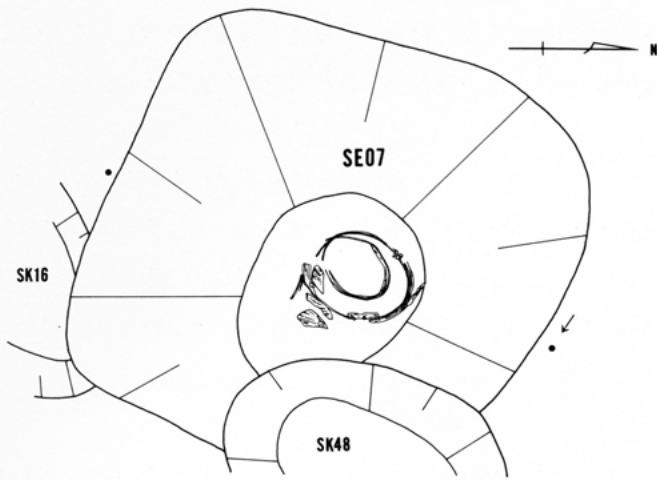
94D区東部で検出した。東側の一部をSK48に切られる。掘り方の長径は2.4mをはかる。井戸枠は確認できないが、埋土の観察からこれが抜き取られた可能性を考えることができる。中央部には曲物が二段設置されるが、全体に風化が著しい。出土遺物には灰釉系陶器椀、小皿、羽釜、土師器鍋（図版16—187～200）などがある。なお、井戸枠抜き取り坑の埋土中から拳大～人頭大程度の河原石が数点出土している。石材は砂岩、凝灰岩、結晶片岩となる。また、曲物の脇には、管状の植物質が直立した状態で出土しているが、SE01と同様に民俗事例にみる井戸廃絶儀礼に関連するものであるかは判断できない。

SE08

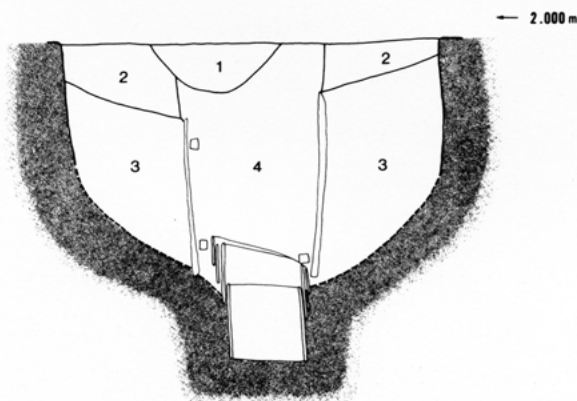
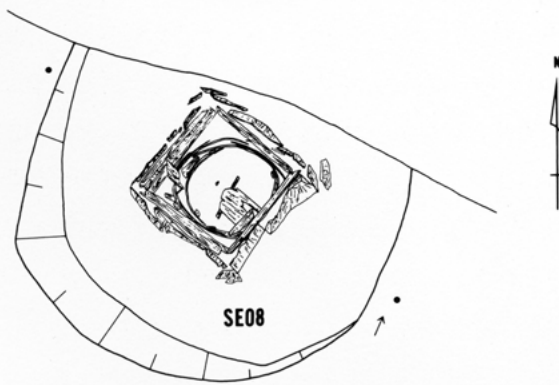
94D区東部で検出した。掘り方の長径は2.0mをはかる。北側が現代埋設管のため破壊される。底部には井戸枠が残存している。構造は縦板組横棧どめとなる。なお、中央部には曲物が設置されていた。曲物（図24—2～5）は入れ子状に二段重ね、木製のくさびを打って固定する。枠材以外の出土遺物には灰釉系陶器椀（図版16—201）などのほか陶丸（図19—10～11）、加工円盤（図20—4～7）がある。

SE09

94D区南西部で検出した。南側の一部が調査区外となる。掘り方の長径は0.5mをはかる。井戸枠は確認できないが、埋土の観察からこれが抜き取られた可能性を考えることができる。底面には小土坑が確認でき、曲物の痕跡である可能性を残す。南半分は調査区外となる。出土遺物は得られなかったが、埋土などの特徴からこの時期に含めた。



1. 黒褐色細砂質土
2. 暗褐色細砂質土
3. 黒褐色細砂質土
4. 黒褐色粘土



1. にふい黄褐色細砂質土
2. 暗褐色粘質土
3. 黒褐色粘質土
4. 黒褐色粘土

図11 SE07・08 (1:40)

SE10

94D区南西部で検出した。SD24を切り、南側の一部が調査区外となる。掘り方の短径は0.8mをはかる。井戸枠は確認できないが、埋土の観察からこれが抜き取られた可能性を考えることができる。なお、中央に曲物（図24-6）が二段設置されるが、下段は風化が著しい。枠材以外の出土遺物には灰釉系陶器碗、壺、甕（図版16-202~205）などがある。

SE11

94D区西部で検出した。掘り方の直径は0.8mをはかる。小型となるが、底部が湧水層まで達していることから井戸と判断した。井戸枠は確認できない。出土遺物は得られなかったが、埋土などの特徴からこの時期に含めた。

土坑A

土坑Aは5基確認した。

SK25

93区東部で検出した。東側が調査区外、北側は現代の排水溝が存在するため調査不能となる。出土遺物は確認できなかったが、埋土の特色とSD04を切っていることからこの時期に含めた。

SK26

93区と94A区の境界で検出した。プランはややゆがむ隅丸長方形を呈する。南側の一部を現代の天地返しにより破壊される。検出面での長辺は2.9mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿、鉢、土師器皿（図版17-206~210）などがある。

SK27

94A区と94B区の境界部で検出した。南側は現代の排水溝が存在するため調査不能となる。出土遺物には土師器皿（図版17-211）などがある。

SK28

94A区東部で検出した。北側は現代の排水溝が存在するため調査不能となる。検出面での短辺は3.1mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿、土師器皿、貿易陶磁碗、皿（図版17-212~231）などのほか、土錘（図19-4、5）がある。

SK29

94B区東部で検出した。北側は現代の排水溝が存在するため調査不能となる。検出面での一辺は3.0mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器片などがある。

土坑B

土坑Bは11基確認した。

土坑Bの  
様相

## SK30

93区西部で検出した。西側がSK19を切る。検出面での長辺は2.8mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器片などがある。

## SK31

94A区東部で検出した。北側は現代の排水溝が所在するため調査不能となる。検出面での短辺は0.9mをはかる。出土遺物は須恵器、土師器の小片が確認できたのみだが、形状、埋土などの特徴からこの時期に含めた。

## SK32

93区西部で検出した。北側をSK33に切られ、西側がSK07を切る。検出面での長辺は3.7mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器片などがある。

## SK33

93区西部で検出した。南側がSK33を切る。検出面での長辺は2.7mをはかる。出土遺物は須恵器、土師器の小片が確認できたのみだが、埋土などの特徴からこの時期に含めた。

## SK34

93区西部で検出した。北側の一部は現代の排水溝が所在するため調査不能となる。検出面での長辺は5.1mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗(図版17-232~234)などがある。

## SK35

94A区東部で検出した。SK03の東側を切り、SB03と重複する。北側は現代の排水溝が所在するため調査不能となる。検出面での短辺は1.0mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器片などがある。

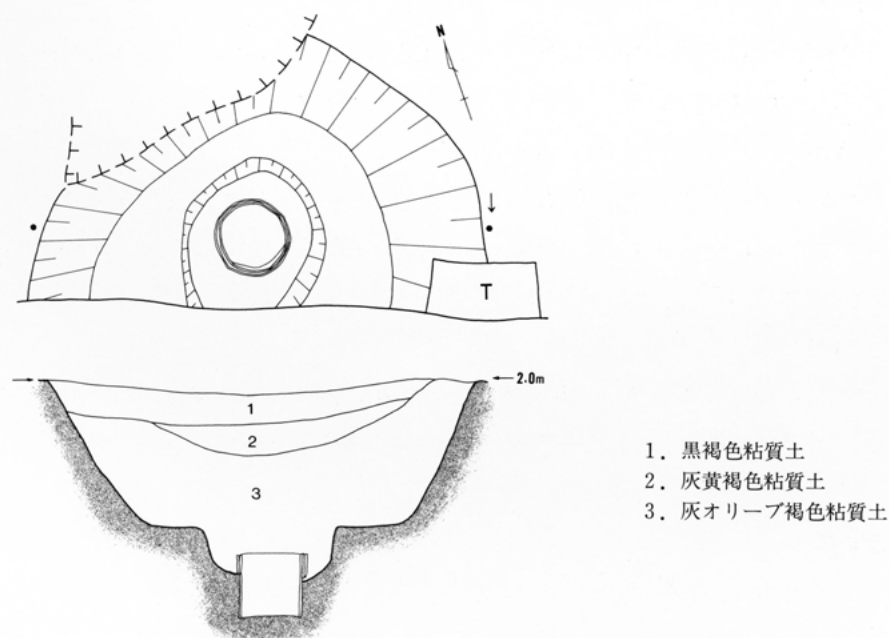


図12 SE10 (1 : 40)

SK36

94A区中央部で検出した。南側が調査区外となる。検出面での短辺は2.0mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器片などがある。

SK37

94A区中央部で検出した。検出面での長辺は2.9mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器椀、小皿（図版17-235~237）などがある。

SK38

94A区中央部で検出した。北側は現代の排水溝が所在するため調査不能となる。検出面での短辺は1.0mをはかる。出土遺物は須恵器、土師器の小片が確認できたのみだが、形状、埋土などの特徴からこの時期に含めた。

SK39

94A区西部で検出した。検出面での長辺は0.3mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器片などがある。

SK40

94A区西部で検出した。検出面での長辺は3.9mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器片などがある。

土坑D

土坑Dは10基報告する。

SK41

93区西部で検出した。西側と東側を耕作により破壊される。プランは不整形。出土遺物には灰釉系陶器小皿（図版17-238）などがある。

SK42

94A区東部で検出した。プランは円形を呈する。検出面での直径は1.0mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器小椀（図版17-239）などがある。

SK43

94A区東部で検出した。プランは楕円形を呈する。検出面での長径は0.5mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器椀（図版17-240）などがある。

SK44

94A区東部で検出した。プランは楕円形を呈する。検出面での長径は0.5mをはかる。出土遺物には貿易陶磁椀（図版17-241）などがある。

SK45

94A区中央部で検出した。プランは楕円形を呈する。検出面での長径は0.5mをはかる。出土遺物には貿易陶磁椀（図版17-242）などがある。

## SK46

94A区中央部で検出した。プランは円形を呈する。検出面での直径は0.4mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗（図版17-243~245）などがある。

## SK47

94C区東部で検出した。プランは不整形。東側をSD14に切られる。出土遺物には灰釉系陶器小皿（図版17-246）などがある。

## SK48

94D区東部で検出した。西側がSE07を切り、北側は調査区外となる。プランはやや歪む楕円形か。灰釉系陶器碗（図版17-247~249）などがある。

## SK49

94D区西部で検出した。東側をSD24に切られる。出土遺物には灰釉系陶器短頸壺（図版17-250）などがある。

## SK50

94D区西部で検出した。SD24を切り、南側を現代埋設管により破壊される。出土遺物には灰釉系陶器碗（図版17-251、252）がある。

## 溝

溝は26条確認した。

## SD02

93区東部で全長8.7mを検出した。東側を天地返しにより破壊される。検出面での幅は0.7~1.0mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿、壺（図版18-253~265）などのほか加工円盤（図20-8）がある。

## SD03

93区東部で全長13.6mを検出した。中央で直角に屈曲するが、南側は天地返しにより上面を破壊される。検出面での幅は1.2~1.7mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗（図版18-266）などがある。

## SD04

93区東部で全長7.2mを検出した。中央で直角に屈曲する。東側をSK25によって切られ、北側は天地返しにより破壊される。検出面での幅は0.4~0.9mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗（図版18-267~269）などのほか砥石（図23-1）がある。

## SD05

93区中央部で全長7.7mを検出した。SD06の南北ラインと並行し、北端は調査区内で帰結する。検出面での幅は0.7~1.3mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿（図版18-270~274）などのほか加工円盤（図20-9）がある。

SD06

93区中央部で全長12.9mを検出した。中央で直角に屈曲する。南北ラインはSD05と平行するが、東西ラインは現代排水溝直下のため不明となる。検出面での幅は0.7~1.1mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿、壺、貿易陶磁碗（図版18—275~283）などのほか加工円盤（図20—10、11）がある。

SD07

94区東部で全長14.5mを検出した。調査区内で蛇行する。検出面での幅は0.8~1.4mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗（図版18—284）などがある。

SD08

94A区東部で全長13.7mを検出した。SD07と同様に調査区内で蛇行する。検出面での幅は0.9~1.4mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿、壺、土師器皿、貿易陶磁碗（図版18—285~302）などがある。

SD09

94A区中央部で全長8.1mを検出した。南側は調査区内で帰結するが、北側は現代攪乱により破壊され不明。SD10と平行する。検出面での幅は0.9~1.2mをはかる。出土遺物は須恵器、土師器片のみだが、埋土の特徴からこの時期に含めた。

SD10

94A区中央部で全長13.7mを検出した。SD09と平行する。検出面での幅は1.6~2.0mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿、土師器皿、鍋、貿易陶磁碗、皿（図版19—303~333）などのほか加工円盤（図20—12）がある。

SD11

94B区中央部で全長13.1mを検出した。SK06を切る。検出面での幅は0.4~1.2mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗（図版19—334、335）のほか、施釉陶器などがある。

SD12

94B区中央部で全長4.7mを検出した。北側は調査区内で帰結する。検出面での幅は0.7~0.9mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗（図版19—336~338）などがある。

SD13

94B区中央部で全長21.3mを検出した。一部を現代の農業用水埋設管設置により破壊され、SE03を切る。検出面での幅は0.9~3.7mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿、貿易陶磁碗（図版19—339~346）などがある。

SD14

94C区東部で全長12.0mを検出した。SD15と並行する。検出面での幅は2.0~3.7mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、小皿、土師器羽釜、貿易陶磁碗（図版19—347~363）などがある。

SD15

94C区東部で全長3.1mを検出した。SD14と並行する。北端は調査区中央の道路面造成に

より削平される。検出面での幅は0.6mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗(図版20—364)などがある。

#### SD16

94C区中央部で全長11.4mを検出した。SD34、35と平行する。また、SD36、37と直交し、これらに切られる。北端は調査区中央の道路面造成により削平される。検出面での幅は0.5~1.6mをはかる。出土遺物は得られなかったが、埋土の特徴、遺構の重複関係からこの時期に含めた。

#### SD17

94C区西部で全長4.3mを検出した。SD18、19と平行する。北側は調査区内で帰結し、南側は現代の農業用水埋設管設置により破壊される。検出面での幅は0.2~0.6mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器片などがある。

#### SD18

94C区西部で全長2.8mを検出した。SD17、19と平行する。北側を土坑Dに、南側をSD40により切られる。検出面での幅は0.2~0.4mをはかる。出土遺物は得られなかったが、埋土の特徴、遺構の重複関係からこの時期に含めた。

#### SD19

94C区西部で全長4.2mを検出した。南側はSD40に切られる。検出面での幅は2.3~2.5mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗(図版20—365)などがある。

#### SD20

94C区西部で全長3.8mを検出した。SD39と平行し、これに切られる。南東部は調査区内で帰結する。検出面での幅は0.5~0.8mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、施釉陶器折縁深皿(図版20—366~368)などがある。

#### SD21

94D区東部で全長6.8mを検出した。北西端は現代の農業用水埋設管設置により破壊される。検出面での幅は0.6~0.9mをはかる。出土遺物は得られなかったが、埋土の特徴からこの時期に含めた。

#### SD22

94D区東部で全長17.7mを検出した。一部を現代の農業用水埋設管設置により破壊される。SD23、41、42と並行し、これらに切られる。検出面での幅は0.7mをはかる。出土遺物には陶丸(図19—12)のほか、灰釉系陶器片などがある。

#### SD23

94D区中央部で、全長16.5mを検出した。一部を現代の農業用水埋設管設置により破壊される。SD22、41と並行し、このうちSD22を切り、SD41に切られる。検出面での幅は0.7~1.2mをはかる。出土遺物は得られなかったが、埋土の特徴、遺構の重複関係からこの時期に含めた。

SD24

94D区中央部で全長11.8mを検出した。一部を現代の農業用水埋設管設置により破壊され、南側をSE10、中央をSK50に切られ、北側ではSK49を切る。検出面での幅は0.3~0.8mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗（図版20—369、370）などがある。

SD25

94D区中央部で全長3.8mを検出した。南側は調査区内で帰結する。検出面での幅は0.4~0.8mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗（図版20—371~373）などがある。

SD26

94D区西部で全長10.7mを検出した。SD27と平行する。現代攪乱により南側を破壊される。検出面での幅は0.4~0.9mをはかる。なお、この溝以西は検出面とした3層上面が落ち込み、微高地の西端を示している。出土遺物は得られなかったが、埋土の特徴からこの時期に含めた。

SD27

94D区西部で全長12.3mを検出した。SD26と平行する。検出面での幅は1.8~2.1mをはかる。出土遺物には灰釉系陶器碗、貿易陶磁壺（図版20—374~382）などのほか陶丸（図19—13、14）、砥石（図23—3）がある。

④ 江戸時代の遺構

D期の遺構

江戸時代の遺構は、溝を確認したに留まる。これらは調査区の全域で検出しているが、調査区を南北に横切る数本の現道の直下に集中する傾向がうかがえる。

溝

溝は16条確認した。

SD28

94A区中央部で、全長12.9mを検出した。SD29、30と並行し、これらを切る。検出面での幅は2.4~2.6mと、やや規模が大きい。出土遺物には近世土器（図18—1~5）、加工円盤（図20—13~15）などがある。

SD29

94A区中央部で、全長12.9mを検出した。SD28、30と並行し、後者を切り、前者に切られる。検出面での幅は0.3~1.0mをはかる。出土遺物には近世土器（図18—6）などがある。

SD30

94A区中央部で、全長12.8mを検出した。SD28、29と並行し、これらに切られる。検出面での幅は0.3mをはかる。出土遺物は確認できなかったが、埋土の特徴、遺構の重複関係

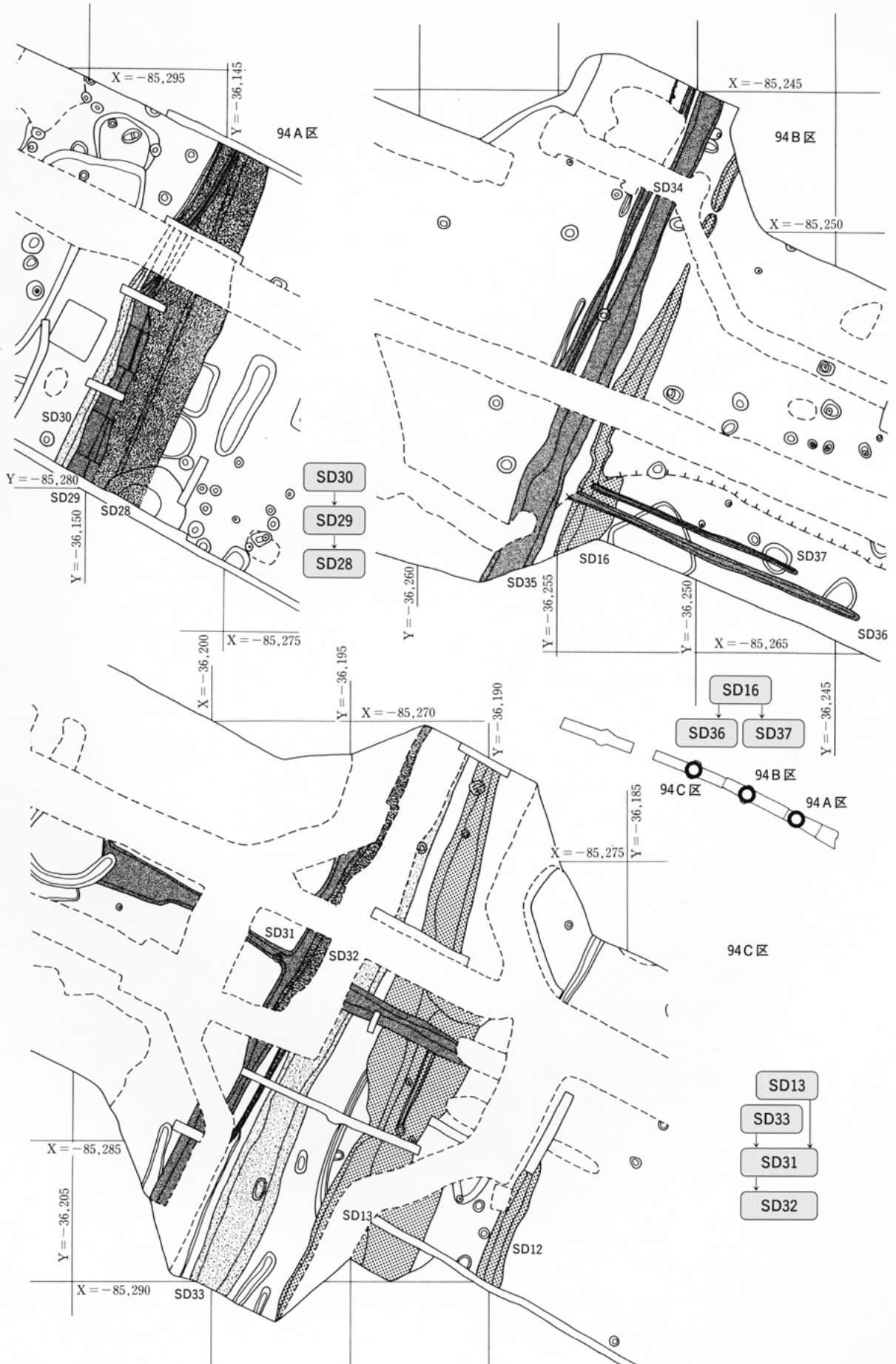


図13 SD変遷図1 (1 : 200)

などからこの時期に含めた。

**SD31**

94B区中央部で、東西14.5m、南北14.5mを検出した。直交する2条の溝だが、埋土・形状などに差異がみられないことから、同時期と判断し、同一に扱う。SD13、33を切り、SD32に切られる。検出面での幅は0.4~1.0mをはかる。出土遺物には近世土器(図18-7)などがある。

**SD32**

94B区中央部で、全長16.5mを検出した。ほとんどが現代の農業用水埋設管設置により破壊される。SD31の南北方向と並行し、これを切る。検出面での幅は0.2mをはかる。出土遺物には近世土器(図18-8、9)などがある。

**SD33**

94B区中央部で、全長21.2mを検出した。ほとんどが現代の農業用水埋設管設置により破壊されるほか、SD31の東西方向に切られる。検出面での幅は1.6~1.9mをはかる。出土遺物には近世土器(図18-10、11)などがある。

**SD34**

94C区中央部で、全長11.2mを検出した。SD35、SD16と並行する。南端は現代の農業用水埋設管設置により破壊されるが、調査区内部で帰結する。検出面での幅は0.2~0.4mをはかる。出土遺物は確認できなかったが、埋土の特徴からこの時期に含めた。

**SD35**

94C区中央部で、全長18.6mを検出した。SD34、SD16と並行する。検出面での幅は0.7~1.5mをはかる。出土遺物には近世土器(図18-12)などがある。

**SD36**

94C区中央部で、全長11.2mを検出した。SD37と並行する。SD16と直交し、これを切る。検出面での幅は0.3~0.4mをはかる。出土遺物には近世土器(図18-13~21)などのほか加工円盤(図20-16)、金属製品(図25-5)がある。

**SD37**

94C区中央部で、全長8.0mを検出した。SD36と並行する。SD16と直交し、これを切る。検出面での幅は0.2~0.3mをはかる。出土遺物は確認できなかったが、埋土の特徴、遺構の重複からこの時期に含めた。

**SD38**

94C区西部で、全長9.8mを検出した。SD39、40と並行し、前者を切る。検出面での幅は0.6~0.7mをはかる。西側は調査区内で帰結する。出土遺物は加工円盤(図20-17)のほかは確認できなかったが、埋土の特徴、遺構の重複からこの時期に含めた。

**SD39**

94C区西部で、全長21.3mを検出した。SD20、SD38、SD40と並行し、前者を切り、後二者に切られる。検出面での幅は3.2~3.6mとやや規模が大きい。出土遺物には近世土器

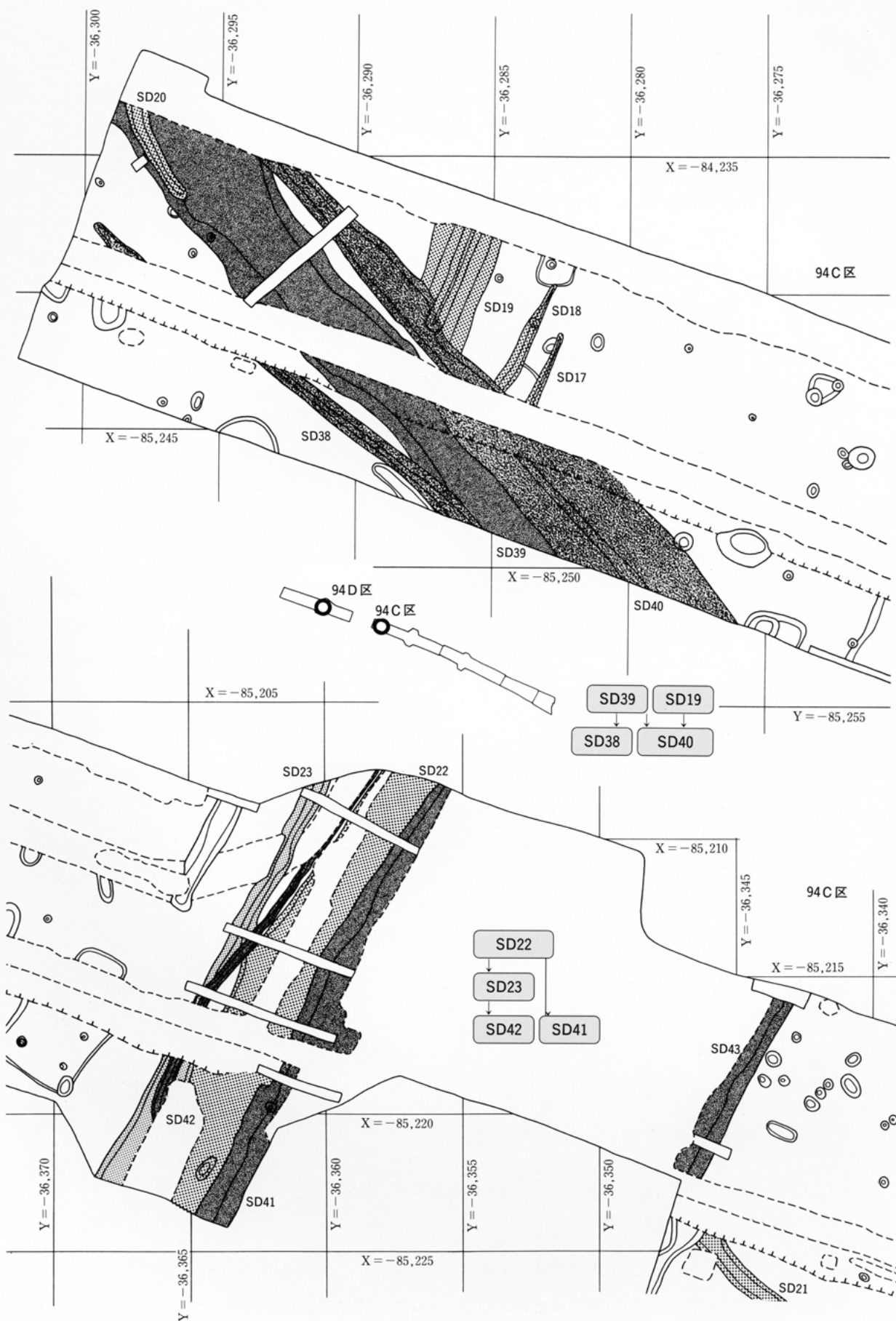


図14 SD変遷図2 (1:200)

(図18-22) などのほか加工円盤 (図20-18) がある。

**SD40**

94C区西部で、全長21.5mを検出した。SD38、SD39と並行し、後者を切る。検出面での幅は0.9~3.5mとやや規模が大きい。出土遺物には近世土器 (図18-23~26) などのほか加工円盤 (図20-19~21) がある。

**SD41**

94D区中央部で、全長18.0mを検出した。SD22、23、42と並行し、このうちSD23を切る。東側は現代攪乱により破壊される。出土遺物には近世土器 (図18-27、28) などのほか、金属製品 (図25-4) がある。

**SD42**

94D区中央部で、全長14.7mを検出した。形状はやや蛇行する。SD22、23、41と並行し、前二者を切る。ほとんどが現代の農業用水埋設管設置により破壊される。検出面での幅は0.3~0.4mをはかる。出土遺物には近世土器小片がある。

**SD43**

94D区中央部で、全長12.0mを検出した。西側は現代攪乱により破壊される。検出面での幅は0.6mをはかる。出土遺物は確認できなかったが、埋土の特徴からこの時期に含めた。

(池本正明)



## 第3章 遺物

今回の出土遺物には、土器・陶器類、石製品、金属製品などがみられるが、量的には土器・陶器類が圧倒的に多い。

以下、これらについて土器・陶器類から順に具体的な説明を加えるが、記述の混乱を避けるため土器・陶磁器類の種類と器種について事前に若干の整理を行う。

### 種類

種類としては土器と陶磁器がある。なお後者はさらに須恵器、灰釉陶器、灰釉系陶器(1)、施釉陶器、貿易陶磁、近世土器と通例に従い呼称する。

### 器種

器種には壺(瓶)、長頸瓶、浄瓶、甕、高杯、鉢、杯、蓋、盤、椀、皿、小皿、播鉢、甑、鍋、羽釜などを用いる。ただし、江戸時代の土器については「輪禿皿」、「銭甕」、「丸皿」、「広東茶碗」、「灯明皿」、「箱型湯呑」などの名称を便宜的に使用する。

なお、法量は巻末の付表を参照とする。

## (1) 土器

ここでは、前章の時期区分に従い時代別に記述する。

### ① 弥生時代～古墳時代前期の土器

弥生時代～古墳時代前期の土器は、包含層中または後世の遺構に混入して出土しており、遺構に伴う資料ではない。出土量は乏しく、大半がローリングを強く受けた極小片となる。高杯1点を図示した。図15-1は94B区出土。杯部がやや深く脚部がやや高い形状。外面にはラフなミガキ調整を施すが、部分的にハケメ調整の痕跡を残す。脚部には、円形の透かしが、三か所に各縦二段施される。

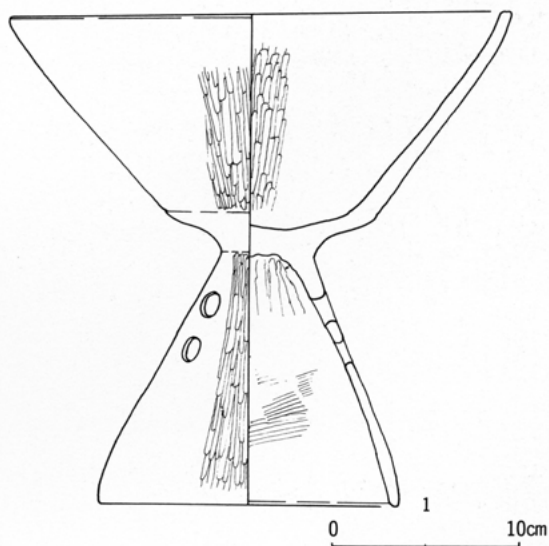


図15 弥生時代～古墳時代の土器

## ② 古墳時代の土器

### A期の土器

古墳時代の土器は、須恵器、土師器がある。分布上の特徴は、94B区にやや乏しく、93区、94A区と94C区、94D区にまとまりをみることができる。なお本節が用いる年代観は(赤塚 1992)、(斎藤 1989)による。

1はSB01出土。須恵器の蓋で、大振り。天井部外面に回転ヘラ削り調整を加える。6世紀中頃。

2はSB02出土。土師器でS字甕の口縁部片。外面はハケメ調整。部分的にススが付着する。4世紀。

3はSK01出土。須恵器の杯。高台は低く、体部が屈曲する形状。器壁は厚く、形状はやや歪む。外底部には回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り調整をラフに加える。使用痕が明瞭。7世紀後半。

4、5はSK02出土。いずれも須恵器。4は蓋。器壁は薄い。天井部外面に回転ヘラ削り調整を加える。5は甑。口縁部を欠く。体部はバケツ状を呈し、底部にはキリヌキによる透かしを持つ。外面には幅が広く浅い沈線を一条巡らす。外面はタタキ調整後、下胴部には縦方向のケズリ調整をラフに加える。いずれも6世紀後半。

### SK05資料

6～15はSK05出土。6～9は須恵器、10～15は土師器となる。6～8は杯。かえりを持つ形状。かえりより上部はやや長い。器壁は6がやや厚めだが、7、8は薄くシャープ。いずれも底部外面は回転ヘラ削り調整。6世紀中頃。9は高杯。体部は丸みを帯びる。脚部にはキリヌキによる長方形の透かしを三か所施す。杯部下方は回転ヘラ削り調整、脚部外面にはカキメ調整を施す。やはり6世紀中頃。10～15は、いずれもいわゆる宇田型甕3類(赤塚 1994)。10は、全形をとどめ、口縁部がやや直立気味に外反し、端部で肥厚する。体部は卵型を呈し、台部で大きく開く。外面はハケメ調整。口縁部は横ナデ調整を施す。台部内面は、折り返しの痕跡をとどめる。いずれも6～9と同時期か。

### 大型の甕

16はSK06出土。須恵器の甕で、肩が張る体部に、直立気味に外反する口縁部を持つ。端部は縁帯を形成するが、ラフとなる。底部は欠落するが、丸底を呈するののか。体部外面にタタキ調整。内面の当て具痕はナデ消す。縁帯にはヘラによる沈線を一条、頸部の外面には突帯とクシによる波状文を施す。5世紀末。

17はSK07出土。土師器の高杯。やや浅い杯部に、低く太い脚部を持つ。脚部は屈曲する。内外面ナデ調整。なお、口縁部付近の内外面にはススが付着し、蓋として転用されているのかもしれない。5世紀後半。

18はSK08出土。土師器の壺。完形。形状は卵型の体部に、鈍く外反する口縁部を持つ。やや尖底気味な丸底。外面は、体部下方に縦方向のケズリ調整を施した後、全面にラフなミガキ調整を加える。使用痕は確認できない。4世紀後半。

19はSK09出土。須恵器の高杯。杯身はかえりを持ち、やや高い脚部が付く。脚部はキリ

ヌキによる長方形の透かしを三か所設定する。端部は屈曲し、縁帯を形成する。杯部下方には回転ヘラ削り調整を施す。成形は全体的にシャープだが、やや焼成不良となる。5世紀末～6世紀前半。

20～22はSK10出土。20は須恵器、21、22は土師器となる。20は杯。かえりを持つ形状。器壁はやや厚め。底部外面は回転ヘラ削り調整。全体にローリングが著しい。6世紀後半。21、22は甕。21は口縁部片。いわゆる長胴甕で、体部はやや丸みを帯び、屈曲して口縁部を形成する。口縁部は長く直線的で、端部で縁帯を形成する。縁帯は、上方にやや突出し、このため中央がくぼみ、沈線状を呈する。調整は、口縁部外面が横ナデ調整。体部、口縁部内面はハケメ調整を施す。22は小型。球形の体部と短く屈曲する口縁部を持つ。端部は丸みを帯びる。調整は全体に風化が著しく不明瞭であるが、体部外面にはハケメ調整を施すのか。いずれも20と同時期か。

SK10資料

23～25はSK11出土。23は須恵器、24、25は土師器となる。23は杯。かえりを持つ形状。器壁はやや厚め。外底部には回転ヘラ削り調整後にヘラ記号を刻む。6世紀後半。24、25は甕。25は、いわゆる長胴甕で、体部は丸みを帯び、屈曲して口縁部を形成する。丸底で口縁部は長く直線的。端部には縁帯を形成し、上端が突出する。縁帯は中央がややくぼみ沈線状を呈する。調整は、口縁部外面が横ナデ調整。体部や口縁部内面には、ハケメ調整を施す。24も25と基本的には同一。ただし口縁部の縁帯がややラフな形状で、上端はやや丸みを帯びる。いずれも23と同時期か。

SK11資料

26はSK12出土。土師器の甕。口縁部片で、いわゆる長胴甕。体部はやや丸みを帯び、屈曲して口縁部を形成する。口縁部は長く直線的で、端部で縁帯を形成する。縁帯は上方に突出する。調整は、口縁部外面が横ナデ調整。体部、口縁部内面はハケメ調整を施す。6世紀後半頃か。

27～32はSK13出土。27～31が須恵器、32が土師器となる。27～30は杯で、27が無台、28～30が有台となる。27は丸みをもった底部に外反する体部を持つ。深手。外底部は無調整。28～30は高台は低く、体部が屈曲する形状。器壁は薄い。外底部には28、30が回転ヘラ切り痕、29には回転糸切り痕を残すが、いずれもこれを回転ヘラ削り調整でラフに消す。なお、27、28、29は外底部にヘラ記号を施す。31は甕。外面に黄土を塗布する特殊な例。口縁部を欠く。体部は肩で稜を持つ。高台は外傾する。下胴部は回転ヘラ削り調整。体部の両稜以下に沈線二条で区画された文様帯を持つ。文様帯にはクシによる刻目文を充填する。いずれも8世紀初頭だが、29は、これよりやや下がるのか。32は甕。大型品の口縁部片。体部はやや丸みを帯び、屈曲して口縁部を形成する。口縁部は長く直線的で、端部で縁帯を形成する。縁帯は中央が浅くくぼむ。調整は、口縁部外面が横ナデ調整。体部、口縁部内面はハケメ調整を施す。27、28、30、31と同時期か。

33、34はSK14出土。前者は須恵器、後者は土師器。33は高杯。かえりを持つ杯身に、やや高い脚部が付く形状。脚部には透かしは持たない。端部は屈曲し、縁帯を形成する。杯部下方には回転ヘラ削り調整を施す。成形は全体的にシャープ。5世紀末～6世紀前半。

34は宇田型甕3類。口縁部がやや直立気味に外反し、端部で肥厚する。体部外面はハケメ調整。口縁部は横ナデ調整を施す。32と同時期か。

35はSK15出土。土師器の壺で、体部は丸く、口縁部は直線的に開く。丸底で外面は横ナデ調整。5世紀前半。

36はSK16出土。土師器の高杯。杯部片で、中央で稜を持つ形状。口縁部は外反する。全面横ナデ調整だが、杯部の稜から下方はハケメ調整の痕跡をとどめる。4世紀末～5世紀前半。

37～55は包含層資料。37～48が須恵器となる。器種は、37～40が杯。41～47が蓋。48は鉢となる。なお、43は小型の蓋で、法量などから装飾須恵器の蓋である可能性を持つ。42、48は、5世紀中頃。器壁は厚く体部は丸みを帯びる。成形はシャープ。口縁部付近にクシによる波状文を施す。口縁部付近で稜を持つ形状。やはり器壁は厚く、成形はシャープ。口縁部付近にクシによる波状文を施す。49～55が土師器。器種は49、50が高杯、51～55が甕。51、52が宇田型甕3類。53、54が長胴甕となる。

### ③ 奈良・平安時代の土器

#### B期の土器

奈良・平安時代の土器は、須恵器、灰釉陶器、土師器がある。なお、須恵器のうち杯類には、同一または類似した形状が多く、記述が煩雑になるため、さらに分類を加えることにする。具体的にはまず、体部の形状から三つに区分する(杯A類～杯C類)。杯A類は有台杯で、腰部で屈曲し直線的に口縁部に至るものを呼称する。器高の高いものから、杯A1類、杯A2類、杯A3類とする。杯B類は杯A類から高台を取り除いたものを呼称する。底部の形状からフラットなものを杯B1類、突出するものを杯B2類とする。杯C類は体部が丸みを帯びるものを呼称する。有台を杯C1類、無台を杯C2類とする。なお本節が用いる年代観は(斎藤他 1995)による。

#### SK18資料

103、104はSK17出土。いずれも灰釉陶器碗。体部に丸みを持ち、口縁部で外反する。外底部は回転ヘラ削り調整。内外面に灰釉をハケヌリする。9世紀後半。

56～102はSK18出土。56～97は須恵器、98～102は土師器。56、59は杯A1類。外底部は中央に回転糸切り痕を残し、周囲は回転ヘラ削り調整を加える。いずれも内底部には使用痕が確認できる。57、58、60、61、62、64は杯A2類。外底部は回転ヘラ削り調整だが、60、62は中央に回転糸切り痕を残す。57、62は焼成不良だが、使用痕が確認できる。63は杯A3類。外底部は回転ヘラ削り調整。65は杯B1類。外底部は回転ヘラ削り調整。やや焼成不良。内底部には使用痕が確認できる。66は杯B2類。外底部は回転糸切り痕を未調整で残す。やや焼成不良だが使用痕が確認できる。71、72は杯C1類。71は丸みを持つ体部に、短く外反する口縁部を持つ。使用痕は確認できる。72は底部を欠くが、形状は71と同様。70、73～78は杯C2類。いずれも外底部に回転糸切り痕を未調整で残す。70、76、

77はやや焼成不良。いずれも内底部には使用痕が確認できる。79～86は蓋。いずれも宝珠形つまみ部を持ち、口縁部が屈曲する形状か。80、82、83、86はやや焼成不良。なお、82は天井部内面とつまみ部上面に使用痕が著しい。転用硯か。87は盤。口縁部を欠く。器壁は厚い。外底部は中央に回転糸切り痕を残し、周囲には回転へら削り調整を加える。使用痕は確認できる。88～91は長頸瓶。88は口縁部片。89～91は頸部片。いずれも三段成形。88、89は頸部にへらによる沈線を施す。胎土の色調は、91が灰白色のほかは灰色。なお、89、90、91には頸部下方及び肩に灰釉が確認できる。94も長頸瓶だか、無台となる。外底部底部には回転糸切り痕を未調整で残す。体部は肩で稜を形成する。頸部は細い。胎土の色調は灰色。灰釉は肩の稜から頸部との境界部までに確認できる。95は浄瓶。卵形の体部に、細く長い頸部を持つ。頸部にはへらによる沈線を二条施す。高台は高く、外傾する。肩には注口を持つ。注口は太い。胎土の色調は暗オリーブ灰色。頸部から体部上方に灰釉が確認できる。96は高杯。脚部上方の破片。97は甌。体部下方を欠く。把手は棒状の粘土を半円状にし横位で貼付したもの。対角線に二か所付くのか。いずれも8世紀後半。98～102は甕。いずれも口縁部片で、体部上方で屈曲して口縁部を形成する。外面には粗いハケメ調整を施す。56～96と同時期か。

105はSK19出土。須恵器の杯C 1類。内面に使用痕が確認できる。10世紀。

106はSK21出土。須恵器の杯C 2類。やや焼成不良。外底部は中央に回転糸切り痕を残すが、周囲に手持ちへら削り調整を加える。8世紀中頃。

107はSK22出土。須恵器の蓋。口縁部はわずかに屈曲し、端部で縁帯を形成する。つまみ部は偏平。8世紀中頃。

108はSK23出土。須恵器の短頸壺。やや肩が張る。8世紀中頃か。

109はSK24出土。須恵器の杯。底部を欠くが、杯B 1類か。8世紀。

110～114は包含層資料。110、111は須恵器杯C 2類。112～114は灰釉陶器椀。

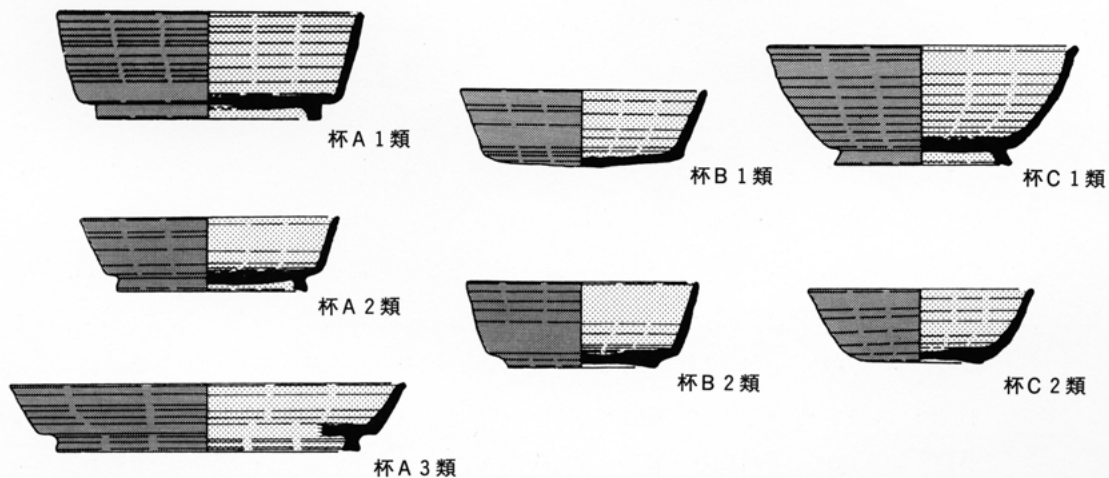


図16 須恵器杯の分類

④ 平安時代～鎌倉・室町時代の土器

**C期の土器** 平安時代末～鎌倉・室町時代の土器は、灰釉系陶器、土師器、貿易陶磁がある。このなかで灰釉系陶器は量的に最も多くを占める。そこで記述の煩雑さを避けるため、このうちの椀・皿類には、以下に示す分類を加える。具体的には、椀について、大型の椀を六つと、小型の椀に細分する。小皿については、四つに区分する。また、土師器の皿類についても出土数は乏しいが、同様の理由から細分を加える。

椀の分類 灰釉系陶器 椀（椀A類～椀G類）

椀A類

内外面とも丸みを持った体部を有し、腰部がやや張る深手の形状。口縁部は比較的丁寧に調整され外反する。高台はやや高い。本遺跡では全形をうかがえる資料は出土していない。

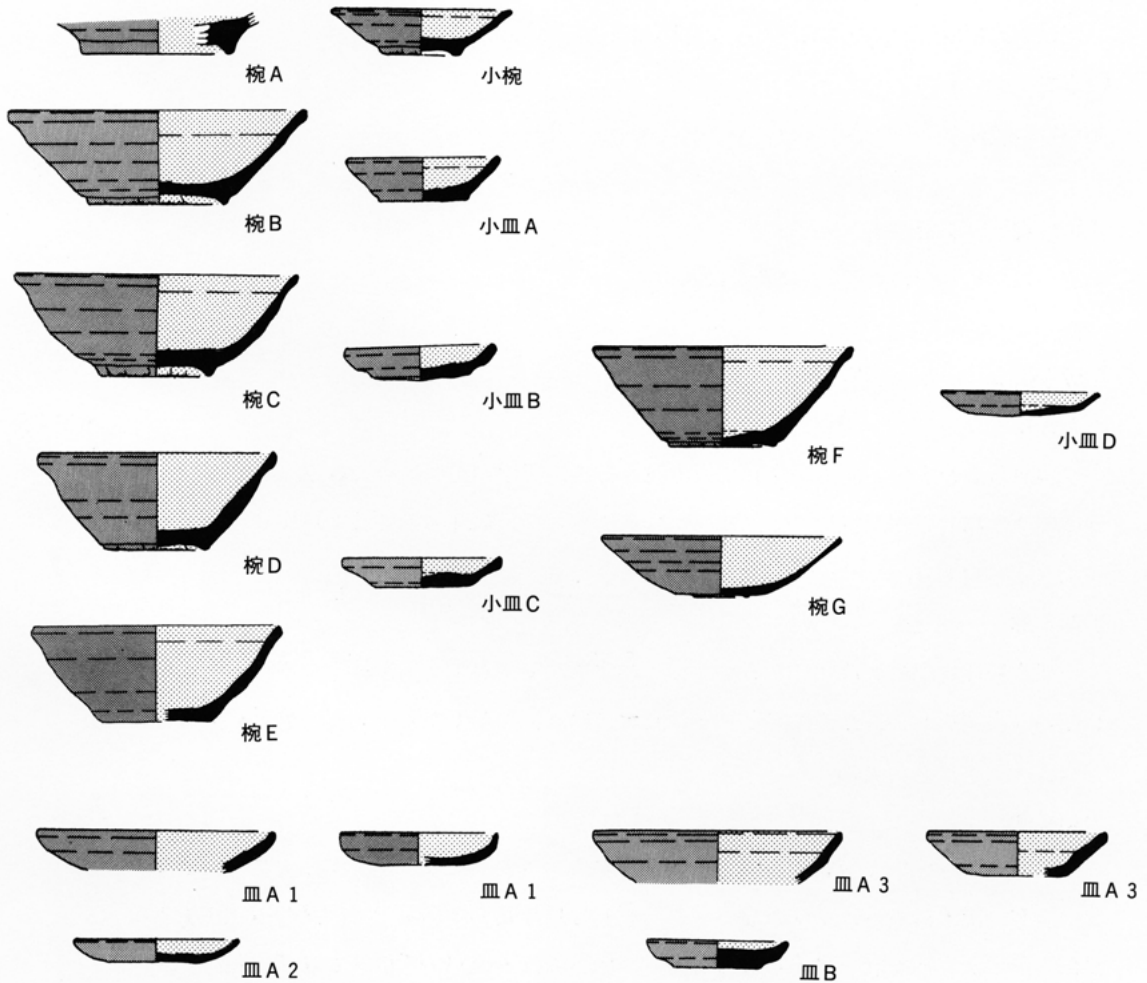


図17 灰釉系陶器椀・小皿、土師器皿の分類

**椀B類**

椀A類に比較して底径がやや大きくなる。内面の形状は、調整の省力化がうかがわれ、底部に浅いくぼみが一周するようになる。

**椀C類**

椀B類に比較して底径が小さい。体部の形状はわずかに丸みを残し、高台は低くつぶれる。内底部は浅くくぼみ、口縁部の調整はラフである。胎土は多量の砂粒を混和し、粗雑な印象を受ける。

**椀D類**

体部の形状が直線的となる。内面は体部との境界で稜を持つ。口端の調整が非常にラフで形状が不安定もしくは尖る。高台は椀C類と同様に低くつぶれ、平面形がひずむものが多くなる。また、高台部分のみ剥落する資料が多く、貼付が雑であることが考えられる。多量の砂粒を混和し粗雑な印象を受ける。

**椀E類**

無高台の椀で、椀D類から高台のみをとった形状。

**椀F類**

椀C類に類似した形状だが、器壁は薄く、胎土が緻密となる一群。

**椀G類**

椀Cに類似するが、器高は低く、器壁はさらに薄い。

**灰釉系陶器 小椀**

椀A類をそのまま小型にした形状。

**灰釉系陶器 小皿（小皿A類～小皿D類）****小皿A類**

小椀から高台を取り除いた形状で、小皿としては深手の部類に含まれる。底部が疑高台状にやや突出するのが特色。体部はやや丸みを持ち、口縁部付近で短く外反する。全体の調整は丁寧である。

小皿の分類

**小皿B類**

小皿A類に近似する形状であるが、底径がやや広く、器高がやや低くなる。底部は突出しない。全体の調整はややラフとなる。胎土には砂粒が多く混入されて、粗雑な印象を受ける。

**小皿C類**

小皿B類に近似する形状であるが、底径がやや大きく、器高がやや低くなり、偏平な形状。全体の調整はさらにラフとなる。この傾向は口縁端部に顕著で、調整の省力化から口縁部の形状が、縁帯状を呈するものが多い。胎土には砂粒が多く混入されて、粗雑な印象を受ける。

#### 小皿D類

小皿Cに類似する器形であるが、器壁が薄く、胎土が緻密な一群。

#### 皿の分類 土師器 皿（皿A類・皿B類）

土師器皿は、ロクロもしくは回転台（以下、「ロクロ」と省略する。）を使用しているか否かを大区分とする。非ロクロのものを皿A類、ロクロ使用のものを皿B類とする。

#### 皿A類

皿A類は、形状から三つに区分（皿A1類～皿A3類）する。

#### 皿A1類

体部は浅く、丸みを帯びた形状。口縁部は直立し、尖り気味となる。口縁部は横ナデ調整、体部外面は粗面で、成形時に「型」を使用している可能性が考えられる。大型品と小型品が存在する。

#### 皿A2類

体部は浅く、丸みを帯びた形状。器壁は薄い。口縁部は横ナデ調整、体部外面は粗面で、皿A1類同様、成形時に「型」を使用している可能性が考えられる。確認できた資料は口径9cm程度の法量に留まる。

#### 皿A3類

形状は灰釉系陶器の小皿A類に類似するが、やや大振りとなる。大型品と小型品が存在する。

#### 皿B類

成形にロクロを使用したもの。数量は乏しい。形状は灰釉系陶器の小皿A類に類似するが、底径がやや小さく、体部が口縁部付近で屈曲する。外底部に回転糸切り痕を残す。なお、大型品の底部片も存在するが、これは残存部分から推定すると、器高が前者より高い、形状がやや異なったものである可能性を残す。ただし、本遺跡では全形が判明していないため、ここに一応含めた。

115、116はSB04出土。いずれも灰釉系陶器。115は広口瓶。短く、外反する頸部を持つ。縁帯は細く、器壁は厚い。12世紀。116は小椀。器高は低く、高台端部にモミガラ痕を残す。みこみ、高台端部には使用痕が残る。

117、118はSB06出土。いずれも灰釉系陶器。117は椀C類。使用痕は確認できない。118は小皿B類。やはり使用痕は確認できない。

119はSB07出土。灰釉系陶器で椀D類。形状はややゆがむ。高台端部には使用痕が確認できる。

#### SE01資料

120～161はSE01出土。120～154は灰釉系陶器。120～134は椀。120～125、127、128、130～132は椀D類、126は椀E類、129、133、134は椀F類。120、128、131、134には使用痕が明瞭だが、122、124、125には、これが確認できない。135～153は小皿。135、137、139

は小皿B類で、136、138、140～153は小皿C類。140、150、152、153には使用痕が明瞭だが、137、142、144、148には、これが確認できない。なお、147は墨書がみられ、『三』と判読できる。154は鉢。大きくひずむ。口縁端部は丸い。体部外下方には横方向のへら削り調整を施す。高台端部には使用痕が明瞭となる。13世紀。155～160は土師器。155、156は皿A 1類。いずれも表面の風化が著しい。155は、口縁が端部で屈曲する。156はやや小振りだが、155と同一形状。157～160は伊勢型鍋。いずれも口縁部片で、器壁は薄い。158、160は外面にススが付着する。157～159が5類（新田 1985）で、13世紀、160は4類で12世紀中頃～12世紀末。161は貿易陶磁。青磁椀で龍泉窯系。12世紀前半～13世紀後半。

162～171はSE02出土。162～169は灰釉系陶器。162～167は椀。162～164は椀C類、165は椀B類、166、167は椀F類となる。166は全体にひずむ。162、163は使用痕が明瞭となる。168は小椀の底部片。高台は高く、端部にモミガラ痕は確認できない。みこみ及び高台端部に使用痕が明瞭となる。169は小皿A類。使用痕が明瞭となる。170、171は土師器で伊勢型鍋3類。いずれも口縁部片で器壁は厚く、端部は丸い。外面にはススが付着する。11世紀末～12世紀前半。

172～184はSE03出土。いずれも灰釉系陶器。172～181は椀。172、177、179が椀D類、173が椀E類、176が椀B類、178が椀C類で、174、175、180、181が椀F類。177～179は使用痕が明瞭だが、174、180、181にはこれが確認できない。182、183は小皿。前者が小皿C類、後者は小皿B類となる。いずれも使用痕が明瞭となる。184は壺の底部片。全体に風化が著しい。

185、186はSE04出土。いずれも灰釉系陶器の小皿D類。使用痕が明瞭となる。187～200はSE07出土。187～198は灰釉系陶器。187～194は椀。187～191、194は椀B類、192、193は椀C類となる。187、191～194は使用痕が明瞭だが、180、190にはこれが確認できない。191は内外面に黒色の付着物が認められる。195～198は小皿A類。195、196、198は使用痕が明瞭となる。199は羽釜の口縁部片。全体にひずむが、鐙部は特にこれが著しい。全面横ナテ整形による。12世紀後半頃。200は土師器で、伊勢型鍋4類の口縁部片。器壁は薄く外面にはススが付着する。12世紀中頃～12世紀末。

201はSE08出土。北部系灰釉系陶器の椀F類。

202～205はSE10出土。いずれも灰釉系陶器。202は椀C類の底部片で、使用痕が明瞭となる。203、204は壺。前者は体部上方の破片。後者は体部片。204は、体部下方の外面に回転へら削り調整を施し、肩にへらによる沈線を一条加える。205は甕の口縁部片。口縁部は短く外反し、端部で縁帯を形成する。12世紀前半頃。

206～210はSK26出土。206～209は灰釉系陶器。206、207は椀B類。前者は口縁部片で、後者は底部片。前者には使用痕が明瞭となる。208は小皿A類。使用痕が明瞭となる。209は鉢。底部を欠損する。体部は直線的で、端部は丸い。片口部が残存する。使用痕は確認できない。12世紀後半～13世紀初頭頃。210は土師器皿A 1類の小型品。

211はSK27出土。土師器皿A 3類の小型品。

212～231はSK28出土。212～224は灰釉系陶器。212、213、215、217は椀D類、214は椀F類、216は椀B類。215、216は、使用痕が明瞭だが、213にはこれが確認できない。218～224は小皿C類。221、223、224は使用痕が明瞭だが、222にはこれが確認できない。225～229は土師器の皿。いずれも表面の風化が著しい。225は皿A 2類、226～228は皿A 1類。229は口縁部を欠くが、皿B類の大型品か。230、231は貿易陶磁。230は椀。231は皿。前者は龍泉窯系の青磁椀。内面に画花文を施す。12世紀後半頃。231は青白磁。口縁部はへら切りにより、輪花状となる。333と同一個体か。12世紀～13世紀。

232～234はSK34出土。いずれも灰釉系陶器で椀。233は椀B類。232、234は椀F類。いずれも使用痕が明瞭となる。

235～237はSK37出土。いずれも灰釉系陶器で、235は椀F類、236は小皿C類、237は小皿D類となる。236は使用痕が明瞭となる。

238はSK41出土。灰釉系陶器の小皿C類。使用痕が明瞭となる。

239はSK42出土。灰釉系陶器の小椀。器高は高く、高台端部に砂粒痕を残す。使用痕が明瞭となる。

240はSK43出土。灰釉系陶器の椀C類。使用痕が明瞭となる。

241はSK44出土。貿易陶磁。白磁椀で底部片。口縁部が端反りとなるタイプか。

242はSK45出土。貿易陶磁椀で白磁。口縁部は玉縁状を呈する。

243～245はSK46出土。いずれも灰釉系陶器の椀C類。

246はSK47出土。南部系灰釉系陶器の小皿B類。使用痕が明瞭となる。

247～249はSK48出土。いずれも灰釉系陶器で椀B類。248、249は使用痕が明瞭となる。

250はSK49出土。灰釉系陶器の短頸壺。体部は丸みを帯びる。口縁部は内傾気味に直立する。端部は丸い。12世紀後半。

251、252はSK20出土。いずれも灰釉系陶器の椀。前者は椀F類で、後者が椀B類。使用痕が明瞭となる。

253～265はSD02出土。253、255～263、265は灰釉系陶器。253、255～261は椀B類。255～257、260は使用痕が明瞭となる。262、263は小皿A類。263は使用痕が明瞭となる。254、264は灰釉陶器。265は三筋壺の体部片。沈線は複線。

266はSD03出土。灰釉系陶器の椀F類。使用痕が明瞭となる。

267～269はSD04出土。いずれも灰釉系陶器の椀。267は椀C類、268は椀B類、269は椀F類となる。

270～274はSD05出土。いずれも灰釉系陶器。270～273は椀C類。271、273は使用痕が明瞭となる。274は小皿B類。ひずみが著しく、使用痕は確認できない。

275～283はSD06出土。275～282は灰釉系陶器。275は椀B類。使用痕が明瞭となる。276は小椀。高台は高い。使用痕が明瞭となる。277～279は小皿A類。277は内面に使用痕が明瞭となる。280は甕。頸部は短く、端部で縁帯を形成する。13世紀前半頃。281、282は三筋壺。体部片。沈線はいずれも複線。283は貿易陶磁で青磁の椀。

284はSD07出土。灰釉系陶器の椀A類。使用痕が明瞭となる。

285～302はSD08出土。285～290、292～299は灰釉系陶器。285～290、292は椀。285～287、292は椀C類、288、289は椀D類、290は椀B類。290～292は使用痕が明瞭となる。290はひずむ。293～296は小皿A類。295、296は使用痕が明瞭だが、293にはこれが確認できない。297～299は壺。299は三筋壺。沈線は、複線となる。298は底部片。底部付近に横方向にへら削り調整、それより上方は縦方向にへら削り調整を施す。291は灰釉陶器の椀。300、301は土師器。皿B類の底部片で、前者は大型品。302は白磁椀の口縁部片。

303～333はSD10出土。303～324は灰釉系陶器。303～316は椀。303～308、310～315は椀C類、309は椀D類、316は椀B類となる。306、307は使用痕が明瞭だが、305、312にはこれが確認できない。317～324は小皿。317～319、322、323は小皿B類、321が小皿A類、320、324が小皿C類となる。318、323は使用痕が明瞭だが、317にはこれが確認できない。325～331は土師器。325～329は皿。いずれも表面の風化が著しい。325は皿A 3類の大型品。口縁部片となる。326は皿A 2類、327、328は皿A 1類の小型品。前者はひどくゆがむ。329は皿B類。330、331は伊勢型鍋5類。いずれも口縁部片で、器壁は薄い。外面にはススが付着する。13世紀。332、333は貿易陶磁。332は同安窯系の青磁。皿の口縁部片で、12世紀後半頃。333は青白磁。後者は231と同一個体か。

SD10資料

334、335はSD11出土。いずれも灰釉系陶器の椀A類。なお、前者は使用痕が明瞭となる。

336～338はSD12出土。いずれも灰釉系陶器。336が椀A類で、337、338は椀B類。後者は使用痕が明瞭となる。

339～346はSD13出土。339～345は灰釉系陶器。339～343は椀。339、340は椀D類、341、342は椀C類、343は椀B類。343は使用痕が明瞭となる。339は口縁部付近にススが付着する。344は小皿A類。335は小皿D類。前者には、使用痕が明瞭となる。346は貿易陶磁。青磁の椀で、底部片。器壁は厚い。12世紀～13世紀前半。

347～363はSD14出土。347～357は灰釉系陶器。347～352は椀。347・348は椀C類、349は椀B、350は椀G類、351、352は椀D類。347はひずむ。353～357は小皿。353、354は小皿A類、355、356は小皿C類、357は小皿D類となる。355は使用痕が明瞭となる。358～362は土師器。358は皿A 2類。359は伊勢型鍋5類の口縁部片。13世紀。360～362は羽釜。360、361には、外面にハケメ調整を施す。360は鏝上方に直径4mm穿孔が認められる。穿孔は焼成前。361、362は外面にススが付着する。13世紀。363は貿易陶磁。龍泉窯系の青磁椀で、内面に画花文を施す。12世紀後半頃。

364はSD15出土。灰釉系陶器の椀F類。使用痕が明瞭となる。

365はSD19出土。灰釉系陶器の椀A類。

366～368はSD20出土。いずれも灰釉系陶器。366、367は椀F類。368は鉢。口縁部片で、端部は受け口状に発達する。15世紀前半。

369、370はSD24出土。いずれも灰釉系陶器。369が椀B類で、370は椀A類。前者には使用痕が明瞭となる。

371～373はSD25出土。いずれも灰釉系陶器の椀。371、373は椀B類、372は椀C類。373は使用痕が明瞭だが、372はこれが確認できない。

SD27資料

374～382はSD27出土。374～381は灰釉系陶器。374～379は椀G類。379は内面に使用痕が明瞭となる。377、378にはこれが確認できない。377は外底部に墨書『大』が認められる。380、381は小皿D類。381には使用痕が確認できない。いずれも外底部には墨書がみられ、文字は380が『十』、381が『大』。382は貿易陶磁。白磁の壺。肩に耳を持つのか。

383～419は遺構外資料。383～416は灰釉系陶器。383～395は椀。396は小椀。397～415は小皿。416は三筋壺。417～419は貿易陶磁の青磁椀となる。 (池本正明)

注

- (1) 筆者は本来灰釉陶器と山茶椀とを同一概念で理解し、「灰釉系陶器」と呼称する立場(池本 1990 a・1990 b)であるが、煩雑になるなどの理由からこの概念は一旦凍結する。なお、本書の用いる「灰釉系陶器」の概念は、瓷器系陶器第II、III類(檜崎 1979)全般を指すものとなっている。

## ⑤ 江戸時代の土器

江戸時代の土器類は溝などから出土したが、他の時代に比べ量的には少なく、その多くは全体の器形を窺うことのできない小片であり、残存状況の良好な資料に乏しい。材質では、破片点数から見ると、陶器が磁器を圧倒的に上回り、産地の判るものでは瀬戸美濃産が多い。器種としては、器種分類に堪える程の資料がなく、統計的な分析は行っていないが、個体の識別と器種の判別が可能なものにおいては椀が最も多く、皿、鉢がこれに続く。製作時期の判るものでは18世紀中葉以降のものが多い。全体に高級品に乏しく雑器が目立つこと、肥前産磁器があまり見られないことなど、瀬戸美濃という大窯業生産地の近くに立地する一農村の消費傾向の一端が窺えよう。以下、遺構ごとに遺物の説明を行う。

D期の土器

1～5はSD28出土。1、2は椀、4は皿、5は鉢と考えられる。1、5は内外面に灰釉、2は外面に横帯状に鉄釉の後、内外面に灰釉を施す。1の破断面にはススらしき黒色付着物があり、割れた後に焼かれた可能性が考えられる。5は口縁内に沈線が二条入る。4は長石釉の輪禿皿で付け高台。破断面が摩滅しており、砥石に転用した可能性も考えられる。器種不明の3は内面には灰釉、外面の高台部周辺は露胎。いずれも瀬戸美濃産陶器で、製作時期は、概ね18世紀後半～19世紀初頭あたりと考えられる。

6はSD29出土。内面に鉄絵で植物が描かれ、内外面とも灰釉が施される。みこみにトチン痕がある。瀬戸美濃産陶器の鉢で、製作時期は18世紀代であろうか。

7はSD31出土。底部に糸切り痕があり、底部周辺を除く内外面に鉄釉が施される。瀬戸美濃産陶器の錢甕の類であろうか。

8、9はSD32出土。どちらも内外面に灰釉が施され、貫入が顕著に見られる。8は高台部周辺が露胎、9は高台端部のみ露胎。8の方が胎土がやや粗い。8は椀と考えられる。どちらも瀬戸美濃産陶器で、製作時期は19世紀代であろうか。

10、11はSD33出土。10は長石釉の無高台皿で、貫入が顕著に見られる。11は受け口状に開く口縁で、外側に折り返され縁帯が形成されており、全面に鉄釉が施される。播鉢であろう。10・11とも瀬戸美濃産陶器で、製作時期は18世紀前半と考えられる。

12はSD35出土。ロクロで挽き出されたつまみを持つ蓋で、底部に糸切り痕がある。無釉で胎土は淡黄色。瀬戸美濃産陶器。

13～21はSD36出土。13～15は磁器。13は全体に厚手で重みのある丸椀で、雪の輪に梅樹文の染め付け。みこみに輪禿がある。肥前で、製作時期は18世紀中葉～末と考えられる。14は全体に青灰色を帯び、笹文、五弁花の染め付け。瀬戸美濃産と考えられる。15は口縁内に渦巻文、外側面に文字の染め付け。関西系であろうか。製作時期は14、15とも19世紀中葉と考えられる。16～21は瀬戸美濃産陶器。16、17は端反椀。16は底が薄いタイプで、鉄絵、呉須絵の麦藁手文。17は、内面が全体に淡黄色、外面が淡黄色に灰オリーブ色の細い横縞の入る刷毛目文。18は呉須絵の広東茶椀。みこみに五弁花。19は口縁端部に鉄釉の

端反椀

後、灰釉、上野釉を施したもの。鉢であろうか。20は蓋で、粘土紐を貼り付けたつまみがある。上面のみ鉄釉が施され、底部に糸切り痕がある。胎土は浅黄橙色で、黒褐色の極小粒が見られる。21は内外面に灰釉が施され、高台部周辺は露胎。鉢であろうか。破断面にススらしき黒色付着物が見られ、割れた後に焼かれた可能性が考えられる。陶器の製作時期は、椀については19世紀中葉と考えられる。

22はSD39出土。内面に灰釉が施され、高台部周辺は露胎。内面に重ね焼きの際の高台痕がある。高台にススらしき黒色付着物がある。灯明皿であろうか。瀬戸美濃産陶器で、製作時期は19世紀代と考えられる。

23～26はSD40出土。23は、胎土、高台径に僅かな違いがあるが、SD32の8と同一タイプと考えられる。外側面の灰釉の下に呉須のような青い小さな点が見られ、呉須絵の存在した可能性も考えられる。24は削り出し高台で内外面に鉄釉が施される。灯明皿か。26は播鉢。櫛目数は16本(1cm単位に5本)。底部に糸切り痕があり、全体に鉄釉。破断面にススと思われる黒色付着物がある。以上は瀬戸美濃産陶器で、製作時期については23・24が19世紀代と考えられる。25は暗赤褐色の胎土で堅く焼き締められている。口縁部に自然釉。常滑産陶器の真焼物で、壺であろうか。

27、28はSD41出土。27は陶器の箱型湯呑。呉須絵で外側面に菊花散らし文、幾何文、みこみに五弁花。瀬戸美濃産で、製作時期は19世紀前～中葉と考えられる。28は瀬戸美濃産陶器で、鉄釉うのふ釉流しの椀。製作時期は18世紀後半あたりと考えられる。

29～38は遺構外資料。29～34は近接して出土している。29の端反椀は、浅黄橙色の胎土に内面に白化粧、外側面に白泥と鉄絵で梅花文を描いた後、透明釉を施したもの。30は全体の器形が判らないが、29と同様の装飾技法を用いたものと考えられる。31は呉須絵の広東茶椀。みこみに五弁花、外側面に花らしき文様。スタンプによるものか。いずれも瀬戸美濃産陶器で、製作時期は19世紀中葉と考えられる。32は脚部を欠くが、仏飯器と考えられる。蛸唐草文の染め付け。肥前産磁器で、製作時期は18世紀末～19世紀中葉頃と考えられる。みこみが付着物に覆われていた。33は全面に鉄釉が施される。瀬戸美濃産陶器の卸皿の把手であろうか。34は瀬戸美濃産磁器で、椀の蓋のつまみと考えられる。銘らしき変形文字と水辺に鳥の文様の染め付け。製作時期は19世紀中葉以降であろうか。折縁鉢の口縁部と思われる35は、内外面とも灰釉が施され、内面には緑釉筆散らし。瀬戸美濃産陶器で、製作時期は18世紀代であろうか。36は常滑産陶器の赤物で、甕の口縁部と考えられる。製作時期は18世紀後半あたりであろうか。37、38は全面に鉄釉が施され、底部に糸切り痕がある。瀬戸美濃産陶器の播鉢と考えられる。櫛目数は、37が19本(1cm単位に5本)、38が12本(1cm単位に3本)。(水野多栄)

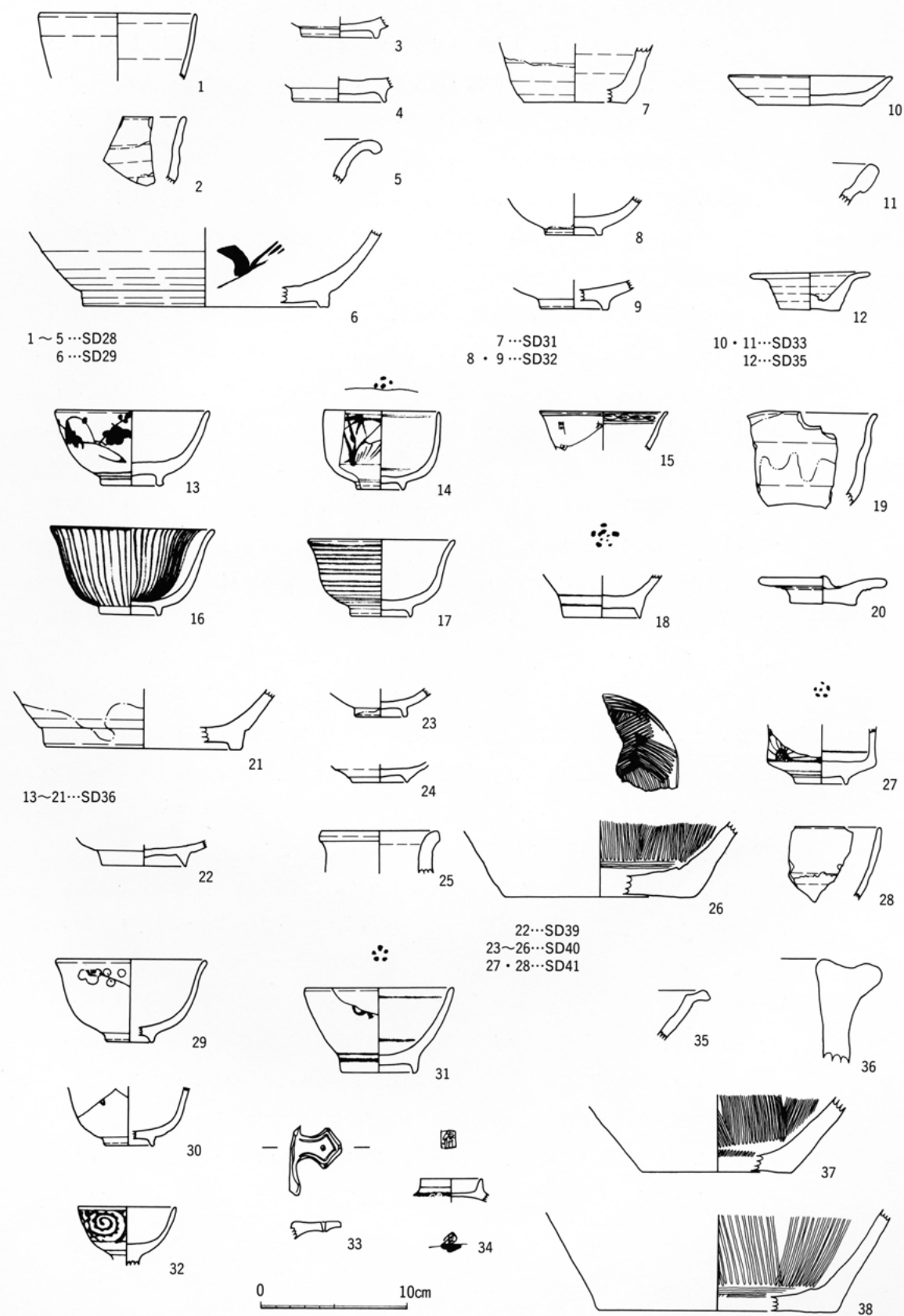


图18 近世土器

## (2) そのほかの土器・土製品

そのほかの土器・土製品には、製塩土器、陶丸、加工円盤、土錘、瓦がある。

### ① 製塩土器 (図19)

内陸部出土の製塩土器

3点出土している。すべて知多式(立松1994)で、いずれも二次的に被熱する。1は、口縁部片。器壁は薄く、全面ラフなヨコナデ調整。SK20出土。4類。2、3は脚部片。いずれもラフなナデ調整。2が1C類、3が4類となる。

### ② 土錘 (図19)

土錘は6点出土している。すべて土師質で、出土位置に共通性はうかがえない。形状は紡錘形。上下端部は使用痕と考えられる剥離がある。それぞれの大きさや穿孔の直径などはほぼ類似する。時期は特定できないが、4、5は、SK28から出土し、平安時代末～鎌倉時代の土器が伴出(図版17-212~231)する。重量は、ほぼ全形を残す4が7.9g、5が8.4g、7が9.1gとなる。

### ③ 陶丸 (図19)

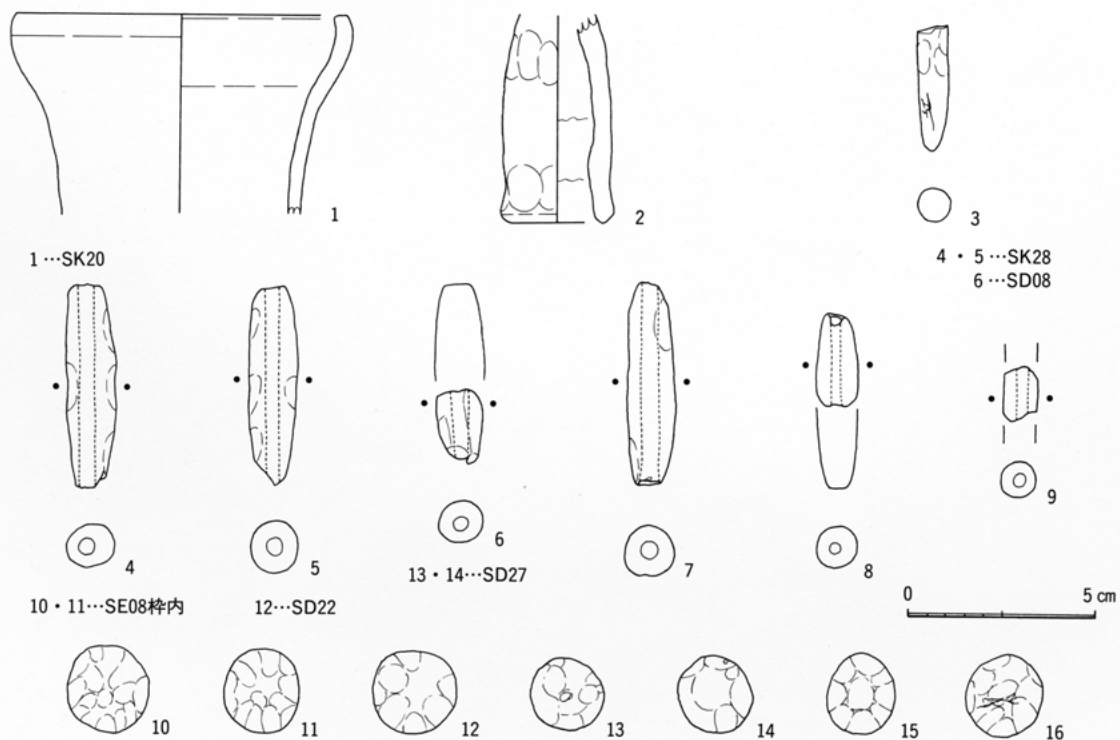


図19 その他の土器・土製品

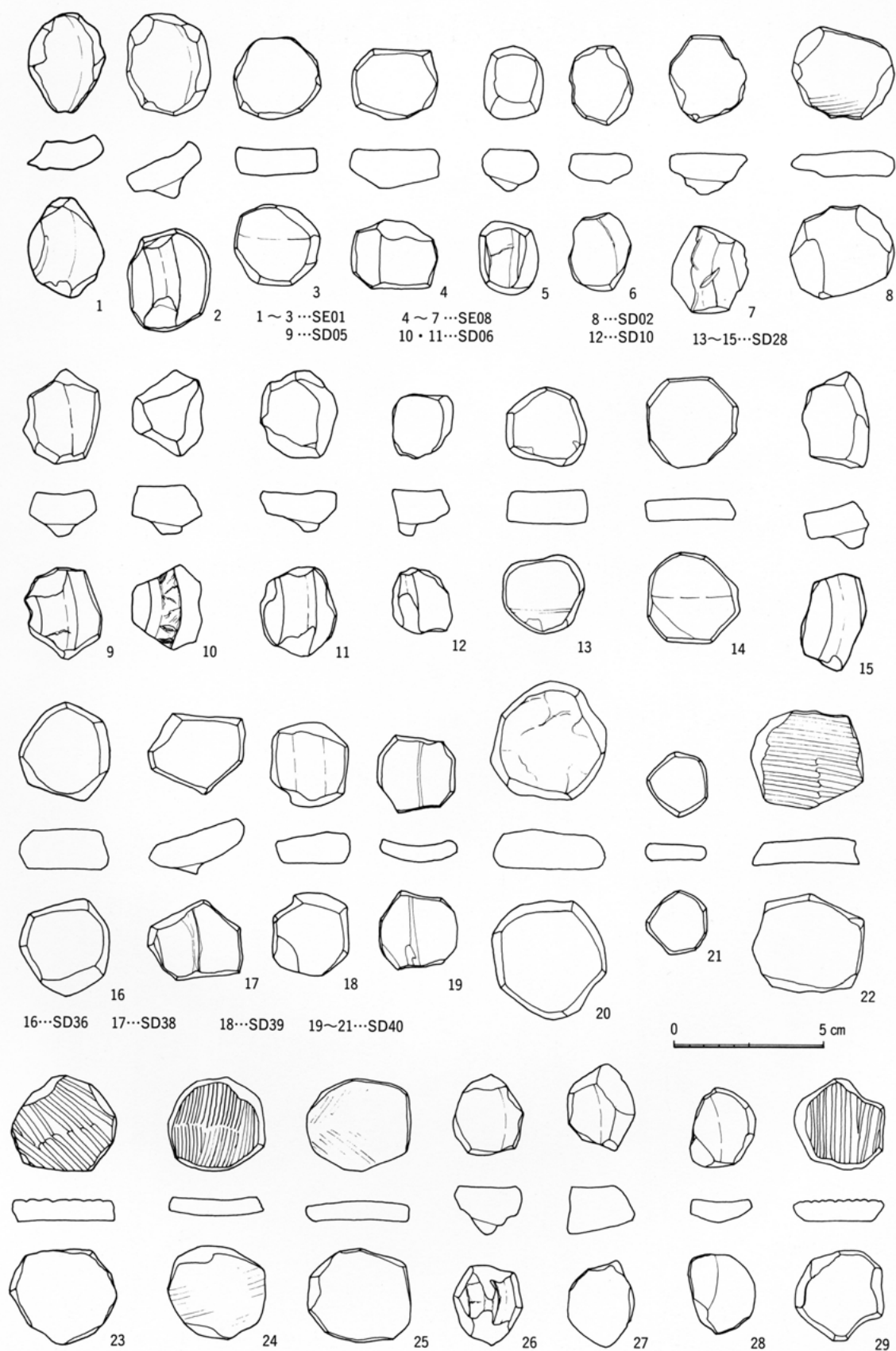


図20 加工円盤



図21 瓦1

7点出土している。出土位置は、10、11がSE08枠内、12がSD22、13、14がSD27（D区で6点、C区西部で1点）と、調査区の西側のみで出土している。いずれも手づくねによる成形後、ナデ調整を施す。重量は8～10g程度で、すべて完形で出土している。外面は多くの場合摩滅するが、16にはこれが観察できない。胎土は、13、15、17が粗製、その他は精製となる。

陶丸の出  
土位置

④ 加工円盤 (図20)

土器片の破面を打ち欠いて円形に加工したものを呼称する。31点出土している。側面は基本的には打ち欠いたままだが、5、13はさらに研磨を加える。出土位置は1～3がSE01、4～7がSE08、8がSD02、9がSD05、10、11がSD06、12がSD10、13～15がSD28、16がSD36、17がSD38、18がSD39、19～21がSD40となる。素材となる土器片は灰釉系陶器が中心だが、13、14、16、18～21、29は近世陶器、24、25は土師器、8、22、23は須恵器となる。

⑤ 瓦 (図21、22)

すべて丸瓦、平瓦で約30点出土している。多くは表面の風化が著しい。出土位置は93区、94A区に集中するが、いずれも遺構に伴うものではない。図示したものは側面ないし端面

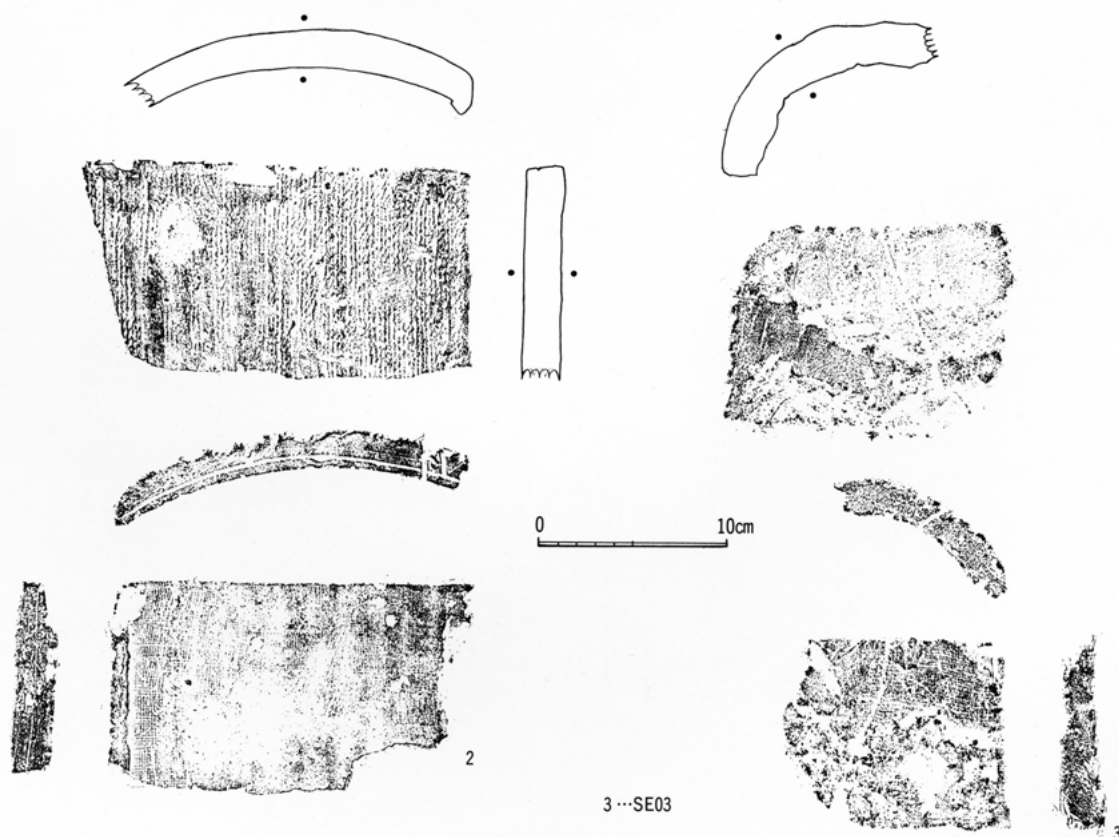


図22 瓦2

が残存するものに限定した。3点ある。1は、ほぼ全形を残存させる平瓦。台形を呈する。

### (3) 石製品 (図23)

石製品に分類できるものには、砥石が5点出土している。1がSD04、3がSD27出土。石材は1から順に泥質凝灰岩、ホルンフェルス、凝灰岩、凝灰岩となる。3はやや特殊な形状だが、一応これに含めた。上部が一部分欠損するが、重量は89gをはかる。上部には、直径5mm程度の穿孔が確認できる。この部分には縄掛けなどによる損耗は確認できない。外面に被熱が確認できる。なお、遺構埋土または、包含層中から、人為的に搬入されたと考えられる自然石が約数十点出土している。いずれも用途は不明。大きさは拳大から人頭運ばれた石材? 大。石質はほとんどが木曾川水系で入手可能な石材で、砂岩が圧倒的に多く、泥岩、凝灰岩、濃飛流紋岩などがこれに続く。なお、その他に、結晶片岩、緑泥石片岩などの片岩類も含まれており、これらについては三重県南部産の可能性を残す。(池本正明)

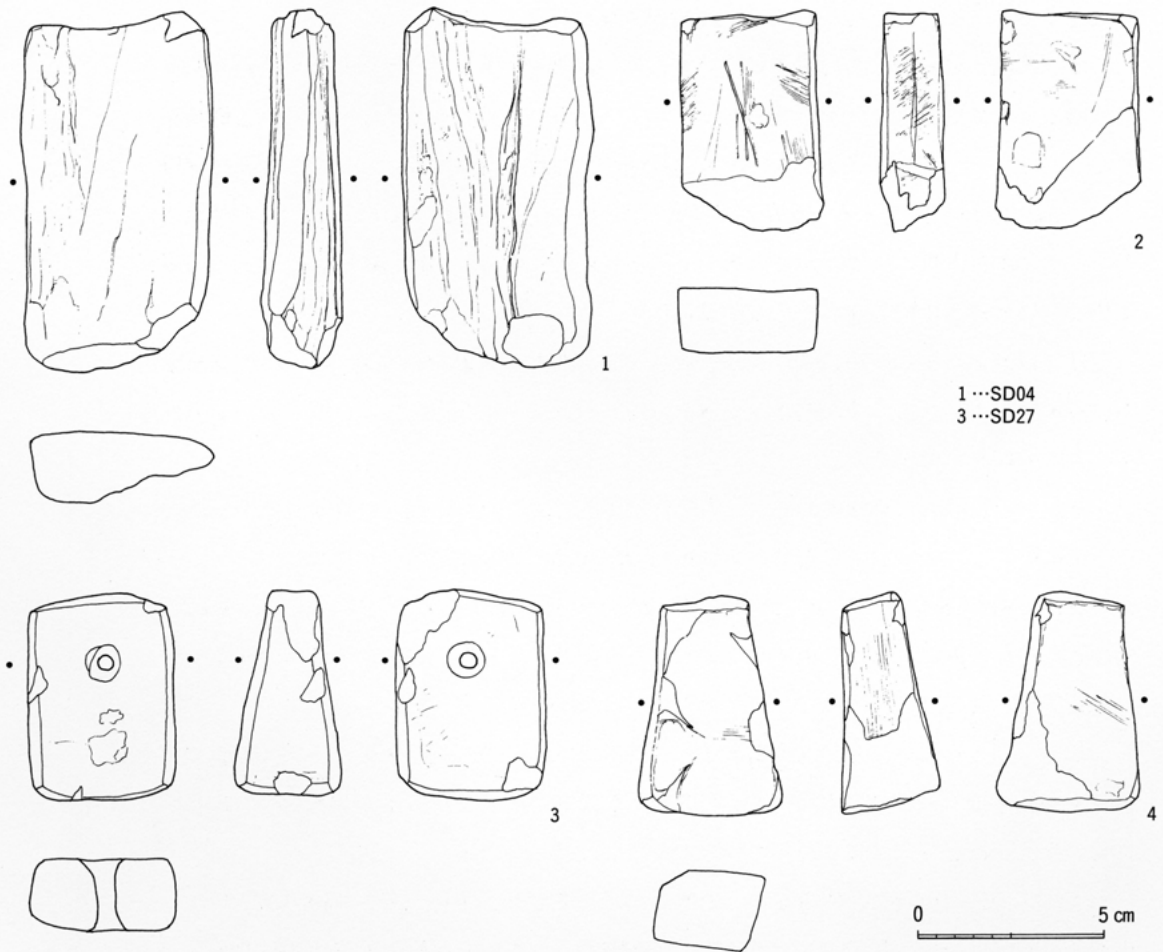


図23 石製品

## (4) 木製品 (図24)

木製品の多くは曲物の側板で、井戸側に使用されたものである。そして、板との接続用の孔があることから、多くが転用材であると考えられる。また、ほとんどが板を一重だけ曲げて作られたものであり(一重巻き)、樹皮で縫い合わされている。ここでは、樹皮の端部が板の内側に来るか外側に来るかによって、内綴じと外綴じと呼び分けることにする。

(図24参照)

1は、口径約50cm器高約23cmの曲物の側板である。この側板は、一重巻きの側板を3つ重ね合わせたもので、内側の2枚が本体で、外側の丈の短いものがタガである。本体の側板は、数か所で樹皮による縫い合わせが行われている。また、3つの側板を重ね合わせたところで、底部との接続用の孔が開けられている。孔の直径は約1.7cmで合計12か所ある。便宜上、本体の側板のうち、内にあるものを内板、外にあるものを外板と呼ぶことにする。内板の縫い合わせ方は1列であり、内面に板を曲げるための縦方向のきざみが約0.7cm間隔で施されている。外板の縫い合わせ方は、上部はハの字状に折り返してあり(2列縫い)綴じ合わせ方は上下とも内綴じになっている。タガは、外板同様に2列縫いで上下とも内綴じとなっている。しかし、外板、タガともに縦方向のきざみはない。

2は、口径約51cm器高約11cmの側板である。これは、一重巻きの側板を2つ重ね合わせたもので、1で見られたような側板どうしの縫い合わせは行われていない。しかし側板を重ね合わせたところで、底部との接続用の孔が開けられている点は同じである。孔の直径は約0.4cmで合計16か所ある。外板は2列縫いで、綴じ合わせ方は上が内綴じで下が外綴じとなっている。内板の綴じ合わせ方は、上下とも内綴じであり、板の縫い合わせ部の内側に約5cmにわたって縦方向のきざみが見られる。

3は、口径約46cm器高約16cmの側板である。一重巻きの側板であるが、縫い合わせ部以外にも補強用の縫い合わせが施されている。縫い合わせ方は2列縫いで、綴じ合わせ方は上下とも内綴じとなっている。

4は、口径約46cmの側板であるが、上部は欠損しており現存の高さは約44cmを計る。これは2に同じく、一重巻きの側板の2つ重ねで、底部との接続用の孔を持つ。孔の直径は約1.2cmで合計10か所ある。内板は1列で縫い合わされているが、内側に幅約1cmのきざみが全体にわたって施されており、さらに外面にも幅約10cmのきざみが5か所にわたって施されている。外板は、2列で縫い合わされ、上下とも内綴じである。

5は、口径約43cm器高約31cmの側板で、これも一重巻きの側板の2つ重ねで、底部との接続用の孔を持つ。孔の直径は約1cmで5か所が確認される。内板は、1列で縫い合わされている。外板も1列で縫い合わされ、上下とも内綴じである。

6は、口径約38cmの側板であるが、上部は欠損しており、現存の高さが約29cmである。内面にはきざみが施されており、底部にも穴が開けられているが綴じ方等は不明である。

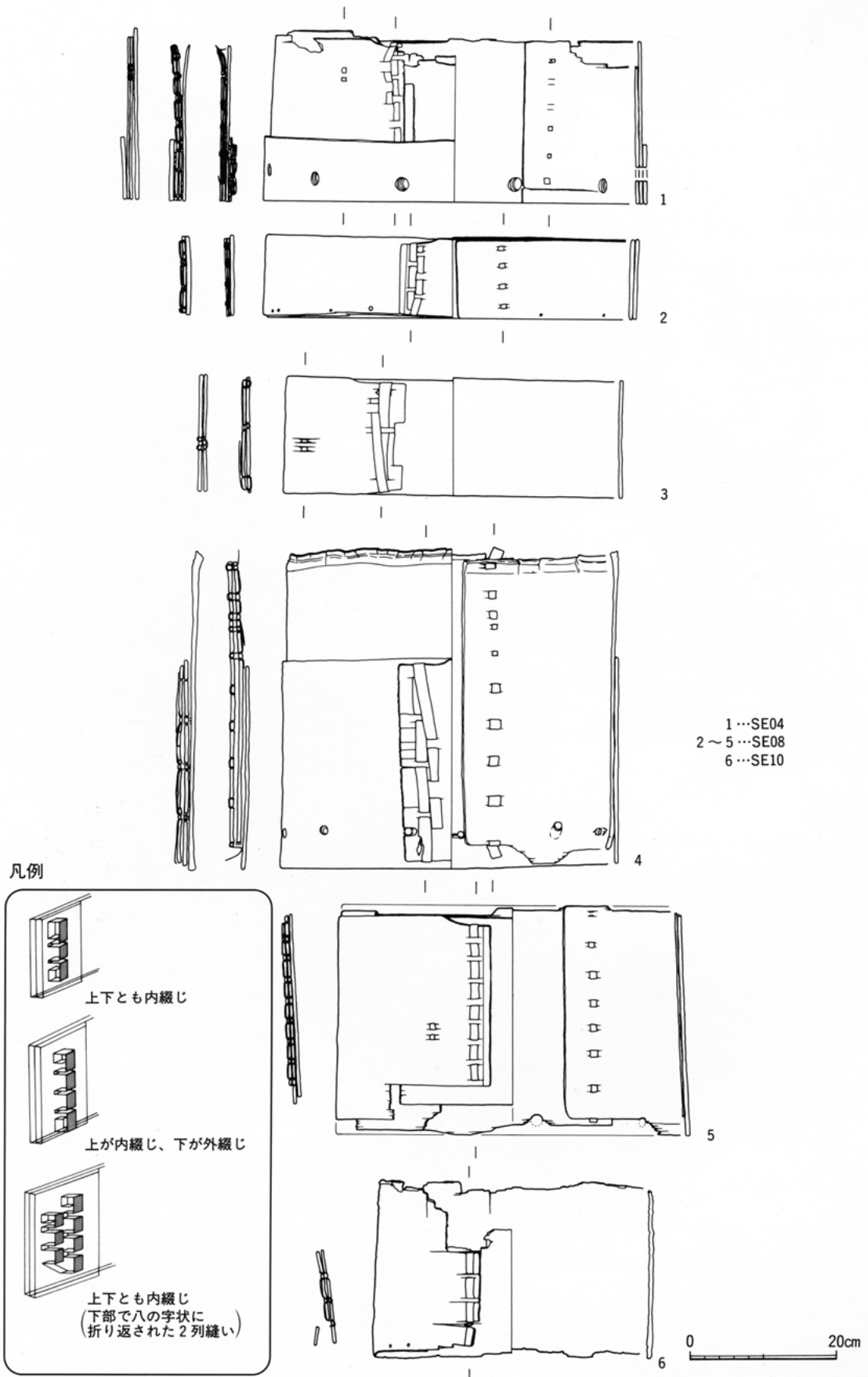


図24 木製品

## (5) 金属製品 (図25)

出土金属製品は、刀子、釘、飾金具などの鉄製品とキセルや銅銭の銅製品である。

1は刀子で、長さ約18.5cm幅約1.4cmを測り、SE01から出土している。柄の部分にあたるところに、柄との接続用の径約0.5cmの孔があけてある。5・9も刀子で、SD36、9は遺構外資料で欠損がひどく法量は不明である。8は釘で、長さ約6.7cm直径約1.1cmである。7は飾金具で、長さ約5.1cmのひょうたん型をしている。どのようなものに取りつけられたかは不明である。10はキセルで、直径約1.0cmだが欠損がひどく長さは不明である。6は寛永通宝である。ただし、6～8、10は遺構外資料である。  
(水谷寛明)

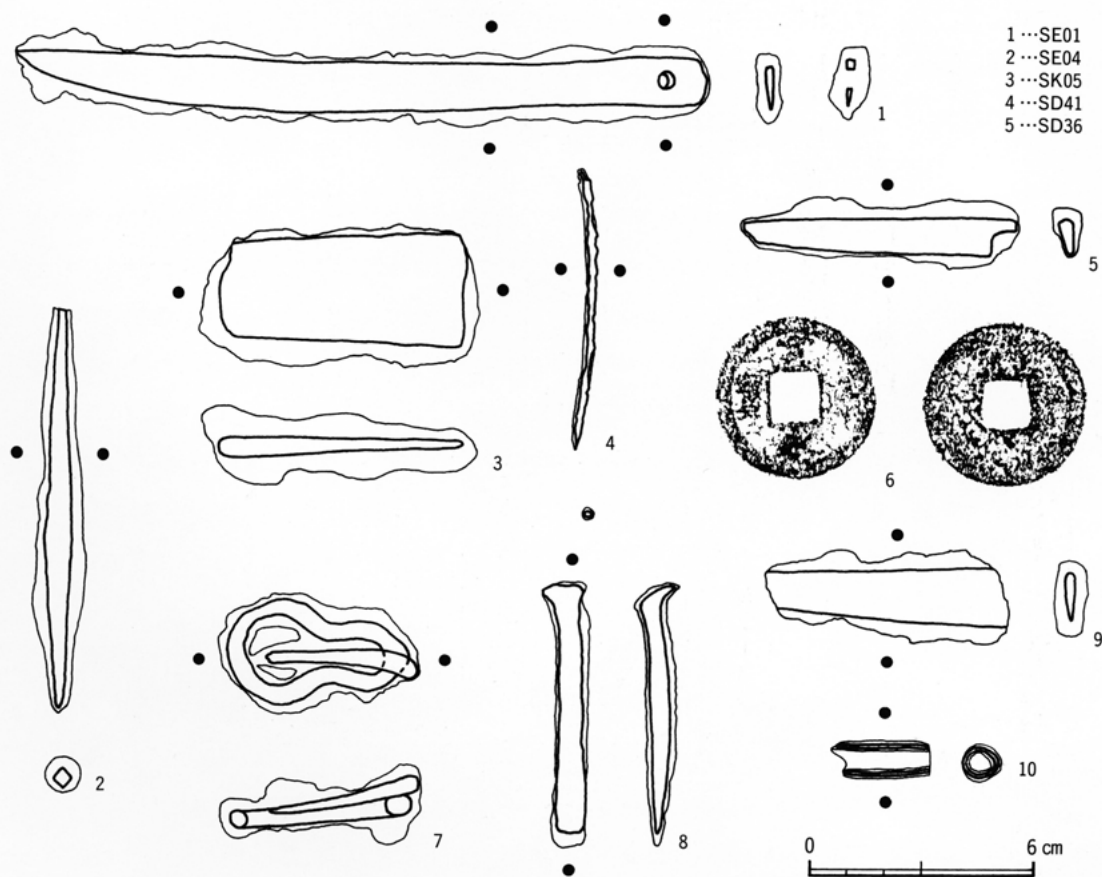


図25 金属製品

## 第4章 考察

### (1) 儀長正楽寺遺跡の地形・地質

濃尾平野は伊勢湾に臨む完新統の堆積物からなる、わが国有数の沖積平野である。沖積面には東から木曾川、長良川、揖斐川の3河川が流れ、大量の土砂を運搬・堆積し今日の沖積地形を造りあげた。沖積平野の地形は一般に、扇状地帯・自然堤防帯・三角州帯の3地帯に区分できる。濃尾平野はこれら3地帯をもった模式的な平野といえる。犬山付近より西側には半径およそ12kmの犬山扇状地（木曾川扇状地）広がり、標高およそ10mまでが扇状地帯である。平野の南部や南西部にかけての標高およそ2mより低い場所が三角州帯（いわゆるゼロメートル地帯）であり、伊勢湾に向けてほぼ平坦な面が広がっている。上記の扇状地帯と三角州帯とに挟まれる部分が自然堤防帯となる。

自然堤防帯において堆積物の運搬を担うのは河川である。とくに平野中央部には東から五条川、三宅川、日光川、領内川の4河川が北から南へ流れ下っている。以上の4河川の流れる自然堤防帯は、地形勾配がそれまでの扇状地帯に比べて著しく緩やかになる。また、堆積物の粒子の大きさは、扇状地帯が礫を主体とするのに比べて細くなり、砂や砂質堆積物を主体とするようになる。それらの堆積物は旧流路に並行に狭長な地形的な盛り上がり（微高地）を形成する。

儀長正楽寺遺跡は稲沢市儀長町に位置し、調査地東方を流れる三宅川の右岸に位置する。三宅川は木曾川から派生する支流のひとつである。ほぼ直線状に南西方向へ流下してきた河川は、一宮市を過ぎ稲沢市国府宮から調査地を含めた範囲において、顕著な蛇行ループを描くようになる。ループ内における蛇行軸は北からおよそ45°西へ傾く北西南東方向であり、およそ2.5kmの蛇行波長をもちながら屈曲している。ループが発達するのに伴って、河川流路の脇には自然堤防がいくつも認められるようになる。例えば、稲沢市矢合町、法花寺町、堀之内町、井堀町には典型的な自然堤防が形成されている（図26）。儀長町を過ぎるあたりで蛇行ループは終焉し、およそ5km南の海部郡佐織町勝幡において日光川、領内川と合流する。

自然堤防の形成された歴史は比較的新しく、例えば、東畑廃寺遺跡では7世紀中頃から平安時代後期の11世紀にかけての古瓦層の上に、層厚80cmほどの自然堤防をつくった褐色砂層が堆積している。また、砂層中には鎌倉時代の山茶碗がみられることから、地形としての自然堤防は11世紀以降に形成されたことがわかっている（井関、1994）。

蛇行河川系の地形は模式的には、自由蛇行するチャンネル（流路）とチャンネルの脇に形成される自然堤防、更にその外側の後背湿地で構成される。図26をみると、調査地周辺の地形も、旧流路に並行に狭長な地形的盛り上がり部分（自然堤防）とそれより低い部分（後背湿地）とに明瞭に分けられる（図26）。この地形的特徴とそれらを構成する堆積物の違いは、そのまま土地利用にも反映されており、後背湿地は周りよりも低く滞水するため水田

として利用されている。自然堤防部分は洪水時に河川からのオーバーフローによってもたらされた砂や砂質シルトで構成される。そのため粒子間隙が大きく透水性（水はけ）が良いので、宅地や畑地として利用されている。とくに当地は植木や苗木の産地として全国的に有名である。

（鬼頭 剛）

文献

井関弘太郎、1994、自然堤防はいつ、車窓の風景科学-名鉄 名古屋本線編-、名古屋鉄道 株式会社、35-39



図26 儀長正楽寺遺跡の位置と周辺の地形

（国土地理院発行の1/25,000 土地条件図「名古屋北部」を使用）

アミフセ部分が自然堤防、白抜き部分は後背湿地である。三宅川の蛇行ループ沿いに明瞭な自然堤防が形成されていることがわかる。また地形の違いは土地利用の状況にも反映されており、自然堤防は宅地や畑地として、後背湿地は水田として利用されている。

## 第5章 まとめ

### (1) 主要遺構の変遷

本項では、今回検出できた遺構を時期別に整理し、その変遷を考察する。

今回検出できた遺構を時期別に分けると、古墳時代、奈良・平安時代前期、平安時代末～鎌倉・室町時代、江戸時代に区分できるが、これらはそれぞれ異なった性格を持った遺構群となる。以上の観点から、以下古墳時代の遺構をA期、奈良・平安時代前期の遺構をB期、平安時代末～鎌倉・室町時代の遺構をC期、江戸時代の遺構をD期と呼称する。

なお、調査段階での遺跡の名称となっていた『正楽寺』や『儀長城』については、今回の調査区内では確認することができなかった。

#### A期

古墳時代の遺構群がこれに該当する。竪穴住居と土坑で構成される遺構群となる。遺構は調査区全体に確認できるが、93区にやや比重が考えられる。94B区で確認できた NR01 は、A期の遺構集中部の西側となるのかもしれない、調査区南側に分布する三橋遺跡と関連させて考えるべきなのかもしれない。また、この時期にはC、D区にも若干の遺構の分布が指摘でき、やはり儀長寺通遺跡と関連するのかもしれない。

#### B期

奈良・平安時代前期の遺構群がこれに該当する。いわゆる『正楽寺』の時期とほぼ平行する段階。検出できた遺構は非常に希薄となり、遺構相互に有機的な関連は確認できず、わずかに93区で特徴的な土坑Aの存在が注目できるとどまる。なお、SK18で確認できた遺物の出土状況をもってこのエリアを特徴付けるのであれば、生活域とはやや異なった土地利用を考えることができるのかもしれない。

#### C期

平安時代末～鎌倉・室町時代の遺構群がこれに該当する。今回の調査で最も良好な形で検出された。調査区全域に溝による方格地割が確認でき、その区画中に、井戸・土坑などが点在している。

次にこれらの遺構群を土器の形態分類から、C-1期～C-4期の四時期に区分する。これは、基本的には本書第3章の灰釉系陶器の形態分類に従ったものである。

ここでこれをまとめると、まずC-1期は灰釉系陶器碗A類、小碗に代表される時期でさらに二つに細分する。12世紀初頭～12世紀中葉。C-2期は碗B類、小皿A類に代表される時期。12世紀後葉～13世紀前葉。C-3期は碗C類、D類、F類に代表される時期、

13世紀中葉、C-4期は椀E類、G類、小皿C類、D類に代表される時期である。13世紀後葉～14世紀前半に該当する(1)。以下、時期別の変遷を考える。

C期の年代

まず、C-1期はC-1a期(12世紀前半)、C-1b期(12世紀第3四半期頃)に区分する。前者は、儀長正楽寺遺跡の形成期で、調査区の東側に溝がやや集中して掘削される。ほぼN-24°-Eの軸線に規制された溝による地割が形成される。なお、94C区の西側に掘削されたSD19の西側には主要な遺構は確認できない。後者の段階になると、調査区東側では前段階のSD11に加え、SD12が掘削される。SB04はこの段階に帰属し、SD12以东には明瞭に居住域として利用される(以下、東居住域)。一方、SD19以西では、この段階から明瞭に遺構の形成が開始される。SD21、24がこれで、前者は西側を大きく攪乱により削り取られているが、これはほぼN-47°-Eの軸線に規制された地割となる。溝の幅は、東居住域のそれと比較して細い。建物は検出されてはいないが、やはり多数の土坑Dと井戸が存在することや出土遺物の内容から居住域と考えられる(以下、西居住域)。

東西居住域

C-2期はSD11以东で、新たにSD08、10などが掘削される段階。調査区東端ではSD03、04、06で道を形成している可能性が考えられるなど、東居住域優位の状況がより明確になる段階。また、SD02は区画の意味が薄れ、多量の土器が廃棄される。一方、西居住域にも東居住域と類似する軸線を持つSD25が掘削され、東西居住域が同様の軸線に制約されたそれとして成立するものと考えられる。西居住域に所在するSB08、SA01、02は、帰属時期に明瞭な根拠をあげることができないが、当該期もしくは、次段階に帰属するものと考えられる。

C-3期は今回の調査区のピークに該当する。土坑Bが東居住域に掘削される時期。東居住域は、さらに西側にSD14、15が掘削され、規模の拡大がうかがえるなど、一層充実した構成となる。SD14、15は並行して存在する溝で、西居住域との境界となる。中央部は道としての土地利用も考えることができる。また、SD10とSD11により区画されたエリアは、SB06、07などの建物と、SE01と前段階から残存するSE02などの井戸、さらにSK39、40などの土坑Bで構成される。今回は、これらに有機的な関連性を求め、このエリアを屋敷地として認識しておく。なお、SE01は規模の突出する井戸で、この存在からこの屋敷地の優位性を考えることもできる。また、SB05も帰属時期に明瞭な根拠をあげることができないが、当該期もしくは、前段階に帰属するものと考えられる。また、SD08とSD04、06に区画されるエリアも今回の調査区中最も土坑Dの集中する部分となり、これらに未検出の掘立柱建物の柱穴である可能性を考えるのであれば、同様の性格を付与することもできるであろう。一方、西側居住域では、SD23が掘削され、これ以东に井戸が集中するなど、建物の検出はできなかったが、やはり屋敷地を形成しているものと考えられる。ただし、東居住域のように多数の溝が検出されているわけではなくSD14ないし15以西といった大区画として存在したものと思われる。つまり、この時期は、特に東居住域中に各屋敷地が明瞭な区画を伴って出現する段階と考えることができる。

C-4期は、遺構数が激減する時期に該当する。一方ではSD13、27など、この段階で新

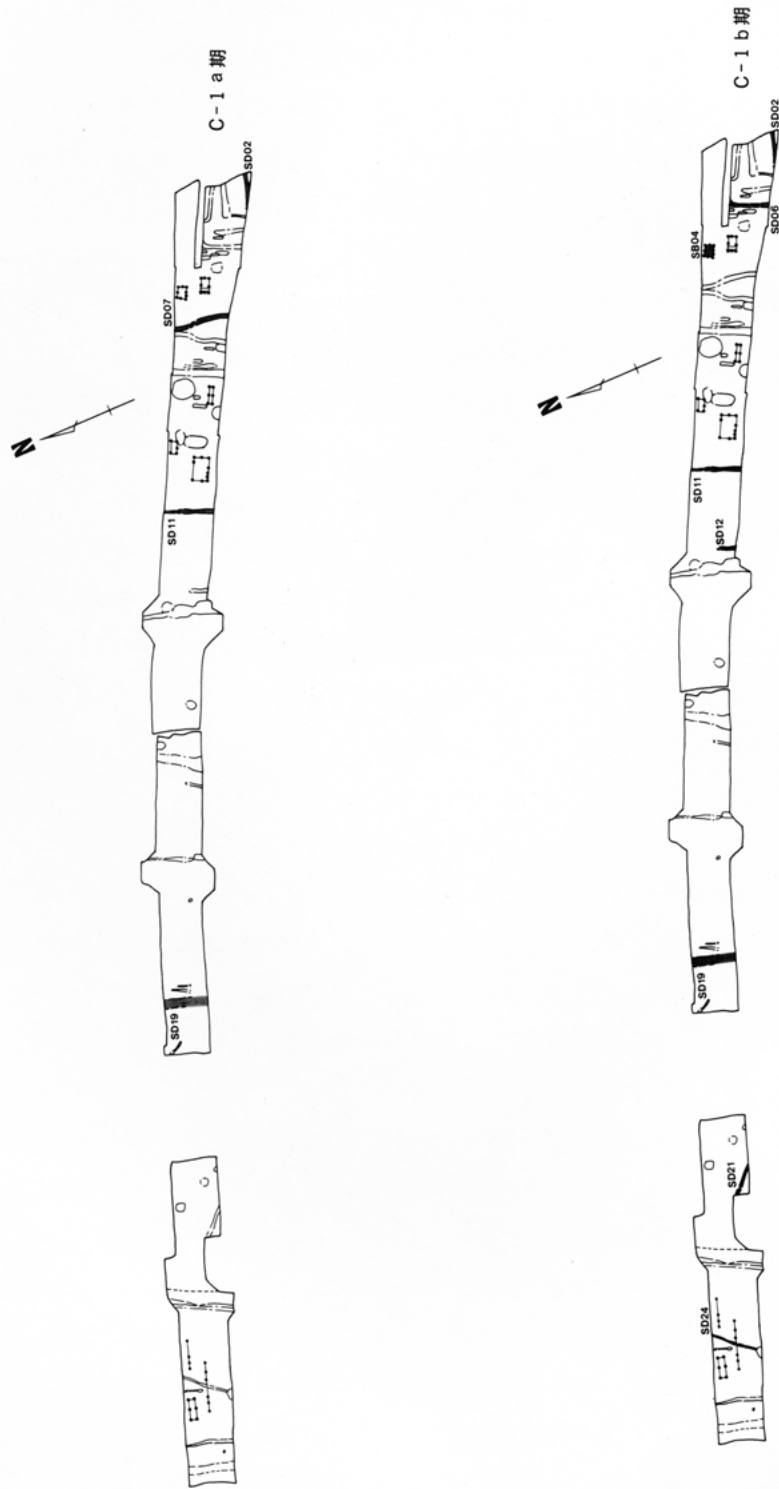


図27 遺構変遷図1 (1:2,000)

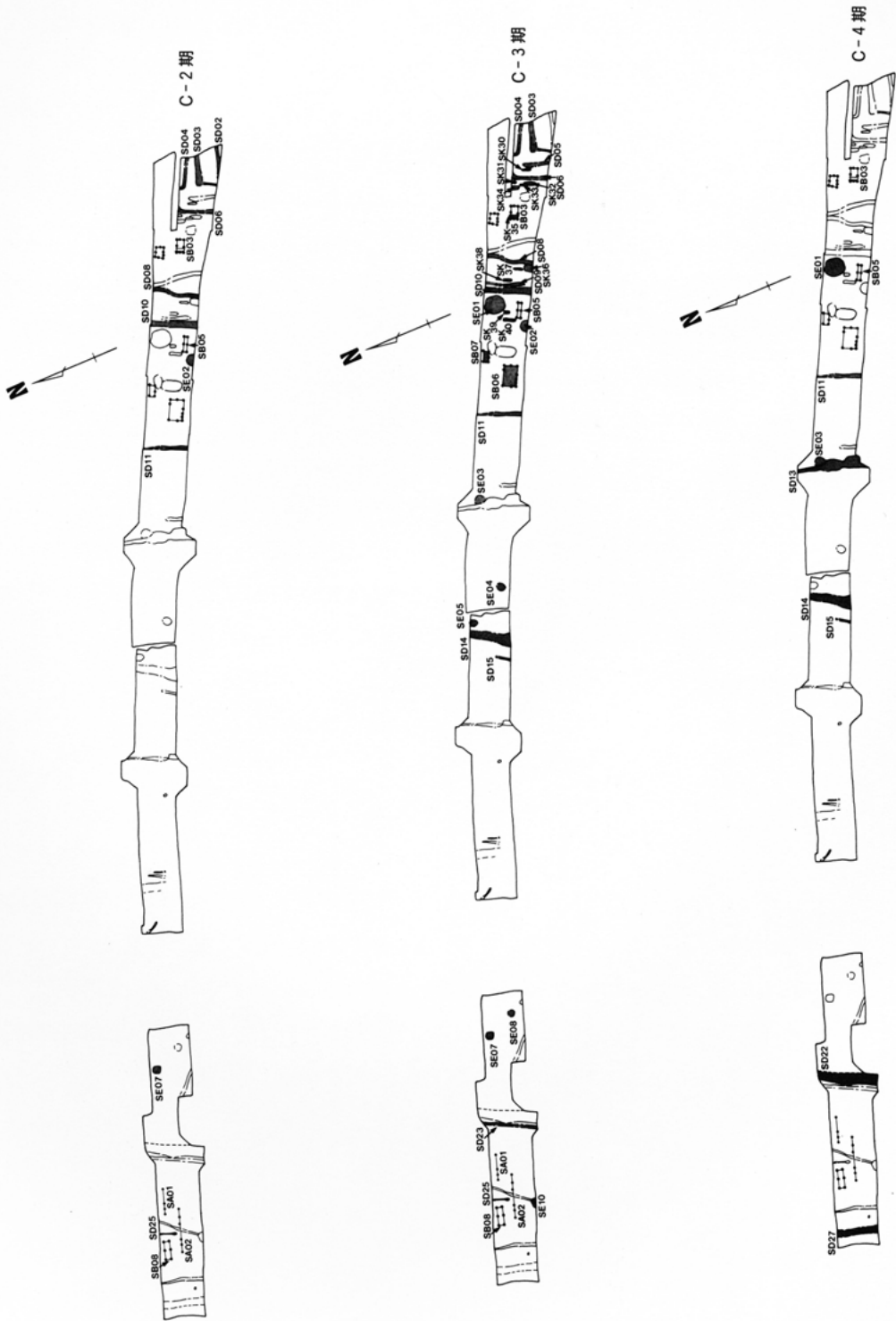


図28 遺構変遷図2 (1:2,000)

たに掘削される溝も存在することから、東西の居住域は規模を縮小しながらも継続していると考えられる。ただし、西居住域には、やはりSD14ないし15以西の大区画として存在するが新たに、SD27が掘削されることは注意したい。SD27は西居住域の外縁を規定する溝と考えられる。埋土中で確認できた土器投棄は、未使用品(2)、墨書を多く含む椀、皿のセットがみられることが特徴的となる。一方、東居住域には、このような内容を持つ溝は確認できない。

以上、C期の遺構変遷を考えた。ここでこれをまとめると、まず12世紀初頭に、多元的に東西二つの居住域が形成される。そして、12世紀後葉には東居住域に統合し、その後東居住域優位の形で遺構群が形成されたと考えられる。遺構形成のピークは13世紀中頃となる。この時期の東居住域では、溝による地割り中に、数棟の掘立柱建物と井戸、2ないし3基の土坑Bが展開する屋敷地をみることができた。そして、13世紀後半を境界とし、西居住域が再編成され、東西の居住域が性格が異なったものとして共存する。そして14世紀代には遺構数が激減し、やがて遺跡が消滅している。つまり、C期の遺構群は、13世紀後半に画期、そして15世紀初頭までには廃絶を考えることができる。

ところで今回確認できた13世紀後半頃の画期は、尾張低地の他遺跡でも指摘されている。また画期後に位置する13世紀後半～14世紀の遺構群には、SD27のような溝が存在していることは、土田遺跡(赤塚 1987)、阿弥陀寺遺跡(北村 1990)、松河戸遺跡(赤塚 1994)でも知られている。なお、これらの外側には墓域(方形土坑群)の存在が一般的とされている(赤塚 1994)。本遺跡では方形土坑群は確認できてはいないが、該当エリアが調査区外に存在しているものと考えられる。

#### D期

江戸時代の遺構群がこれに該当する。遺構は希薄となる。今回検出できた遺構は18、19世紀を主体とし、ほとんどが溝となる。主軸などはSD38、39、40を除き、C期の溝とよく一致する。しかし前段階の屋敷地はすでに廃絶しており、形骸的にこれを継承していることが考えられる。なお、D期段階の周辺景観を知る史料として『中嶋郡儀長村村絵図』(天保12年)があるが、ここには今回の調査区は多くが畑地として記載されている。

## (2) 出土遺物の検討

ここでは、出土遺物を前述の時期別に整理し、その変遷を考察する。

### A期

A期の資料は多量とはいえない。基本的には供膳具が須恵器、煮沸具が土師器で構成される。

なお、これらの資料は煮沸具の変化から大きく二つのまとまりを考えることができる。つまり台付甕段階のSK05資料と、前者が長胴甕に変わるSK10、11資料である。前者は宇田型甕3類、後者は長胴甕の初源的な形状を有している。いずれも資料不足と指摘される時期に属し、追加資料として重要であろう。なお、これらの資料に伴出する須恵器は、前者が東山11号窯式～東山61号窯式に、後者が東山61号窯式直後から東山44号窯式に該当している。

このほかに、断片的ではあるがこれらより若干遡る廻間Ⅲ式に属する資料と、松河戸Ⅱ式に属する資料も存在している。今回は確認できなかったが、後者には42ないし48などの最古段階の須恵器が伴うのであろうか。また、SK13資料はこれらの最後尾段階の資料で、奈良時代直前に該当している。

### B期

B期の資料も多量とはいえない。この中でSK18資料は、一括性が高く、よくまとまったものとなる。時的には折戸10号窯式を中心に、若干これを遡るものが加わる。やはり供膳具が須恵器で、煮沸具が土師器で構成される。この資料を前述した分類に従い、肉眼観察により個体数を算出すると、認識できた物は総数57個体に及ぶ。内訳は杯が29個体（A1類が2個体、A2類が5個体、A3類が1個体、B1類が1個体、B2類が1個体、C1類が3個体、C2類が9個体のほか、底部片でA1類かA2類か判断できないものが4個体、口縁部片が3個体）、瓶6個体、甑1個体、蓋11個体（うち1個体は転用硯）、盤1個体、甕は須恵器が3個体、土師器は6個体となる。これを同時期の窯跡出土資料と比較すると、器種は乏しい。これをもってSK18資料の特色を考えると、日常生活とはやや遊離したものを考えるべきなのかもしれない(3)。なお、これは今回の調査区ではB期に属する土坑が若干検出されたにすぎないこと、出土遺物がSK18を除くと非常に希薄となることとよく整合していると考えられる。

SK18の  
組成

### C期

今回最もまとまった資料を得ている。器種の組成は、供膳具が基本的には灰釉系陶器で、これに若干の貿易陶磁、土師器が加わり、煮沸具は土師器、貯蔵具は灰釉系陶器で構成される。

以下、すでに本章で述べた時期区分に従い、時期別に土器組成をまとめる。

まず、C-1期は灰釉系陶器碗A類、小碗に代表される時期。供膳具は土師器がこれに加わることが考えられる。貯蔵具はやはり灰釉系陶器の壺・瓶類となる。次のC-2期は、碗B類、小皿A類に代表される時期となる。土師器皿類はA1類を主体する。貯蔵具はやはり灰釉系陶器の壺・瓶類となる。煮沸具は伊勢型鍋3類となる。C-3期は碗C類、D類、F類に代表される時期。灰釉系陶器碗、皿類は碗C類、D類といった南部系のそれで構成されるが、この段階から北部系と呼称される碗F類、小皿D類が一定量含まれる。土師器皿類もA1類を主体とし、A2類やA3類やB類などがこれに加わる。貯蔵具は灰釉系陶器の甕、煮沸具は土師器の伊勢型鍋4類となる。最終段階のC-4期は、碗E類、G類、小皿C類、D類に代表される時期である。遺物量は乏しく、組成を考えるに足る資料は得られなかった。主力器種である灰釉系陶器碗、皿類は基本的には碗G類、小皿D類といった北部系で構成され、前段階が南部系主力であったのに対し逆転現象を起こす。貯蔵具は、灰釉系陶器の甕、煮沸具は土師器の伊勢型鍋5類となる。

以上が儀長正楽寺遺跡におけるC期の基本的な土器組成となる。次にこれを、前項で指摘したC-3期～C-4期の画期を境界として前後に分ける。まず前者は、供膳具では南部系の灰釉系陶器を主体とする。そしてこれに貿易陶磁や土師器がわずかに加わるが、後者は皿A類を主体とする。貯蔵形態はやはり灰釉系陶器で構成される。煮沸具は、ほぼ伊勢型鍋で占められる。一方、後者は供膳具が灰釉系陶器にほぼ限定でき、北部系のそれを主体とし、これに南部系が加わる。土師器の存在は不明確。貯蔵形態はやはり灰釉系陶器となる。

以上が儀長正楽寺遺跡のC期の土器の内容となる。なお、こうした様相は、周辺に所在する同時期の集落遺跡と基本的には同一となる。こうした点を考えると、本遺跡の土器組成は極めて一般的とすることができる。 (池本正明)

注

- (1) 年代観は(藤沢他 1993)に依拠した。
- (2) 使用痕が確認できないものを根拠に呼称する。厳密には「非使用痕土器」とも言うべきか。
- (3) 檜崎彰一氏の御教示による。

## 参考・引用文献

- 赤塚次郎 1992 「東海系のトレース」 『古代文化』44 古代学協会
- 1994 a 「一色青海遺跡」 『愛知県埋蔵文化財情報』9 愛知県教育委員会
- 1994 b 「松河戸様式の設定」 『松河戸遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎他 1987 『土田遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- 1990 『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- 1994 a 『舟橋宮裏遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- 1994 b 『松河戸遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- 池本正明 1990 a 「猿投窯の山茶碗」 『マージナル』10 愛知考古学談話会
- 1990 b 「奥三河の灰釉系陶器」 『考古学フォーラム』1 愛知考古学談話会
- 1991 「平安時代後期～室町時代」 『大湖』 愛知県埋蔵文化財センター
- 1995 a 「正楽寺・儀長城遺跡」 『愛知県埋蔵文化財情報』10 愛知県教育委員会
- 1995 b 「正楽寺・儀長城跡・儀長寺通遺跡」 『年報』平成6年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 1995 c 「一色青海遺跡」 『年報』平成6年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 池本正明他 1994 a 「正楽寺・儀長城遺跡」 『年報』平成5年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 1994 b 「一色青海遺跡」 『年報』平成5年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人他 1994 「跡ノ口遺跡・一色長畑遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」 『史林』65-5
- 大橋康二 1989 『肥前陶器』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 大橋康二他 1988 『古伊万里』別冊太陽 平凡社
- 岡本直久 1990 「松河戸遺跡 SD105について」 『年報』平成元年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 加藤唐九郎他 1962 『原色陶器大辞典』 淡交社
- 蟹江吉弘他 1993 『堀之内花之木遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- 北村利弘 1990 「鎌倉・室町時代」 『阿弥陀寺遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- 斎藤孝正 1983 「猿投窯成立期の様相」 『名古屋大学文学部研究論集』86
- 1986 「東山61号窯出土の須恵器」 『名古屋大学総合研究資料館報告』2
- 1988 「猿投窯第Ⅲ期杯類の型式編年」 『名古屋大学総合研究資料館報告』4
- 1989 「古墳時代の猿投窯」 『断夫山古墳とその時代』 東海埋蔵文化財研究会
- 斎藤孝正他 1995 『須恵器集成図録』第三巻 東日本編Ⅰ 雄山閣出版
- 佐藤公保 1986 「中世土師器研究ノート(1)」 『年報』昭和60年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 城ヶ谷和広 1991 a 「古代尾張の土師器」 『年報』平成2年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 1991 b 「土田遺跡における中世土器の様相」 『土田遺跡』Ⅱ 愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴他 1995 「宿場町期の遺物」 『清洲城下町遺跡』Ⅴ 愛知県埋蔵文化財センター
- 田口昭二 1983 『美濃焼』考古学ライブラリー17 ニューサイエンス社
- 1993 『美濃窯の焼物』多治見の古窯3 多治見市教育委員会
- 立松彰 1994 「愛知県」 『日本土器製塩研究』 青木書店
- 中野晴久 1983 「知多古窯址群における山茶碗の研究」 『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅰ
- 1987 「知多古窯跡群」 『マージナル』7 愛知考古学談話会
- 1994 「生産地における編年について」 『「中世常滑焼をおって」資料集』 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 1995 a 「生産地における編年について」 『常滑焼と中世社会』小学館
- 1995 b 「常滑焼編年作業と今後の課題」 『考古学ジャーナル』396
- 仲野泰裕 1988 「江戸時代後期の本業」 『江戸時代後期本業展』 瀬戸市文化センター・瀬戸市歴史民俗資料館
- 檜崎彰一 1979 「中世の社会と陶器生産」 『世界陶磁全集』3
- 1983 「猿投窯の編年について」 『愛知県古窯跡分布調査報告』Ⅲ 愛知県教育委員会
- 新田 洋 1985 「平安時代から中世に於ける煮沸用具—『伊勢型鍋』に関する若干の覚書—」 『三重考古学研究』1
- 日野幸治 1982 「出土遺物」 『尾張国府跡発掘調査報告書』(Ⅳ) 稲沢市教育委員会

- 藤沢良祐 1982 「瀬戸古窯跡群Ⅰ」 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 1984 「古瀬戸概説」 『美濃陶磁歴史館報』Ⅲ 土岐市美濃陶磁歴史館
- 1987 「本業焼の研究」(1) 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 1988 「本業焼の研究」(2) 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅶ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 1989 「本業焼の研究」(3) 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 1990 「瀬戸古窯跡群Ⅱ」 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 1991 「瀬戸古窯跡群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ  
瀬戸市歴史民俗資料館
- 1994 「山茶碗研究の現状と課題」 『研究紀要』3 三重県埋蔵文化財センター
- 1995 「山茶碗の生産体制」 『常滑焼と中世社会』 小学館
- 藤沢良祐他 1990 『尾呂』 瀬戸市教育委員会
- 1993 『東海の中世窯』 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 北條献示 1985 『儀長町埋蔵文化財発掘調査報告書』 稲沢市教育委員会
- 前田雅彦 1995 「一色青海遺跡」 『愛知県埋蔵文化財情報』10 愛知県教育委員会
- 町田章他 1985 『木器集成図録』 奈良国立文化財研究所
- 森田勉他 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」 『九州歴史資料館研究論集』4
- 山川一年 1993 「本業焼の製品」 『瀬戸市史』陶磁史編5 瀬戸市史編纂委員会
- 山下峰司他 1991 『古瀬戸小西遺跡』 瀬戸市教育委員会

# 付 表

---



## SB (建物)

新番号	旧番号	規模	時期
SB01	93SK34		A期
" 02	94DSK59		"
" 03	94ASK50, 52, 53, 61, 65, 66, 204, 222	3.8×2.2	C期
" 04	94ASK13, 18, 22, 24, 27, 29, 180, 184	3.1×2.5	"
" 05	94ASK109, 110, 111, 113, 148, 170	4.5×1.2	"
" 06	94BSK40, 13, 17, 19, 21, 26, 32, 39, 42	6.0×4.0	"
" 07	94BSK96, 98, 100, 101, 102	3.5×1.6	"
" 08	94DSK97, 103, 108, 110, 166, 167	5.3×1.5	"

## SA (柵)

新番号	旧番号	全長	時期
SA01	94DSK63, 64, 68, 70, 71	7.4	C期
" 02	94DSK80, 84, 90, 130, 135, 140	13.2	"

## SE (井戸)

新番号	旧番号	長径	短径	深さ	時期
SE01	94ASX01	6.1	5.6		C期
" 02	94ASK168	3.0	—		"
" 03	94BSK132	—	—		"
" 04	94BSK111	—	2.3		"
" 05	94CSK98	—	2.1		"
" 06	94CSK37	1.0	0.7		"
" 07	94DSK21	2.4	2.3		"
" 08	94DSK48	2.0	—		"
" 09	94DSK147	0.5	0.4		"
" 10	94DSK153	—	0.8		"
" 11	94DSK152	0.8	0.8		"

## SK (土坑)

新番号	旧番号	分類	長径	短径	深さ	時期
SK01	93SK46	土坑A	—	—	0.1	A期
" 02	94ASK208	"	—	—	0.2	"
" 03	94ASK138	"	—	—	0.2	"
" 04	94CSK69	"	—	2.8	0.2	"
" 05	94CSX01	"	8.7	—	0.2	"
" 06	94BSK147	土坑C	1.7	—	0.4	"
" 07	93SK25	土坑D	—	0.4	0.2	"
" 08	94ASK202	"	1.4	—	0.7	"
" 09	94ASK108	"	1.4	1.2	0.1	"
" 10	94BSK01	"	1.1	—	0.1	"
" 11	94BSK09	"	—	1.1	0.1	"
" 12	94BSK82	"	0.4	0.4	0.1	"
" 13	94CSK90	"	0.4	0.4	0.2	"
" 14	94CSK28	"	2.3	—	0.3	"
" 15	94DSK50	"	—	0.5	0.2	"
" 16	94DSK22	"	2.1	1.2	0.4	"
" 17	93SK18	土坑A	—	—	0.1	B期
" 18	93SK55	土坑C	2.0	—	0.5	"
" 19	93SK40	土坑D	—	0.7	0.2	"
" 20	94BSK113	"	0.5	0.4	0.1	"
" 21	94BSK114	"	1.5	0.8	0.2	"
" 22	94BSK122	"	1.1	0.7	0.7	"
" 23	94CSK84	"	0.5	0.4	0.2	"
" 24	94CSK75	"	—	1.0	0.1	"
" 25	93SK32	土坑A	—	—	0.2	C期
" 26	93SK02 94ASK125	"	2.9	2.5	0.1	"
" 27	94BSK86	"	—	—	0.4	"
" 28	94BSK07	"	—	3.1	0.3	"
" 29	94BSK41	"	3.0	—	0.4	"
" 30	93SK30	土坑B	2.8	0.8	0.1	"
" 31	93SK04	"	—	0.9	0.2	"
" 32	93SK07	"	3.7	1.1	0.4	"
" 33	93SK06	"	2.7	0.8	0.3	"

主要遺構計測一覽

新番号	旧番号	分類	長径	短径	深さ	時期
SK34	93SK03	土坑B	5.1	1.1	0.5	"
" 35	94ASK137	"	—	1.0	0.2	"
" 36	94ASK144	"	—	2.0	0.3	"
" 37	94ASK143	"	2.9	0.9	0.3	"
" 38	94ASK160	"	—	1.0	0.1	"
" 39	94ASK151	"	1.8	1.1	0.3	"
" 40	94ASK152	"	3.9	1.0	0.3	"
" 41	93SK68A	土坑D	—	1.7	0.2	"
" 42	94ASK60	"	1.0	1.0	0.5	"
" 43	94ASK160	"	0.5	0.4	0.2	"
" 44	94ASK63	"	0.5	0.4	0.2	"
" 45	94ASK35	"	0.5	0.4	0.2	"
" 46	94ASK85	"	0.4	0.4	0.6	"
" 47	94CSK93	"	—	—	0.1	"
" 48	94DSK20	"	—	1.0	0.1	"
" 49	94DSK155	"	—	—	0.3	"
" 50	94DSK128	"	2.4	—	0.3	"

SD (溝)

新番号	旧番号	全長	幅	深さ	時期
SD01	94B <sub>2</sub> SD01	3.0	0.8~1.0	0.2	A期
" 02	93SD06	8.7	0.7~1.0	0.1	C期
" 03	93SD04,07	13.6	1.2~1.7	0.5	"
" 04	93SD03	7.2	0.4~0.9	0.2	"
" 05	93SD02	7.7	0.7~1.3	0.2~0.3	"
" 06	93SD01	12.9	0.7~1.1	0.4	"
" 07	94ASD01	14.5	0.8~1.4	0.2	"
" 08	94ASD02	13.7	0.9~1.4	0.3	"
" 09	94ASD03	8.1	0.9~1.2	0.2	"
" 10	94ASD04	13.7	1.6~2.0	0.3	"
" 11	94BSD01	13.1	0.4~1.2	0.2~0.3	"
" 12	94BSD02	4.7	0.7~0.9	0.2	"
" 13	94BSD11	21.3	0.9~3.7	0.2~0.3	"
" 14	94CSD04	12.0	2.0~3.7	0.6	"

新番号	旧番号	全長	幅	深さ	時期
SD15	94CSD16	3.1	0.6	0.2	"
" 16	94CSD13	11.4	0.5~1.6	0.2~0.3	"
" 17	94CSD10	4.3	0.2~0.6	0.2	"
" 18	94CSD11	2.8	0.2~0.4	0.1	"
" 19	94CSD08	4.2	2.3~2.5	0.2	"
" 20	94CSD17	3.8	0.5~0.8	0.3~0.4	"
" 21	94DSD01	6.8	0.6~0.9	0.2	"
" 22	94DSD04	17.7	0.7	0.2	"
" 23	94DSD06	16.5	0.7~1.2	0.2	"
" 24	94DSD08	11.8	0.3~0.8	0.2~0.3	"
" 25	94DSD13	3.8	0.4~0.8	0.2~0.3	"
" 26	94DSD09	10.7	0.4~0.9	0.1~0.3	"
" 27	94DSD11	12.3	1.8~2.1	0.6	"
" 28	94ASD05	12.9	2.4~2.6	0.3~0.6	D期
" 29	94ASD06	12.9	0.3~1.0	0.2	"
" 30	94ASD07	12.8	0.3~	0.1	"
" 31	94BSD04	29.0	0.4~1.0	0.1	"
" 32	94BSD07	16.5	0.2~	0.1	"
" 33	94BSD09	21.2	1.6~1.9	0.1~0.3	"
" 34	94CSD01	11.2	0.2~0.4	0.1	"
" 35	94CSD02	18.6	0.7~1.5	0.1	"
" 36	94CSD14	11.2	0.3~0.4	0.1~0.2	"
" 37	94CSD15	8.0	0.2~0.3	0.1	"
" 38	94CSD05	9.8	0.6~0.7	0.3	"
" 39	94CSD06	21.3	3.2~3.6	0.5~0.7	"
" 40	94CSD07	21.5	0.9~3.5	0.3~0.6	"
" 41	94DSD03	18.0	—	0.3~0.5	"
" 42	94DSD05	14.7	0.3~0.4	0.1~0.2	"
" 43	94DSD02	12.0	0.6~	0.1~0.3	"

・単位はm

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
1	SB01	須恵器	蓋	14.8	—	5.3	黄灰色	93E1	
2	SB02	土師器	甕	13.8	—	—	浅黄橙色	94DE61	
3	SK01	須恵器	杯	14.0	10.6	3.4	灰色	93E21	ひずみ
4	SK02	"	蓋	12.9	—	4.6	青灰色	94AE184	
5	"	"	瓶	—	10.7	—	明オリーブ灰色	94AE183	
6	SK05	"	杯	12.6	—	—	灰色	94CE3	
7	"	"	"	12.0	—	—	灰色	94CE2	
8	"	"	"	11.9	—	—	青灰色	94CE4	
9	"	"	高杯	14.5	—	—	青灰色	94CE1	
10	"	土師器	甕	15.9	10.0	30.6	にぶい黄橙色	94CE101	
11	"	"	"	14.4	—	—	明褐灰色	94CE104	
12	"	"	"	14.5	—	—	にぶい黄橙色	94CE106	
13	"	"	"	14.6	—	—	灰黄褐色	94CE105	
14	"	"	"	—	—	—	浅黄橙色	94CE102	
15	"	"	"	—	9.2	—	浅黄橙色	94CE103	
16	SK06	須恵器	甕	45.4	—	—	灰色	94BE36	
17	SK07	土師器	高杯	19.8	14.6	14.0	にぶい黄褐色	93E4	
18	SK08	"	壺	9.0	—	13.7	橙色	94AE185	
19	SK09	須恵器	高杯	11.8	9.7	11.1	灰白色	94AE186	
20	SK10	"	杯	11.2	—	—	灰色	94BE106	
21	"	土師器	甕	19.3	—	—	淡黄色	94BE105	
22	"	"	"	11.9	—	—	にぶい赤褐色	94BE104	
23	SK11	須恵器	杯	13.0	—	5.4	灰オリーブ色	94BE103	
24	"	土師器	甕	19.6	—	—	にぶい黄橙色	94BE55	
25	"	"	"	20.2	—	33.3	にぶい黄橙色	94BE102	
26	SK12	"	"	21.2	—	—	にぶい黄橙色	94BE52	
27	SK13	須恵器	杯	11.9	—	4.4	灰色	94CE97	
28	"	"	"	12.6	9.5	3.8	オリーブ灰色	94CE100	
29	"	"	"	12.3	9.1	3.5	明緑灰色	94CE99	
30	"	"	"	13.1	9.8	4.3	黒褐色	94CE98	
31	"	"	甕	—	4.8	—	灰色	94CE26	
32	"	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄褐色	94CE25	
33	SK14	須恵器	高杯	12.8	9.9	10.0	青灰色	94CE8	
34	"	土師器	甕	13.6	—	—	浅黄橙色	94CE21	
35	SK15	"	壺	13.2	—	—	明褐灰色	94DE55	

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
36	SK16	土師器	高杯	15.9	—	—	浅黄橙色	94DE21	
37	94A区	須恵器	杯	11.6	—	4.8	青灰色	94AE37	
38	94C区	"	"	13.4	—	5.1	青灰色	94CE7	
39	94A区	"	"	12.6	—	5.2	青灰色	94AE18	
40	94C区	"	"	15.8	—	5.0	灰色	94CE13	
41	94C区	"	蓋	14.2	—	4.9	青灰色	94CE6	
42	93区	"	"	13.1	—	—	灰白色	93E125	
43	94C区	"	"	7.4	—	—	青灰色	94CE15	
44	93区	"	"	11.9	—	—	灰白色	93E91	
45	"	"	"	11.2	—	3.1	灰白色	93E93	
46	"	"	"	11.2	—	2.4	灰白色	93E124	
47	94A区	"	"	11.1	—	—	灰白色	94AE19	
48	93区	"	鉢	—	—	—	黒褐色	93E198	
49	"	土師器	高杯	17.0	11.3	12.3	淡黄色	93E76	
50	"	"	"	—	10.6	—	黄橙色	93E89	
51	94A区	"	甕	16.0	—	—	淡赤橙色	94AE17	
52	93区	"	"	15.6	—	—	明黄褐色	93E95	
53	"	"	"	20.4	—	—	淡黄色	93E90	
54	94A区	"	"	16.0	—	—	灰白色	94AE40	
55	93区	"	"	20.0	—	—	にぶい橙色	93E127	
56	SK18	須恵器	杯A1	16.0	12.0	5.6	赤灰色	93E157	
57	"	"	杯A2	14.5	9.9	4.0	褐色	93E150	
58	"	"	"	13.8	9.6	4.1	緑灰色	93E160	
59	"	"	杯A1	12.0	8.6	4.5	灰オリーブ色	93E154	
60	"	"	杯A2	12.8	8.8	3.3	黒褐色	93E147	
61	"	"	"	14.0	10.2	3.9	灰色	93E153	
62	"	"	"	13.5	9.9	4.0	明黄褐色	93E151	
63	"	"	杯A3	21.9	16.0	3.6	灰色	93E162	
64	"	"	杯A2	14.0	10.2	3.7	灰色	93E165	
65	"	"	杯B1	12.8	—	4.1	にぶい橙色	93E152	
66	"	"	杯B2	12.1	7.7	4.5	橙色	93E148	
67	"	"	杯	13.0	—	—	赤褐色	93E163	
68	"	"	"	12.8	—	—	褐色	93E161	
69	"	"	"	—	9.6	—	黄褐色	93E166	
70	"	"	杯C2	12.8	6.0	5.0	灰白色	93E159	

## 遺物計測一覧

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
71	SK18	須恵器	杯C1	16.2	9.2	6.3	黄灰色	93E168	
72	"	"	杯C1	11.2	—	—	オリーブ 黒色	93E169	
73	"	"	杯C2	12.0	5.2	3.7	黄灰色	93E146	
74	"	"	"	11.7	6.3	3.9	灰色	93E149	
75	"	"	"	12.6	7.4	3.6	オリーブ 灰色	93E156	
76	"	"	"	12.8	6.4	4.8	明黄褐色	93E155	
77	"	"	"	12.2	6.0	3.6	にぶい 黄橙色	93E158	
78	"	"	"	—	6.0	—	灰色	93E164	
79	"	"	蓋	17.5	—	4.6	灰白色	93E170	
80	"	"	"	14.3	—	2.5	橙色	93E172	
81	"	"	"	15.0	—	3.4	浅黄色	93E174	
82	"	"	"	13.0	—	2.4	にぶい 黄橙色	93E171	
83	"	"	"	13.8	—	3.8	にぶい 橙色	93E173	
84	"	"	"	14.4	—	—	灰オリー ブ色	93E176	
85	"	"	"	15.7	—	—	灰オリー ブ色	93E177	
86	"	"	"	15.0	—	—	明黄褐色	93E175	
87	"	"	盤	—	8.0	—	暗オリー ブ色	93E167	
88	"	"	長頸瓶	7.4	—	—	灰色	93E181	
89	"	"	"	—	—	—	灰色	93E180	
90	"	"	"	—	—	—	灰色	93E182	
91	"	"	"	—	—	—	灰白色	93E183	
92	"	"	瓶	—	8.4	—	暗オリー ブ褐色	93E185	
93	"	"	"	—	10.8	—	青灰色	93E184	
94	"	"	長頸瓶	—	6.1	—	灰色	93E179	
95	"	"	浄瓶	1.3	7.8	27.3	暗オリー ブ灰色	93E145	
96	"	"	高杯	—	—	—	灰色	93E186	
97	"	"	瓶	27.8	—	—	灰白色	93E187	
98	"	土師器	甕	22.6	—	—	にぶい 黄橙色	93E193	
99	"	"	"	21.6	—	—	浅黄橙色	93E190	
100	"	"	"	19.8	—	—	にぶい 橙色	93E192	
101	"	"	"	14.8	—	—	浅黄橙色	93E189	
102	"	"	"	—	—	—	淡黄色	93E188	
103	SK17	灰輪陶器	碗	13.9	6.7	4.6	浅黄色	93E2	
104	"	"	"	—	7.2	—	灰黄色	93E3	
105	SK19	須恵器	杯C1	14.0	5.6	4.5	灰色	93E11	

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
106	SK21	須恵器	杯C1	11.6	—	3.6	橙色	94BE43	
107	SK22	"	蓋	15.4	—	3.3	にぶい 黄褐色	94BE42	
108	SK23	"	短頸壺	9.4	—	—	灰白色	94CE24	
109	SK24	"	杯	12.0	—	—	黄灰色	94CE23	
110	93区	"	杯C1	12.9	5.4	3.9	明赤褐色	93E92	
111	94B区	"	"	12.5	5.0	4.2	灰色	94BE17	
112	"	灰輪陶器	碗	17.5	8.4	5.4	灰黄色	94BE16	
113	93区	"	"	13.0	5.8	3.6	淡黄色	93E67	
114	"	"	"	—	8.4	—	灰白色	93E122	
115	SB04	灰輪系 陶器	広口瓶	16.0	—	—	灰白色	94AE15	
116	"	"	小碗	9.5	3.6	2.4	灰白色	94AE16	
117	SB06	"	碗C類	15.2	7.2	5.3	オリーブ 黄色	94BE48	
118	"	"	小皿 B類	8.6	4.6	1.9	灰白色	94BE49	
119	SB07	"	碗D類	14.4	6.0	5.2	灰白色	94BE37	ひずみ
120	SE01	"	"	13.8	5.8	5.4	灰白色	94AE67	
121	"	"	"	12.4	5.1	5.1	灰白色	94AE69	
122	"	"	"	13.2	5.0	5.6	灰白色	94AE68	
123	"	"	"	13.5	5.9	5.2	灰白色	94AE66	
124	"	"	"	14.2	—	—	灰白色	94AE72	
125	"	"	"	14.5	—	—	灰白色	94AE70	
126	"	"	碗E類	15.2	6.4	4.2	褐色	94AE73	
127	"	"	碗D類	13.8	—	—	灰白色	94AE71	
128	"	"	"	13.6	—	—	灰白色	94AE74	
129	"	"	碗F類	13.8	—	—	灰白色	94AE80	
130	"	"	碗D類	—	5.2	—	灰白色	94AE76	
131	"	"	"	—	5.6	—	灰白色	94AE75	
132	"	"	"	—	6.6	—	灰白色	94AE77	
133	"	"	碗F類	—	5.7	—	灰白色	94AE78	
134	"	"	"	—	5.4	—	灰白色	94AE79	
135	"	"	小皿 B類	7.9	4.5	1.9	灰白色	94AE100	
136	"	"	小皿 C類	7.7	4.8	1.7	灰白色	94AE91	
137	"	"	小皿 B類	7.8	5.2	1.8	灰白色	94AE84	
138	"	"	小皿 C類	8.0	4.8	1.5	灰白色	94AE102	
139	"	"	小皿 B類	7.4	3.7	1.9	灰白色	94AE85	
140	"	"	小皿 C類	8.4	4.9	1.6	灰白色	94AE95	

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
141	SE01	灰釉系陶器	小皿C類	7.9	4.9	1.4	灰白色	94A E101	
142	"	"	"	7.9	5.0	1.7	灰白色	94A E97	
143	"	"	"	7.5	5.0	1.7	灰白色	94A E86	
144	"	"	"	8.4	5.7	1.6	灰白色	94A E89	
145	"	"	"	6.8	3.6	1.3	灰白色	94A E93	
146	"	"	"	7.8	5.0	1.3	灰白色	94A E92	
147	"	"	"	7.8	5.3	1.6	灰白色	94A E81	墨書 【三】
148	"	"	"	7.8	4.8	1.9	灰白色	94A E82	
149	"	"	"	8.6	5.2	1.5	灰白色	94A E98	
150	"	"	"	9.3	5.2	1.9	灰白色	94A E90	
151	"	"	"	8.0	4.4	1.9	灰白色	94A E83	
152	"	"	"	8.0	4.9	1.5	灰白色	94A E99	
153	"	"	"	8.5	5.0	1.6	灰白色	94A E96	
154	"	"	鉢	26.6	11.2	15.2	灰白色	94A E103	ひずみ
155	"	土師器	皿A1類	12.6	—	—	浅黄橙色	94A E106	
156	"	"	"	7.0	4.0	1.2	にぶい 橙褐色	94A E105	
157	"	"	鍋	—	—	—	灰白色	94A E109	
158	"	"	"	—	—	—	浅黄橙色	94A E110	
159	"	"	"	—	—	—	灰白色	94A E108	
160	"	"	"	—	—	—	淡黄褐色	94A E107	
161	"	貿易陶磁	青磁碗	—	—	—	灰白色	94A E104	
162	SE02	灰釉系陶器	碗C類	15.0	5.5	5.4	灰白色	94A E61	
163	"	"	"	14.8	6.4	5.2	灰白色	94A E60	
164	"	"	"	13.8	—	—	灰白色	94A E59	
165	"	"	碗B類	—	6.0	—	灰白色	94A E62	
166	"	"	碗F類	—	5.4	—	浅黄橙色	94A E56	ひずみ
167	"	"	"	—	6.2	—	灰白色	94A E55	
168	"	"	小碗	—	4.6	—	灰白色	94A E63	
169	"	"	小皿A類	7.3	4.0	2.1	灰白色	94A E65	
170	"	土師器	鍋	—	—	—	灰白色	94A E58	
171	"	"	"	—	—	—	灰白色	94A E57	
172	SE03	灰釉系陶器	碗D類	14.0	6.0	5.0	灰白色	94B E 1	
173	"	"	碗E類	13.0	5.8	5.2	灰白色	94B E 3	
174	"	"	碗F類	14.0	5.8	5.4	浅黄橙色	94B E 8	
175	"	"	"	14.6	6.6	5.6	灰白色	94B E 7	

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
176	SE03	灰釉系陶器	碗A類	—	7.4	—	灰白色	94B E11	
177	"	"	碗D類	—	6.2	—	灰白色	94B E6	
178	"	"	碗C類	—	6.8	—	灰白色	94B E5	
179	"	"	碗D類	—	6.8	—	灰色	94B E4	
180	"	"	碗F類	—	6.0	—	灰白色	94B E10	
181	"	"	"	—	5.0	—	灰白色	94B E9	
182	"	"	小皿C類	8.3	4.5	1.9	灰色	94B E12	
183	"	"	小皿B類	8.0	4.6	2.1	灰白色	94B E13	
184	"	"	壺	—	13.6	—	灰白色	94B E14	
185	SE04	"	小皿D類	8.5	5.5	1.1	灰白色	94B E41	
186	"	"	"	8.4	5.2	1.1	灰白色	94B E40	
187	SE07	"	碗B類	15.6	6.4	5.1	灰黄色	94D E7	
188	"	"	"	15.4	6.8	4.9	灰白色	94D E1	
189	"	"	"	15.6	7.2	5.0	灰白色	94D E3	
190	"	"	"	15.8	7.6	5.0	灰白色	94D E4	
191	"	"	"	15.7	7.1	5.4	灰白色	94D E2	
192	"	"	碗C類	15.2	6.6	5.9	灰黄色	94D E5	
193	"	"	"	14.9	6.8	5.1	灰色	94D E6	
194	"	"	碗B類	17.2	—	—	灰白色	94D E9	
195	"	"	小皿A類	7.8	4.0	2.3	灰白色	94D E16	
196	"	"	"	8.1	4.6	2.3	灰色	94D E11	
197	"	"	"	8.1	—	—	灰色	94D E12	
198	"	"	"	8.4	3.8	2.2	灰白色	94D E10	
199	"	"	羽釜	—	—	—	明赤褐色	94D E13	ひずみ
200	"	土師器	鍋	—	—	—	淡黄色	94D E15	
201	SE08	灰釉系陶器	碗F類	—	4.4	—	灰白色	94D E65	
202	SE10	"	碗C類	—	5.6	—	灰白色	94D E31	
203	"	"	壺	—	—	—	明青灰色	94D E30	
204	"	"	"	—	—	—	灰黄色	94D E29	
205	"	"	甕	—	—	—	にぶい 赤褐色	94D E32	
206	SK26	"	碗B類	16.0	—	—	灰白色	94A E51	
207	"	"	"	—	7.2	—	灰黄色	93E10	
208	"	"	小皿A類	7.4	3.4	2.2	灰黄色	93E9	
209	"	"	鉢	34.0	—	—	灰白色	93E8	
210	"	土師器	皿A1類	8.4	4.0	1.7	浅黄橙色	94A E52	

遺物計測一覧

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
211	SK27	土師器	皿A3類	9.8	4.0	2.3	にぶい黄橙色	94BE53	
212	SK28	灰釉系陶器	椀D類	14.6	6.8	5.1	灰オリーブ色	94BE79	
213	"	"	"	15.8	7.0	4.3	灰白色	94BE81	
214	"	"	椀F類	15.2	—	—	灰白色	94BE85	
215	"	"	椀D類	—	6.8	—	灰白色	94BE82	
216	"	"	椀B類	—	7.4	—	灰白色	94BE83	
217	"	"	椀D類	—	6.6	—	灰白色	94BE84	
218	"	"	小皿C類	8.6	5.4	1.4	にぶい黄橙色	94BE88	
219	"	"	"	8.4	5.4	1.7	灰白色	94BE87	
220	"	"	"	8.2	5.0	1.8	灰白色	94BE90	
221	"	"	"	8.8	5.2	1.7	灰白色	94BE89	
222	"	"	"	7.7	5.2	1.5	灰白色	94BE86	
223	"	"	"	8.0	5.0	1.7	灰白色	94BE91	
224	"	"	"	8.0	5.0	1.7	灰白色	94BE92	
225	"	土師器	皿A2類	9.0	4.2	1.3	にぶい黄橙色	94BE95	
226	"	"	皿A1類	8.4	5.6	1.3	浅黄橙色	94BE93	
227	"	"	"	6.8	4.0	1.2	にぶい黄橙色	94BE94	
228	"	"	"	8.6	—	—	にぶい黄橙色	94BE96	
229	"	"	皿B類	—	7.8	—	橙色	94BE97	
230	"	貿易陶磁	青磁椀	17.0	—	—	灰オリーブ色	94BE98	
231	"	"	青白磁皿	—	—	—	明緑灰色	94BE45	
232	SK34	灰釉系陶器	椀F類	14.6	—	—	灰黄色	93E13	
233	"	"	椀B類	—	6.7	—	灰白色	93E12	
234	"	"	椀F類	—	4.2	—	灰白色	93E14	
235	SK37	"	"	—	6.0	—	灰白色	94AE188	
236	"	"	小皿C類	7.4	5.4	1.7	灰白色	94AE189	
237	"	"	小皿D類	8.2	5.0	1.0	淡黄色	94AE190	
238	SK41	"	小皿C類	7.8	5.2	1.5	灰白色	93E19	
239	SK42	"	小椀	9.7	4.4	3.5	灰色	94AE43	
240	SK43	"	椀C類	13.4	6.2	5.2	灰白色	94AE54	
241	SK44	貿易陶磁	白磁椀	—	5.6	—	灰白色	94AE44	
242	SK45	"	"	16.2	—	—	灰白色	94AE42	
243	SK46	灰釉系陶器	椀C類	13.2	—	—	灰白色	94AE46	
244	"	"	"	13.1	—	—	灰白色	94AE48	
245	"	"	"	—	6.1	—	灰白色	94AE47	

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
246	SK47	灰釉系陶器	小皿B類	8.4	5.0	1.8	灰色	94CE28	
247	SK48	"	椀B類	15.0	—	—	灰白色	94DE17	
248	"	"	"	—	7.0	—	灰白色	94DE18	
249	"	"	"	—	7.2	—	灰白色	94DE19	
250	SK49	"	短頸壺	10.7	—	—	灰白色	94DE33	
251	SK50	"	椀F類	14.6	6.9	5.2	灰白色	94DE27	
252	"	"	椀B類	16.1	6.6	5.1	灰白色	94DE28	
253	SD02	"	"	15.0	7.6	4.6	灰白色	93E44	
254	"	灰釉系陶器	椀	—	8.6	—	灰白色	93E49	
255	"	灰釉系陶器	椀B類	—	7.3	—	灰白色	93E48	
256	"	"	"	—	6.6	—	明黄褐色	93E51	
257	"	"	"	—	7.8	—	灰オリーブ色	93E43	
258	"	"	椀A類	—	7.4	—	灰白色	93E45	
259	"	"	椀B類	—	6.6	—	灰白色	93E50	
260	"	"	"	—	7.3	—	灰白色	93E47	
261	"	"	"	—	6.7	—	灰白色	93E52	
262	"	"	小皿A類	8.8	4.3	2.5	明黄褐色	93E42	
263	"	"	"	8.7	4.7	2.4	灰白色	93E46	
264	"	灰釉系陶器	壺	—	8.2	—	灰白色	93E130	
265	"	灰釉系陶器	"	—	—	—	灰白色	93E53	
266	SD03	"	椀F類	12.6	—	—	灰白色	93E41	
267	SD04	"	椀C類	—	7.4	—	浅黄色	93E38	
268	"	"	椀B類	—	6.9	—	灰白色	93E39	
269	"	"	椀F類	—	4.0	—	灰白色	93E37	
270	SD05	"	椀C類	—	6.6	—	灰白色	93E36	
271	"	"	"	—	6.2	—	灰色	93E33	
272	"	"	"	—	6.3	—	灰白色	93E35	
273	"	"	"	—	5.9	—	灰白色	93E34	
274	"	"	小皿B類	7.7	4.2	1.9	灰白色	93E32	ひずみ
275	SD06	"	椀B類	—	7.0	—	灰白色	93E23	
276	"	"	小椀	—	5.0	—	灰白色	93E24	
277	"	"	小皿A類	8.0	4.4	1.8	灰白色	93E26	
278	"	"	"	—	3.6	—	灰黄色	93E25	
279	"	"	"	—	2.8	—	灰白色	93E27	
280	"	"	甕	20.0	—	—	にぶい黄褐色	93E30	

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
281	SD06	灰釉系陶器	壺	—	—	—	オリーブ黒色	93E28	
282	"	"	"	—	—	—	灰オリーブ色	93E29	
283	"	貿易陶磁	青磁碗	—	—	—	灰白色	93E31	
284	SD07	灰釉系陶器	碗A類	—	8.0	—	灰白色	94A E137	
285	SD08	"	碗C類	14.4	6.8	4.2	灰白色	94A E116	
286	"	"	"	14.6	—	—	灰白色	94A E119	
287	"	"	"	13.8	—	—	灰白色	94A E118	
288	"	"	碗D類	13.8	—	—	灰白色	94A E120	
289	"	"	"	14.0	—	—	灰白色	94A E115	
290	"	"	碗B類	—	7.8	—	灰白色	94A E122	ひずみ
291	"	灰釉陶器	碗	—	7.5	—	淡黄色	94A E114	
292	"	灰釉系陶器	碗C類	—	6.6	—	灰白色	94A E121	
293	"	"	小皿A類	8.0	4.3	2.3	灰白色	94A E123	
294	"	"	"	8.3	4.0	2.0	灰白色	94A E124	
295	"	"	"	—	3.6	—	灰白色	94A E125	
296	"	"	"	—	4.0	—	灰白色	94A E126	
297	"	"	壺	—	—	—	灰白色	94A E128	
298	"	"	"	—	7.8	—	灰白色	94A E129	
299	"	"	"	—	—	—	灰白色	94A E127	
300	"	土師器	皿B類	—	6.8	—	浅黄橙色	94A E133	
301	"	"	"	—	4.0	—	淡赤橙色	94A E132	
302	"	貿易陶磁	白磁碗	—	—	—	灰白色	94A E131	
303	SD10	灰釉系陶器	碗C類	15.6	7.1	5.0	灰白色	94A E157	
304	"	"	"	14.7	6.9	4.9	灰白色	94A E145	
305	"	"	"	14.6	6.7	5.6	灰白色	94A E144	
306	"	"	"	14.8	7.2	4.9	灰白色	94A E156	
307	"	"	"	13.6	6.5	5.3	灰白色	94A E141	
308	"	"	"	14.0	6.4	4.9	灰白色	94A E155	
309	"	"	碗D類	14.4	—	—	灰白色	94A E159	
310	"	"	碗C類	14.7	—	—	灰白色	94A E158	
311	"	"	"	—	6.6	—	灰白色	94A E143	
312	"	"	"	—	7.1	—	灰白色	94A E142	
313	"	"	"	—	7.3	—	灰白色	94A E160	
314	"	"	"	—	7.0	—	灰白色	94A E161	
315	"	"	"	—	5.6	—	灰白色	94A E140	

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
316	SD10	灰釉系陶器	碗B類	—	6.9	—	灰白色	94A E146	
317	"	"	小皿B類	8.1	4.3	2.2	灰白色	94A E149	
318	"	"	"	8.3	4.5	2.0	灰白色	94A E150	
319	"	"	"	8.7	5.2	2.2	灰白色	94A E165	
320	"	"	小皿C類	9.0	6.5	2.1	灰白色	94A E164	
321	"	"	小皿A類	7.7	4.0	2.1	灰白色	94A E148	
322	"	"	小皿B類	7.6	4.2	2.0	灰白色	94A E162	
323	"	"	"	7.9	4.6	1.8	灰白色	94A E147	
324	"	"	小皿C類	8.2	4.6	1.7	灰白色	94A E151	
325	"	土師器	皿A3類	13.2	—	—	黄褐色	94A E167	
326	"	"	皿A2類	8.6	6.0	1.1	黄褐色	94A E168	
327	"	"	皿A1類	8.2	5.8	1.6	黄褐色	94A E154	ひずみ
328	"	"	"	8.5	4.0	1.9	黄褐色	94A E153	
329	"	"	皿B類	7.4	4.0	1.4	黄褐色	94A E152	
330	"	"	鍋	22.0	—	—	黄褐色	94A E169	
331	"	"	"	—	—	—	にぶい黄橙色	94A E170	
332	"	貿易陶磁	青磁皿	—	—	—	灰白色	94A E171	
333	"	"	"	—	—	—	白色	94A E172	
334	SD11	灰釉系陶器	碗A類	—	7.8	—	灰白色	94B E56	
335	"	"	"	—	5.0	—	灰白色	94B E57	
336	SD12	"	"	—	8.2	—	灰白色	94B E58	
337	"	"	碗B類	—	6.8	—	灰白色	94B E60	
338	"	"	"	—	—	—	灰白色	94B E59	
339	SD13	"	碗D類	16.2	—	—	灰白色	94B E69	
340	"	"	"	—	6.6	—	灰色	94B E71	
341	"	"	碗C類	—	6.6	—	灰白色	94B E68	
342	"	"	"	—	6.8	—	灰白色	94B E74	
343	"	"	碗B類	—	8.6	—	灰白色	94B E70	
344	"	"	小皿A類	—	3.6	—	灰色	94B E72	
345	"	"	小皿D類	—	4.0	—	灰白色	94B E73	
346	"	貿易陶磁	青磁碗	—	6.2	—	オリーブ灰色	94B E76	
347	SD14	灰釉系陶器	碗C類	14.8	6.2	4.5	灰白色	94C E90	ひずみ
348	"	"	"	14.6	—	—	灰色	94C E29	
349	"	"	碗B類	15.7	—	—	灰白色	94C E31	
350	"	"	碗G類	11.8	4.2	3.5	灰白色	94C E9	

遺物計測一覧

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
351	SD14	灰釉系陶器	碗D類	—	5.5	—	灰白色	94CE33	
352	"	"	"	—	6.7	—	灰白色	94CE32	
353	"	"	小皿A類	8.4	4.4	2.2	灰白色	94CE42	
354	"	"	"	7.2	4.6	2.1	灰白色	94CE40	
355	"	"	小皿C類	8.4	4.6	1.6	灰白色	94CE38	
356	"	"	"	7.2	4.8	1.5	灰白色	94CE41	
357	"	"	小皿D類	9.0	5.6	1.3	灰白色	94CE39	
358	"	土師器	皿A2類	7.2	5.8	0.9	浅黄橙色	94CE43	
359	"	"	鍋	—	—	—	浅黄橙色	94CE51	
360	"	"	羽釜	24.2	—	—	褐色	94CE10	
361	"	"	"	28.0	—	—	灰白色	94CE44	
362	"	"	"	—	—	—	浅黄橙色	94CE46	
363	"	貿易陶磁	青磁碗	—	—	—	灰色	94CE52	
364	SD15	灰釉系陶器	碗F類	—	5.2	—	明赤灰色	94CE85	
365	SD19	"	碗A類	—	6.0	—	灰白色	94CE75	
366	SD20	"	碗F類	12.0	—	—	灰白色	94CE86	
367	"	"	"	—	5.4	—	灰白色	94CE87	
368	"	"	折縁深皿	—	—	—	灰白色	94CE88	
369	SD24	"	碗B類	15.9	7.9	4.7	灰白色	94DE42	
370	"	"	碗A類	—	6.0	—	灰白色	94DE43	
371	SD25	"	碗B類	16.0	7.2	4.8	灰黄色	94DE38	
372	"	"	碗C類	—	5.4	—	灰黄色	94DE40	
373	"	"	碗B類	—	7.2	—	灰白色	94DE39	
374	SD27	"	碗G類	11.8	3.8	3.7	灰白色	94DE45	
375	"	"	"	13.0	4.5	4.3	灰黄色	94DE46	
376	"	"	"	13.8	6.2	3.9	灰色	94DE48	
377	"	"	"	11.7	3.8	3.5	明オリーブ灰色	94DE44	墨書 [大]
378	"	"	"	12.6	2.9	3.2	灰白色	94DE47	
379	"	"	"	14.0	—	—	灰色	94DE49	
380	"	"	小皿D類	8.3	4.8	1.2	灰白色	94DE50	墨書 [十]
381	"	"	"	8.3	5.3	1.3	灰白色	94DE51	墨書 [大]
382	"	貿易陶磁	白磁壺	—	—	—	明緑灰色	94DE54	
383	93区	灰釉系陶器	碗	15.6	7.0	5.2	浅黄色	93E84	
384	94A区	"	"	15.3	8.0	5.5	灰白色	94AE9	
385	"	"	"	14.9	6.8	5.4	灰白色	94AE24	

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
386	94A区	灰釉系陶器	碗	14.9	7.4	5.1	灰白色	94AE12	
387	94C区	"	"	13.0	5.4	5.7	灰色	94CE11	
388	93区	"	"	15.6	6.7	5.3	灰白色	93E83	
389	"	"	"	12.9	4.6	4.9	淡黄色	93E54	
390	94A区	"	"	12.8	5.0	5.6	黄灰色	94AE31	
391	93区	"	"	13.1	4.3	3.8	灰白色	93E87	
392	"	"	"	13.0	4.0	4.3	淡黄色	93E81	
393	"	"	"	11.2	3.4	3.5	浅黄色	93E109	
394	"	"	"	11.4	3.4	3.4	灰白色	93E77	
395	94B区	"	"	12.2	3.3	2.9	灰白色	94BE31	
396	93区	"	小碗	8.6	5.0	2.7	灰白色	93E86	
397	94A区	"	小皿	7.6	3.6	2.3	灰白色	94AE20	
398	"	"	"	7.8	4.6	2.0	灰白色	94AE4	
399	"	"	"	8.6	4.2	2.1	灰白色	94AE8	
400	"	"	"	7.8	3.8	2.2	灰白色	94AE21	
401	93区	"	"	8.6	4.6	2.6	灰白色	93E85	
402	"	"	"	7.4	3.5	2.2	灰黄色	93E74	
403	"	"	"	7.3	3.7	2.0	灰オリーブ色	93E96	
404	94A区	"	"	8.9	4.8	1.9	灰白色	94AE3	
405	"	"	"	8.1	4.7	1.8	灰白色	94AE36	
406	93区	"	"	8.2	4.4	2.0	灰白色	93E118	
407	"	"	"	8.6	4.6	1.8	灰白色	93E119	
408	94A区	"	"	7.6	4.2	1.8	灰白色	94AE5	
409	93区	"	"	8.0	5.3	1.7	灰白色	93E57	
410	94D区	"	"	7.6	4.8	1.7	灰白色	94DE58	
411	94A区	"	"	8.3	5.5	1.3	灰白色	94AE6	
412	"	"	"	7.8	5.0	1.5	灰白色	94AE2	
413	"	"	"	8.3	5.5	1.9	灰白色	94AE1	
414	93区	"	"	8.0	5.6	1.0	淡黄色	93E82	
415	"	"	"	7.8	4.6	1.2	灰白色	93E59	
416	"	"	壺	—	—	—	オリーブ灰色	93E121	
417	94B区	貿易陶磁	青磁碗	17.6	—	—	灰オリーブ色	94BE32	
418	94D区	"	"	—	4.0	—	明緑灰色	94DE56	
419	93区	"	"	—	—	—	灰白色	93E117	

・単位はcm

弥生土器

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
図5-1	94B区	弥生土器	高杯	26.6	16.0	26.2	浅黄橙色	94BE35	

近世土器

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
図18-1	SD28	近世土器	碗	10.5	—	—	淡黄色	94AE173	
2	"	"	"	—	—	—	灰白色	94AE174	
3	"	"	不明	—	5.2	—	淡黄色	94AE176	
4	"	"	皿	—	6.2	—	灰白色	94AE175	
5	"	"	鉢	—	—	—	淡黄色	94AE177	
6	SD29	"	"	—	16.7	—	灰白色	94AE136	
7	SD31	"	銭甕	—	7.0	—	"	94BE61	
8	SD32	"	碗	—	3.8	—	"	94BE63	
9	"	"	不明	—	4.8	—	"	94BE64	
10	SD33	"	無高台皿	11.2	7.2	2.0	灰白色	94BE67	
11	"	"	播鉢	—	—	—	淡黄色	94BE66	
12	SD35	"	蓋	8.1	4.1	2.6	"	94CE111	
13	SD36	"	丸碗	10.3	3.8	5.0	白色	94CE77	
14	"	"	小碗	7.7	3.2	5.3	灰白色	94CE78	
15	"	"	端反碗	8.6	—	—	白色	94CE112	
16	"	"	"	11.2	4.2	5.9	灰白色	94CE79	
17	"	"	"	9.7	4.0	5.2	淡黄色	94CE80	
18	"	"	広東茶碗	—	5.2	—	灰白色	94CE81	
19	"	"	鉢	—	—	—	"	94CE113	
20	"	"	蓋	8.0	4.4	1.9	浅黄橙色	94CE82	
21	"	"	鉢	—	13.3	—	灰白色	94CE83	
22	SD39	"	灯明皿	—	5.6	—	"	94CE56	
23	SD40	"	碗	—	3.4	—	"	94CE60	
24	"	"	灯明皿	—	3.8	—	"	94CE61	
25	"	"	壺	7.9	—	—	暗赤褐色	94CE73	
26	"	"	播鉢	—	12.8	—	灰白色	94CE63	
27	SD41	"	箱形湯呑	—	3.4	—	"	94DE41	
28	"	"	碗	—	—	—	"	94DE66	
29	94D区	"	端反碗	10.0	3.1	5.6	浅黄橙色	94DE67	

番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	色調	登録番号	備考
30	94D区	近世土器	丸碗	—	3.2	—	淡黄色	94DE68	
31	"	"	広東茶碗	10.0	5.0	5.7	"	94DE36	
32	"	"	仏飯器	6.6	—	—	白色	94DE35	
33	"	"	把手	—	—	—	灰白色	94DE70	
34	"	"	蓋	—	—	—	白色	94DE69	
35	93区	"	鉢	—	—	—	灰白色	93 E205	
36	"	"	甕	—	—	—	橙色	93 E208	
37	"	"	播鉢	—	10.2	—	灰白色	93 E207	
38	"	"	"	—	16.2	—	淡黄色	93 E206	

そのほかの土器・土製品

番号	出土位置	名称	重量	色調	登録番号	備考
図19-1	SK20	製塩土器	—	灰黄色	94BE39	
2	93区	"	—	橙色	93E194	
3	"	"	—	明赤褐色	93E195	
4	SK28	土鍾	7.9g	にふい黄橙色	94BE100	
5	"	"	8.4g	にふい黄橙色	94BE101	
6	SD08	"	2.1g	褐灰色	94AE134	
7	94A区	"	9.1g	明黄褐色	94AE18	
8	93区	"	2.4g	オリーブ黒色	93E201	
9	"	"	1.0g	にふい黄橙色	93E200	
10	SE08枠内	陶丸	13.4g	灰白色	94DE63	
11	"	"	10.3g	灰白色	94DE64	
12	SD22	"	12.0g	灰白色	94DE34	
13	SD27	"	8.9g	明オリーブ灰色	94DE53	
14	"	"	7.3g	灰白色	94DE52	
15	94C区	"	8.2g	灰白色	94CE95	
16	94D区	"	10.1g	灰白色	94DE60	

## 遺物計測一覧

## 加工円盤

番号	出土位置	名称種類	重量	長径	短径	色調	登録番号	備考
図20-1	SE01	加工円盤	8.9g	3.3	2.6	灰白色	94AE113	
2	"	"	12.9g	3.3	2.8	灰白色	94AE112	
3	"	"	11.3g	2.9	2.7	灰白色	94AE111	
4	SE08	"	9.7g	2.9	2.3	灰白色	94DE23	
5	"	"	7.4g	2.4	2.0	灰白色	94DE24	
6	"	"	6.3g	2.7	2.1	灰白色	94DE22	
7	"	"	9.9g	2.9	2.6	灰白色	94DE25	
8	SD02	"	9.0g	3.4	2.9	淡黄色	93E139	
9	SD05	"	9.4g	3.2	2.5	灰黄色	93E133	
10	SD06	"	9.2g	2.9	2.4	灰白色	93E131	
11	"	"	9.7g	2.9	2.6	灰黄色	93E132	
12	SD10	"	6.5g	2.2	2.0	灰白色	93E134	
13	SD28	"	10.9g	2.7	2.6	灰白色	94AE180	
14	"	"	9.5g	3.1	3.0	淡黄色	94AE179	
15	"	"	9.9g	3.2	2.3	灰白色	94AE178	
16	SD36	"	13.4g	3.3	3.1	にぶい黄橙色	94CE84	
17	SD38	"	12.3g	3.2	2.7	灰白色	94CE57	
18	SD39	"	9.2g	2.8	2.6	にぶい黄橙色	94CE58	
19	SD40	"	5.1g	2.6	2.6	灰白色	94CE69	
20	"	"	21.4g	3.9	3.8	黒褐色	94CE71	
21	"	"	3.5g	2.2	2.0	灰黄色	94CE70	
22	93区	"	11.9g	3.8	3.3	灰色	93E143	
23	"	"	10.0g	3.5	3.2	灰色	93E142	
24	"	"	6.8g	3.3	3.2	浅黄橙色	93E140	
25	"	"	7.0g	3.5	3.1	灰白色	93E141	
26	"	"	8.5g	2.7	2.4	灰黄色	93E137	
27	"	"	10.0g	2.9	2.3	灰黄色	93E135	
28	"	"	4.1g	2.7	2.2	灰黄色	93E136	
29	"	"	8.9g	3.0	3.0	淡黄色	93E144	

## 瓦

番号	出土位置	種類	器種	色調	登録番号	備考
図21-1	94A区	瓦	平瓦	灰白色	94AE191	
図22-2	93区	"	"	灰白色	93E202	
3	SE03	"	丸瓦	灰白色	94BE110	

## 石製品

番号	出土位置	種類	器種	重量	石材	登録番号	備考
図23-1	SD04	石製品	砥石	148.6	泥質凝灰岩	93S-1	
2	94D区	"	"	68.4	ホルンフェルス	94DS-1	
3	SD27	"	"	89.1	凝灰岩	94DS-2	
4	94B区	"	"	63.7	凝灰岩	94BS-1	

## 木製品

番号	出土位置	種類	器種	直径	器高	登録番号	備考
図24-1	SE04	木製品	曲物	49.6	23.1	94BW-1	
2	SE08	"	"	50.3	11.1	94DW-1	
3	"	"	"	45.3	15.9	94DW-2	
4	"	"	"	44.1	43.2	94DW-3	
5	"	"	"	46.3	31.1	94DW-4	
6	SE10	"	"	36.2	24.2	94DW-5	

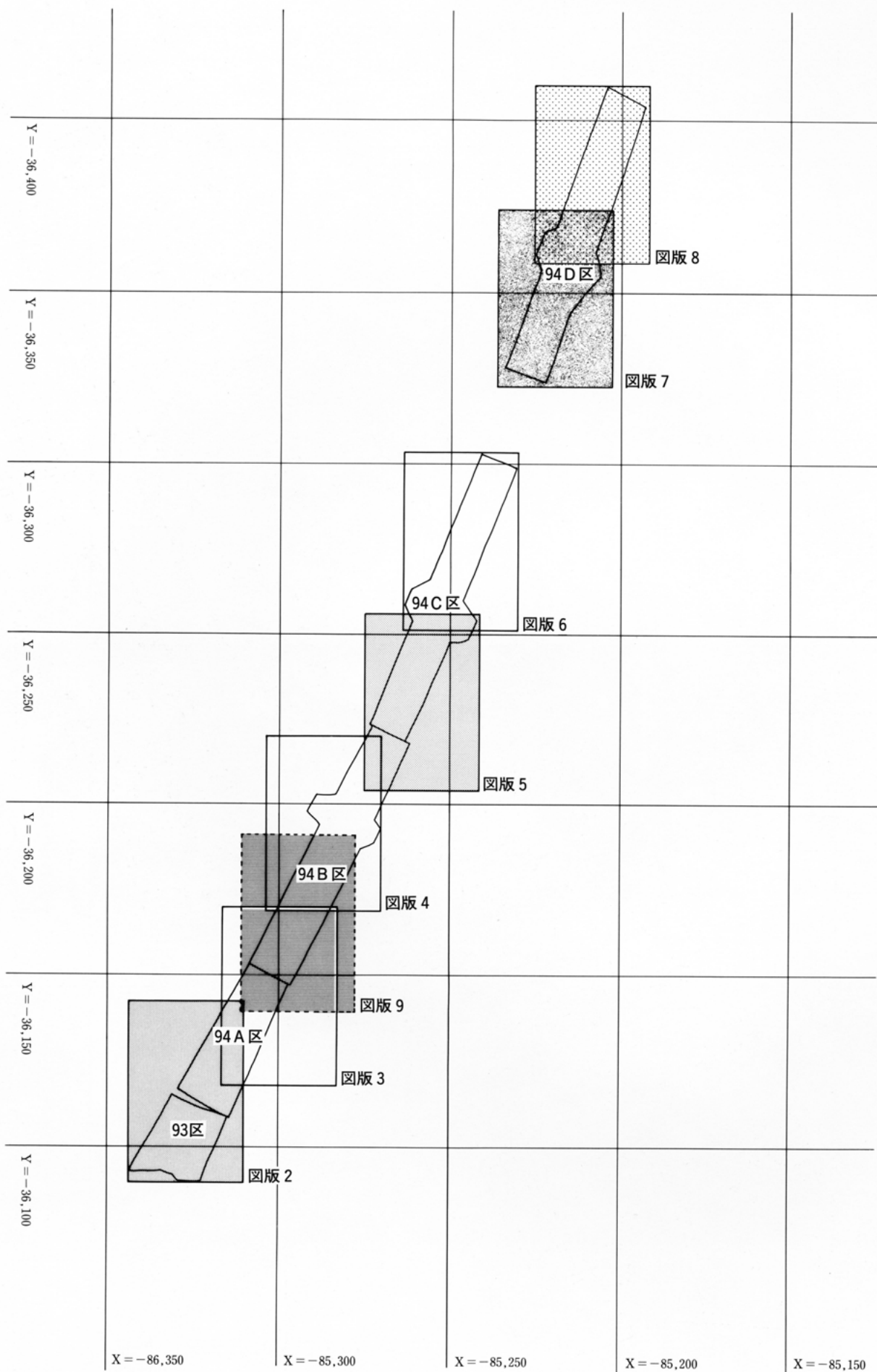
**金属製品**

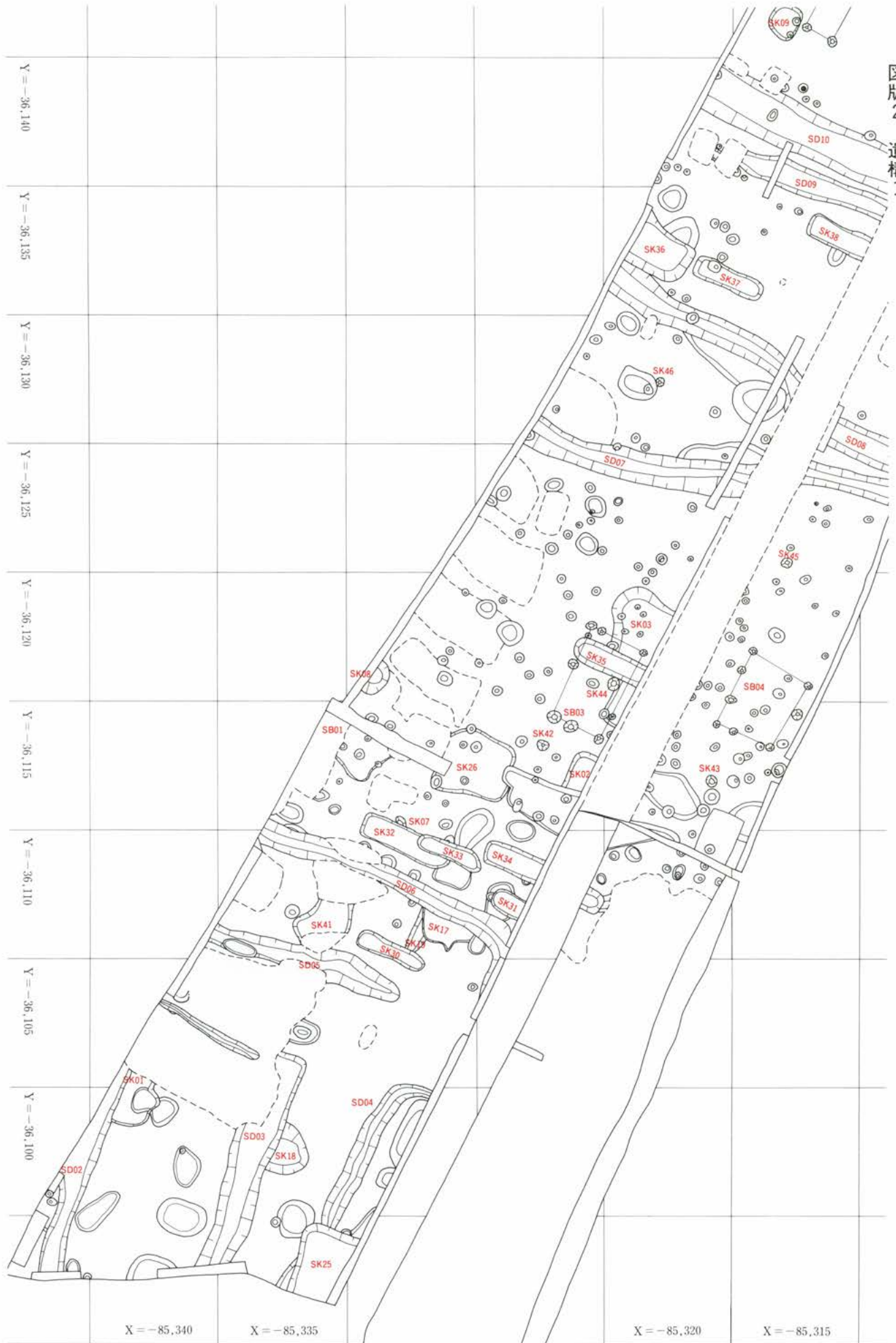
番 号	出土位置	種 類	器 種	登録番号	備 考
図25-1	SE01	金属製品	刀子	94AM12	
2	SE04	"		94BM 2	
3	SK05	"		94CM 3	
4	SD41	"		94DM 6	
5	SD36	"	刀子	94CM11	
6	94A区	"	銭貨	94AM23	
7	94D区	"	飾金具	94DM 8	
8	94D区	"	釘	94DM 7	
9	94A区	"	刀子	94AM18	
10	94D区	"	キセル	94DM 9	

図 版



図版 1  
図版割付図



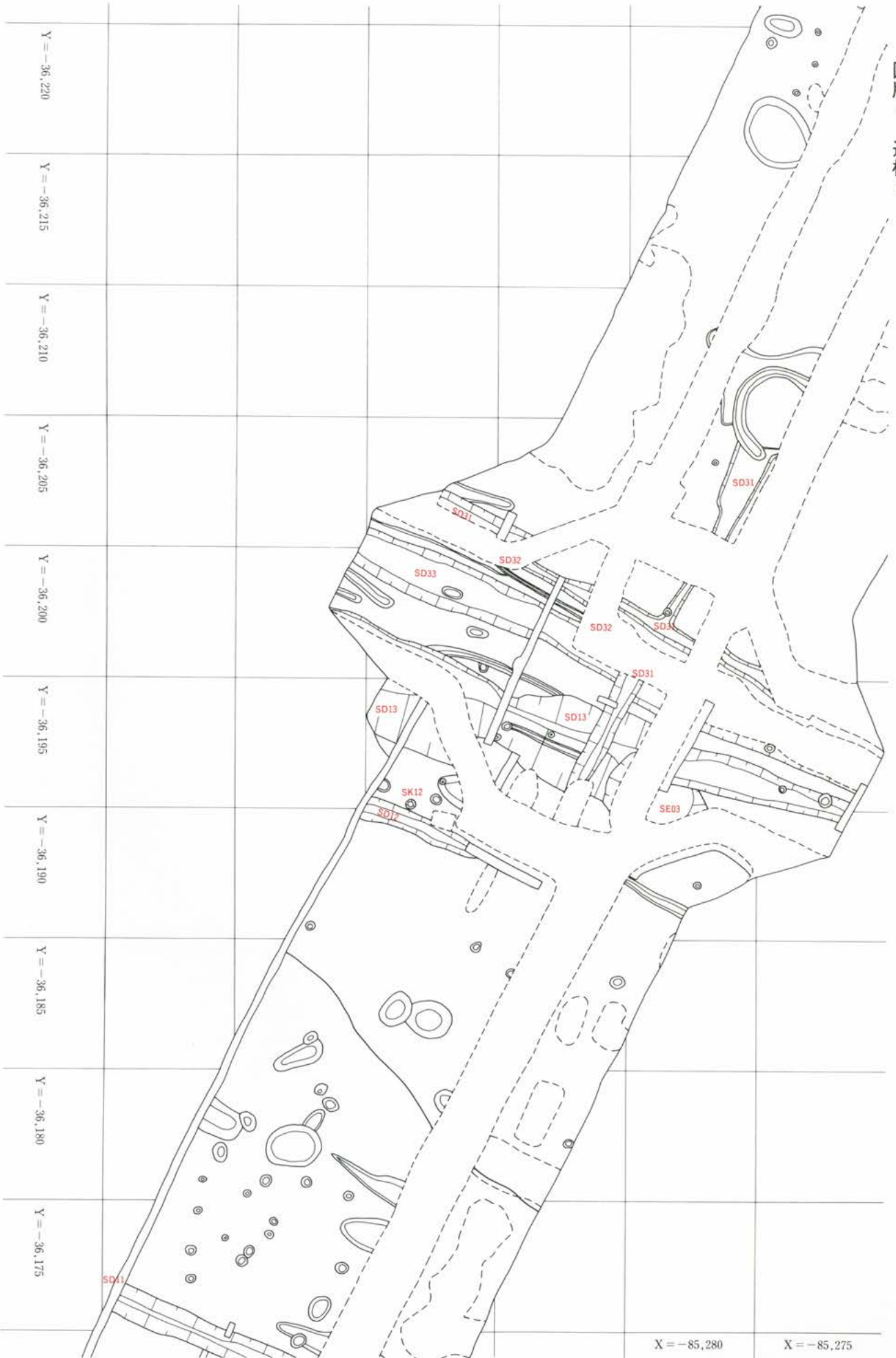


図版2～9の破線は攪乱を表現する。

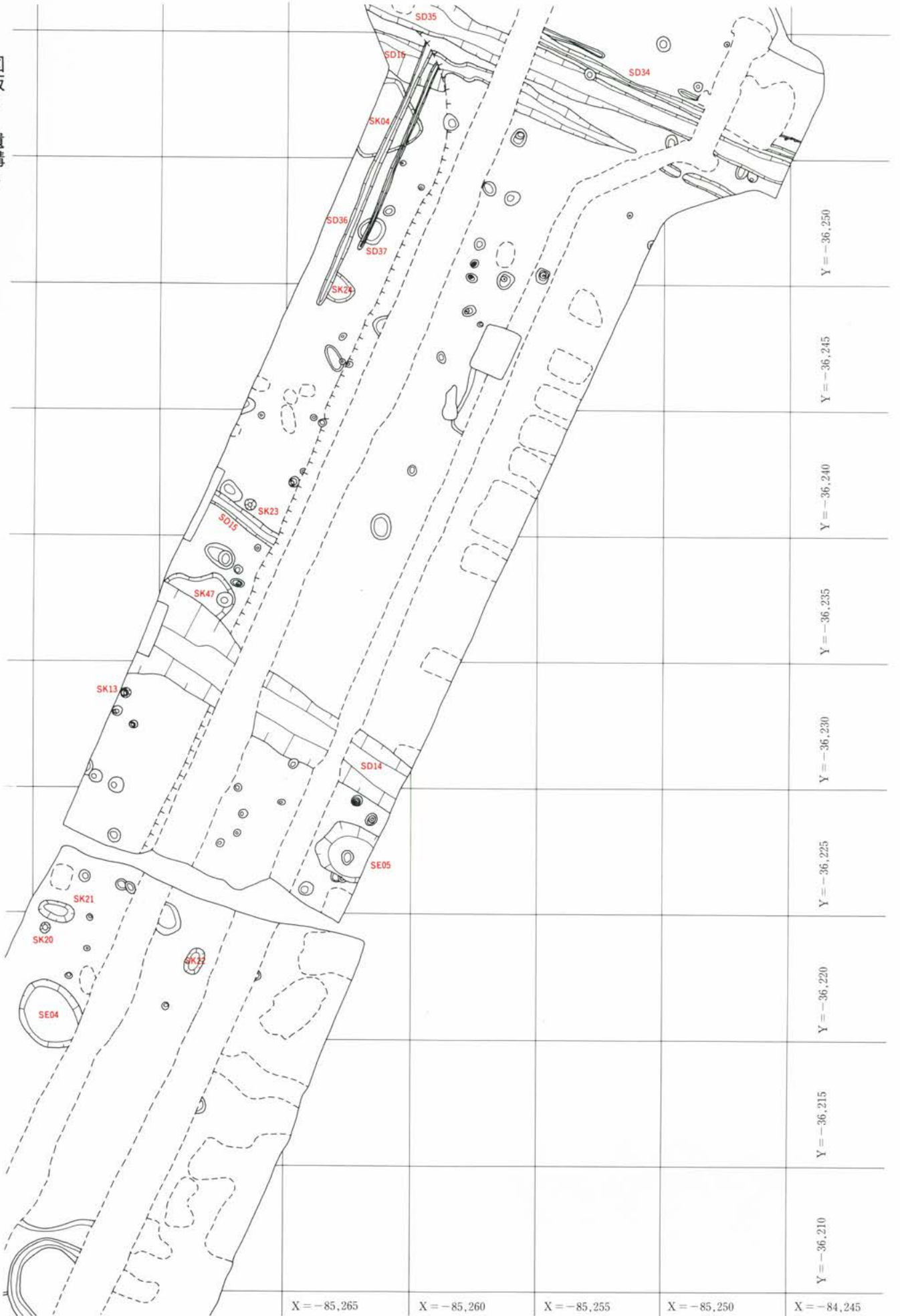
図版 3  
遺構 2



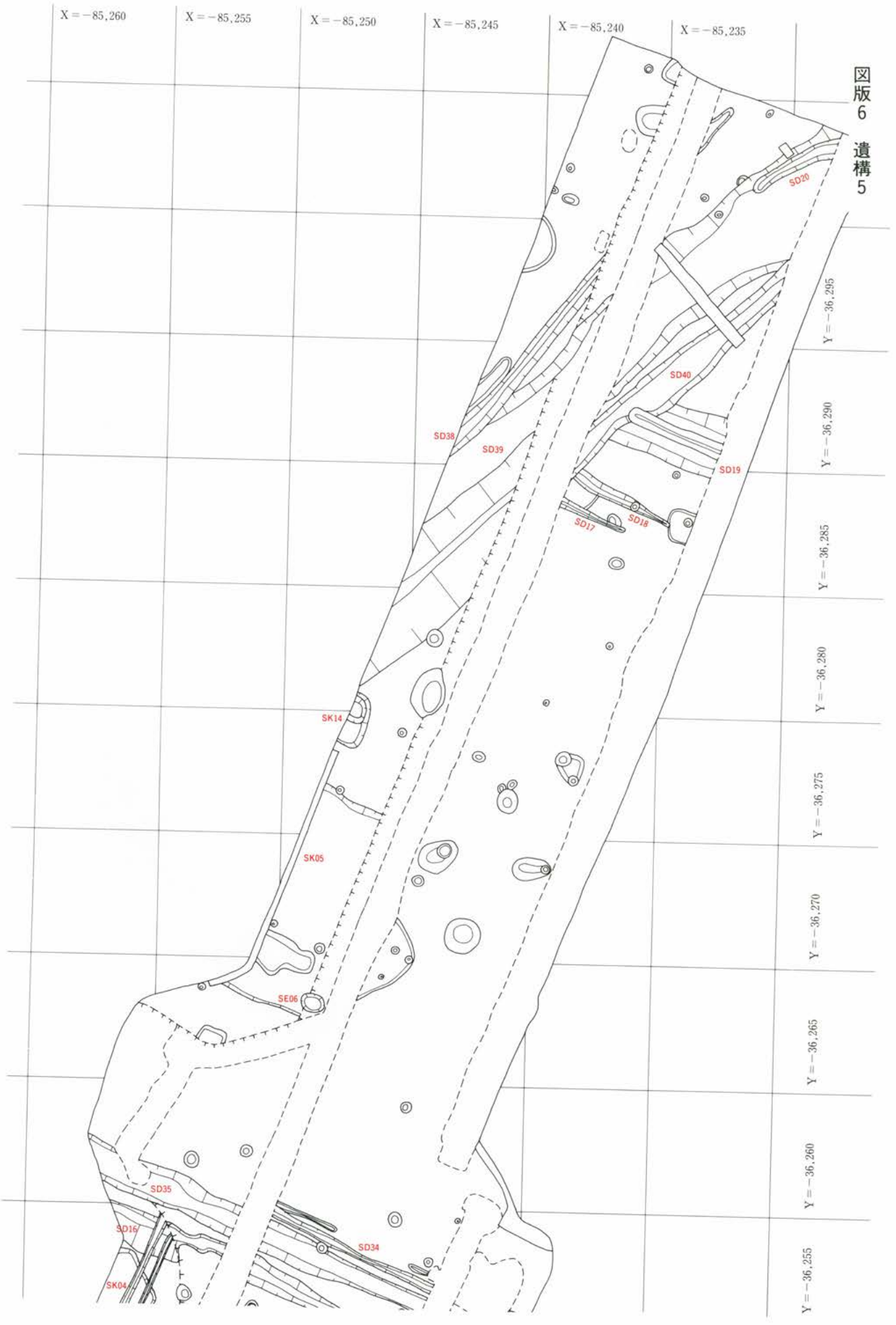
図版 4 遺構 3



図版 5  
遺構 4

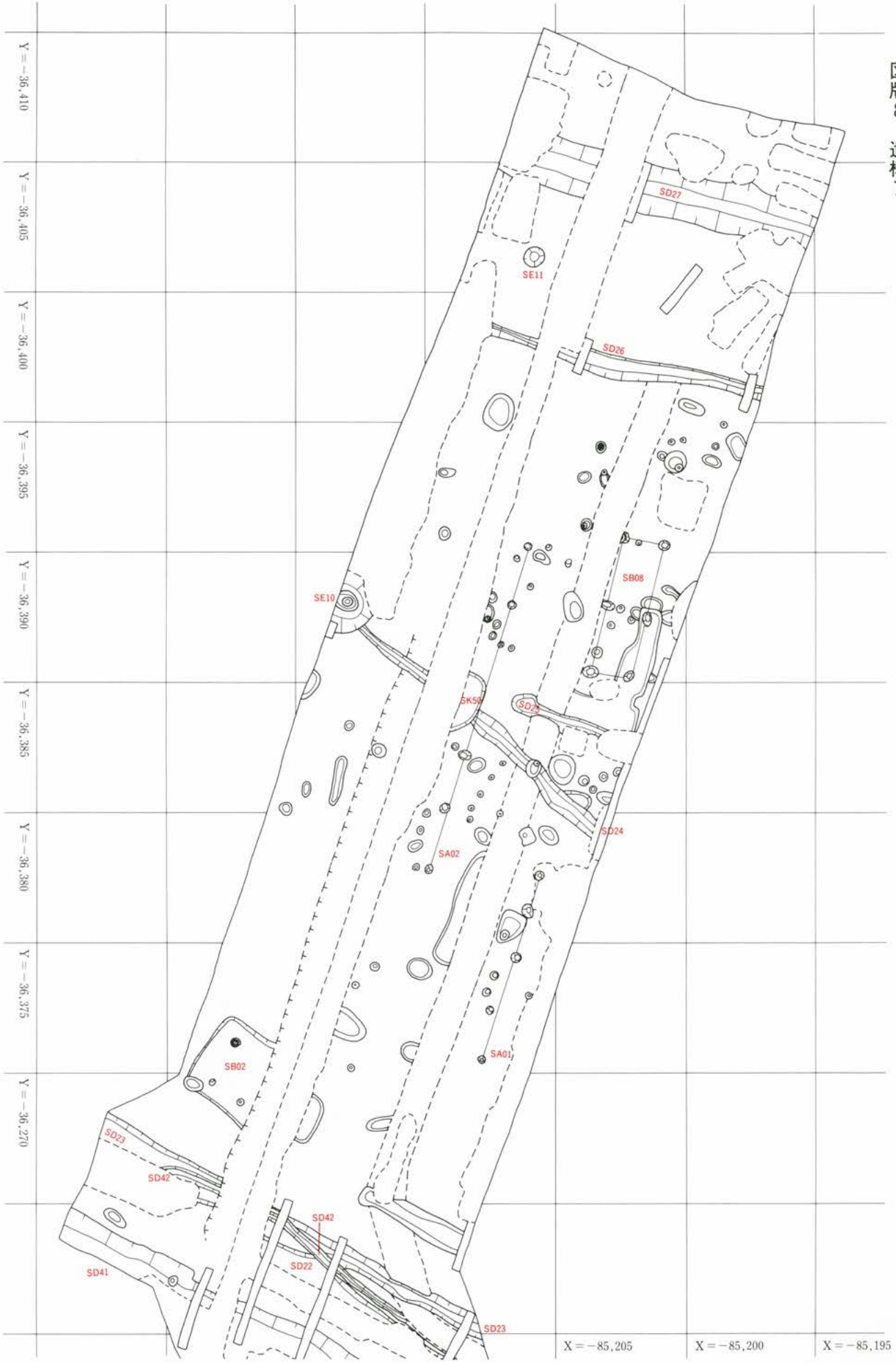


図版 6  
遺構 5

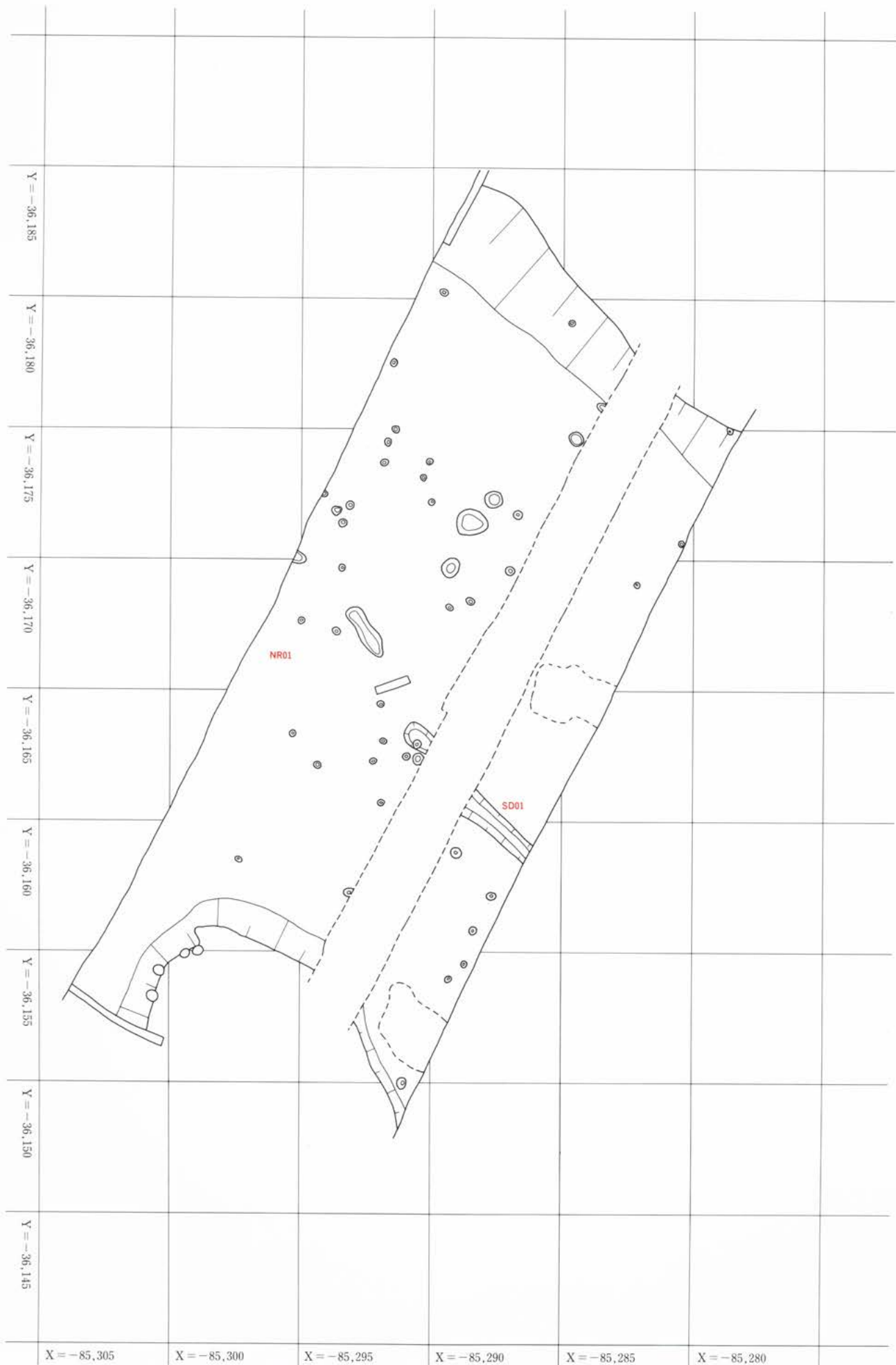


図版 7  
遺構 6



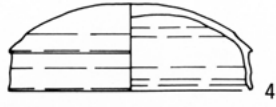


図版 9  
遺構 8



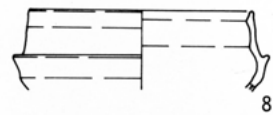
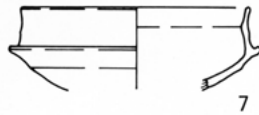
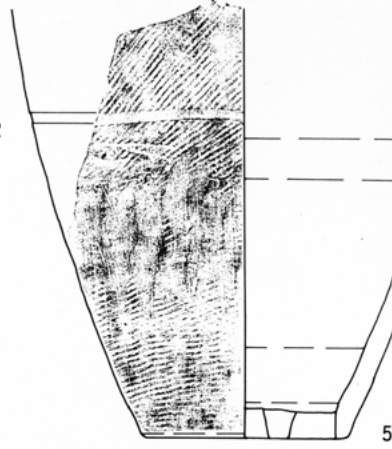


1...SB01  
2...SB02



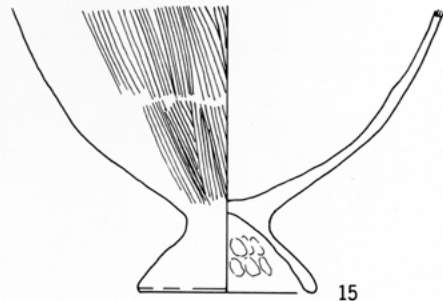
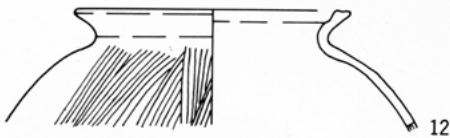
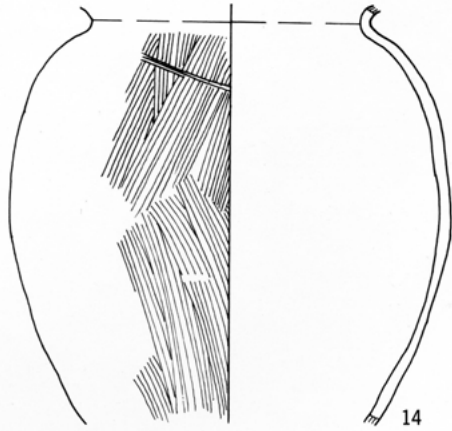
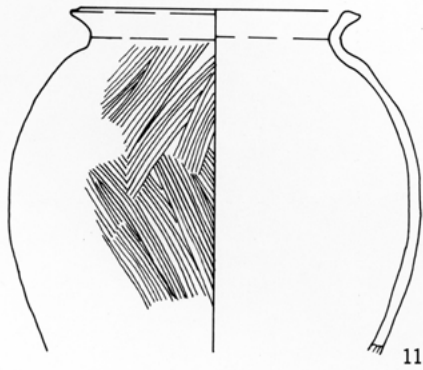
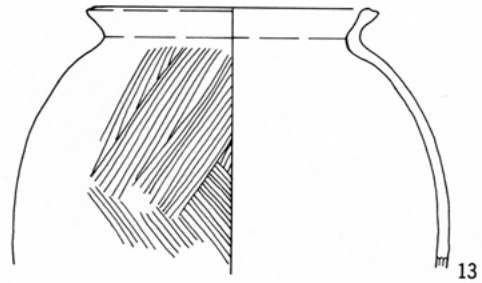
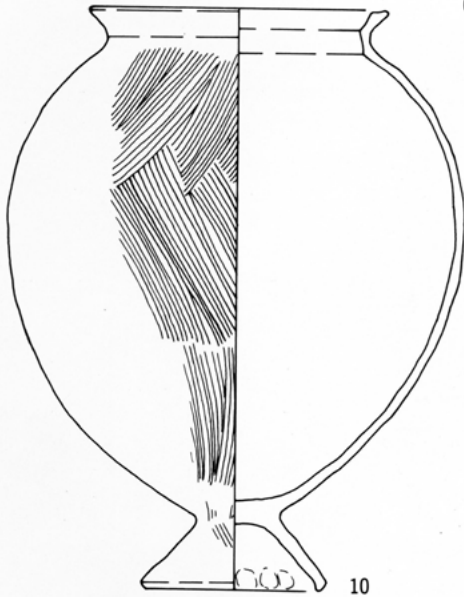
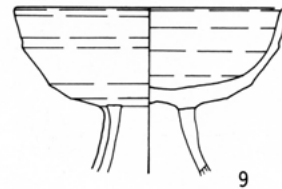
3...SK01

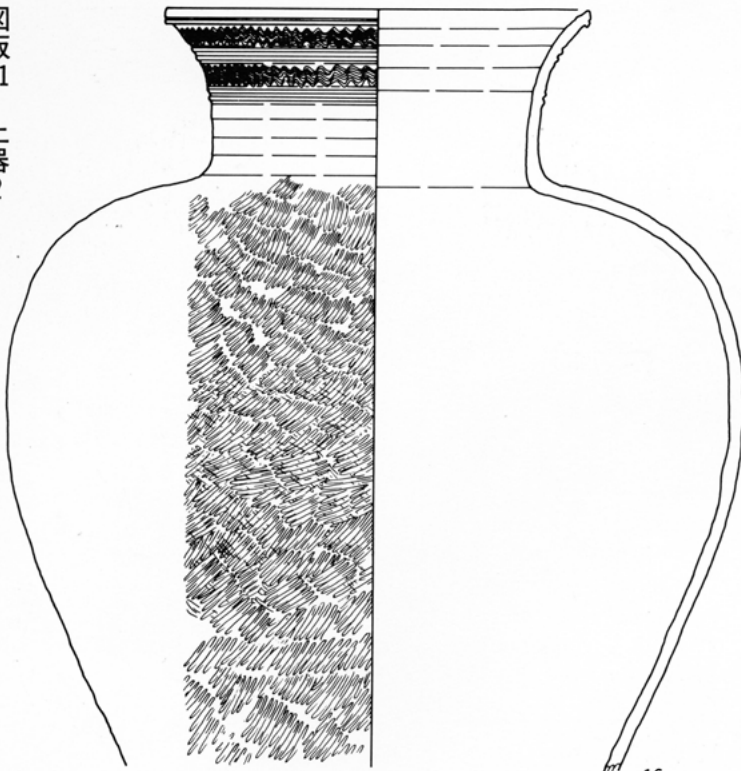
4 · 5...SK02



6~15...SK05

0 10cm





16は1/8

16

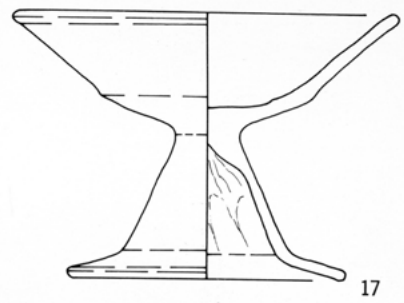
16...SK06

17...SK07

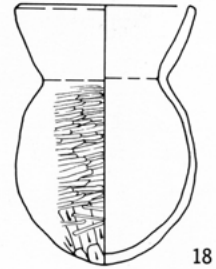
18...SK08

19...SK09

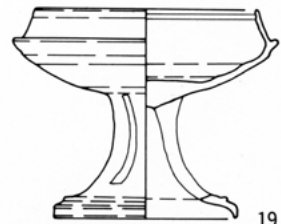
0 10cm



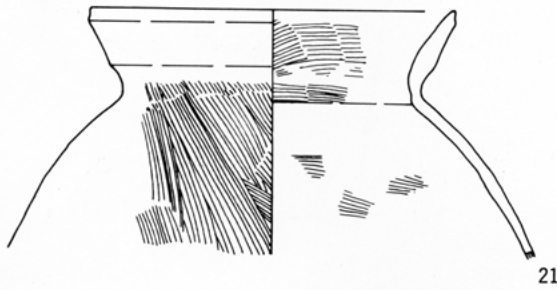
17



18



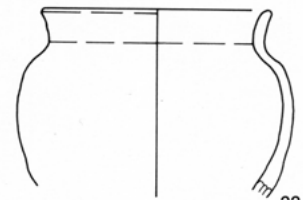
19



21



20



22

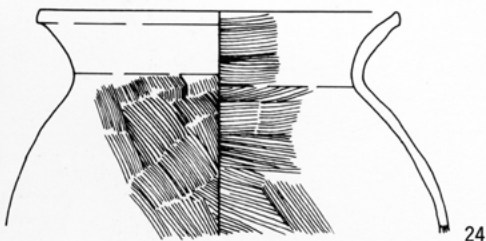
20~22...SK10



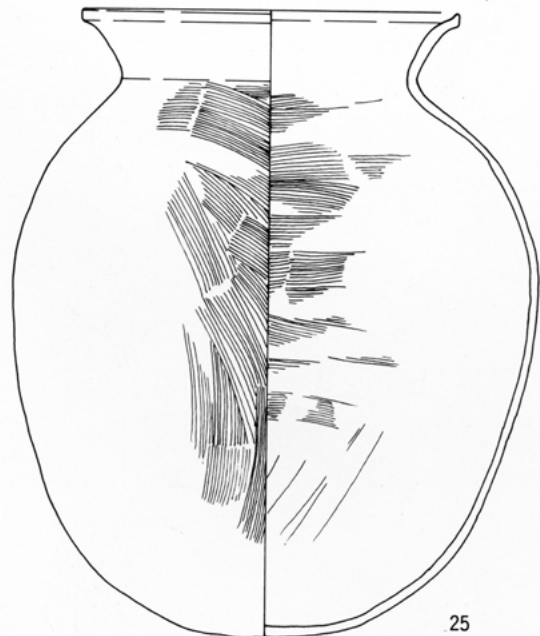
23



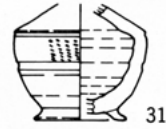
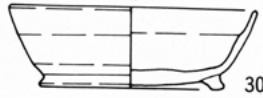
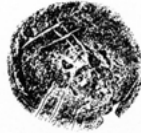
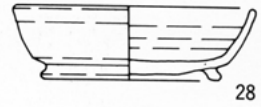
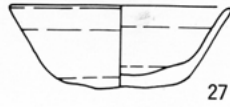
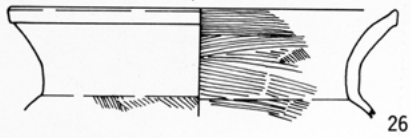
23~25...SK11



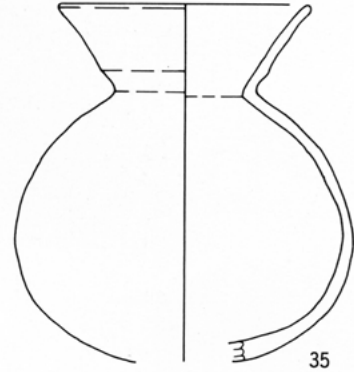
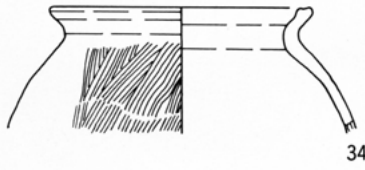
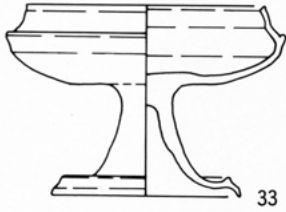
24



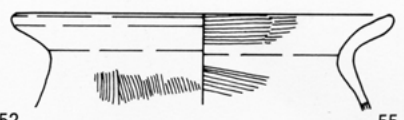
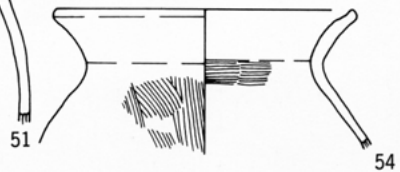
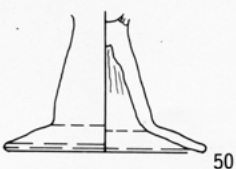
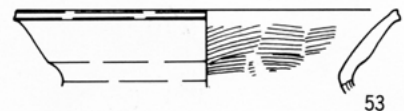
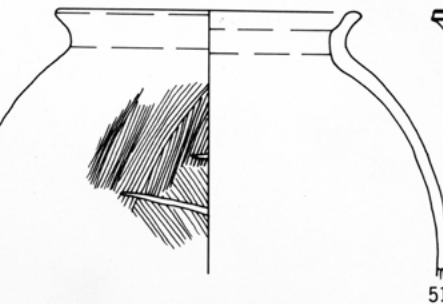
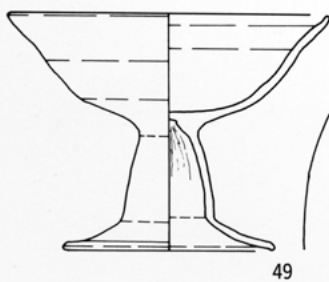
25

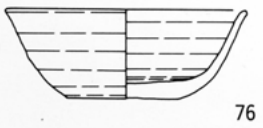
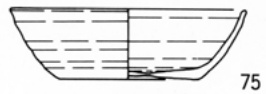
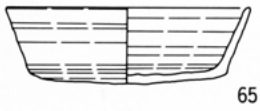
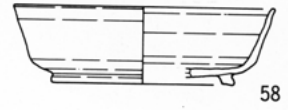


26...SK12  
27~32...SK13

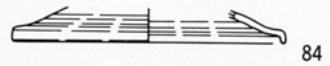
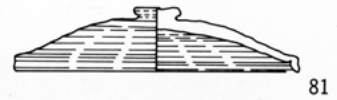
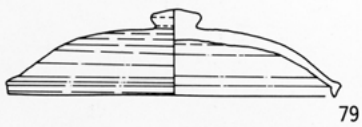


33 · 34...SK14  
35...SK15  
36...SK16

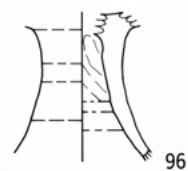
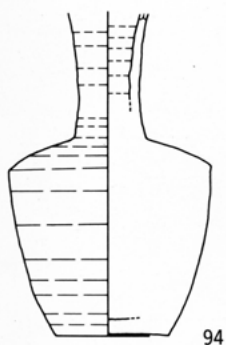
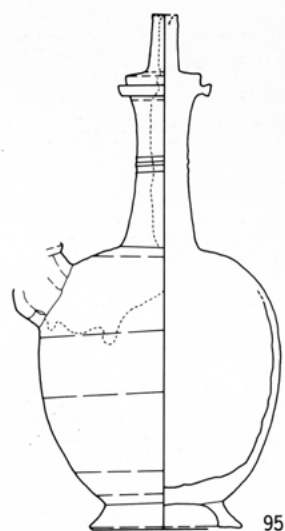
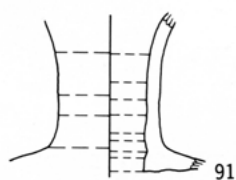
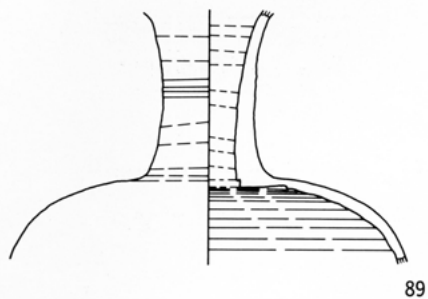
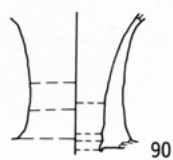
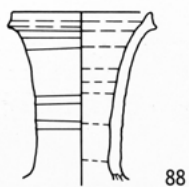




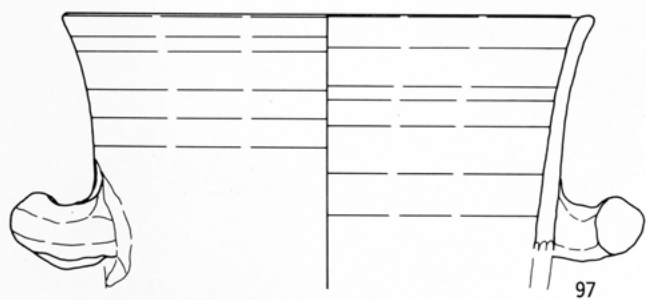
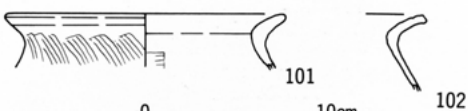
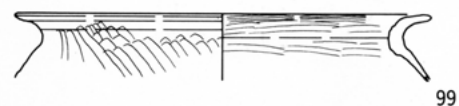
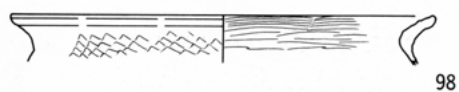
56~87...SK18



0 10cm

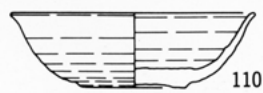
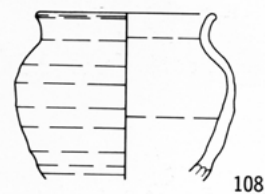
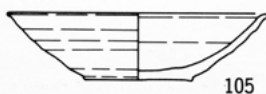


88~102...SK18  
103·104...SK17  
105...SK19

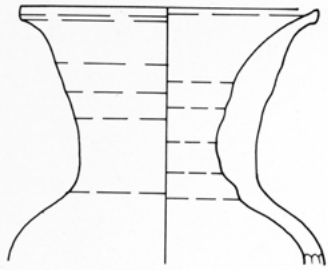


106...SK21 108...SK23  
107...SK22 109...SK24

0 10cm



图版 15  
土器 6

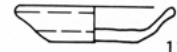


115

115・116…SB04  
117・118…SB06  
109…SB07



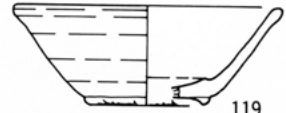
116



118



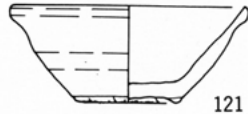
117



119



120



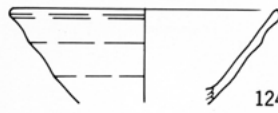
121



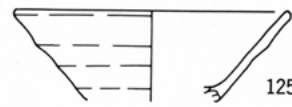
122



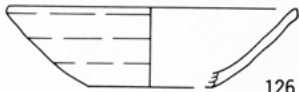
123



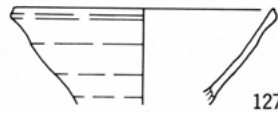
124



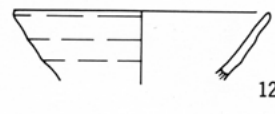
125



126



127



128



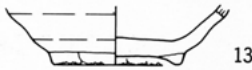
129



130



131



132

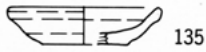


133



134

120~161…SE01



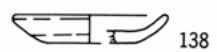
135



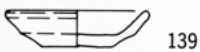
136



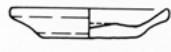
137



138



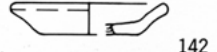
139



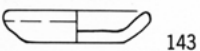
140



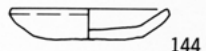
141



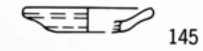
142



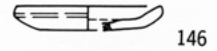
143



144



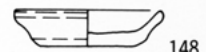
145



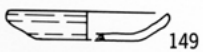
146



147



148



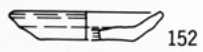
149



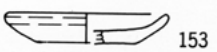
150



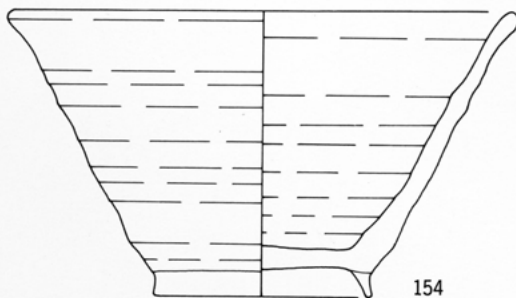
151



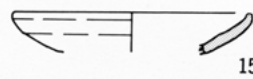
152



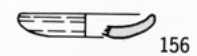
153



154



155



156



157



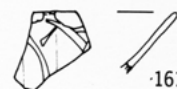
158



159



160

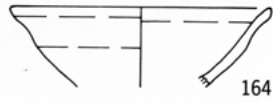


161

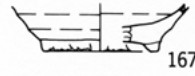
0 10cm



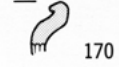
162



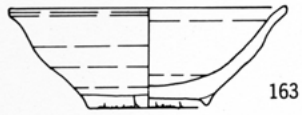
164



167



170



163



165



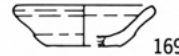
168



171

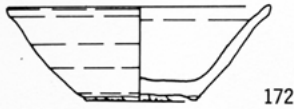


166

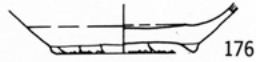


169

162~171...SE02  
172~184...SE03



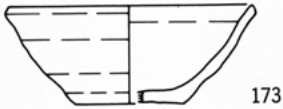
172



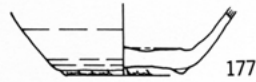
176



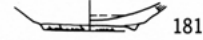
180



173



177



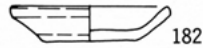
181



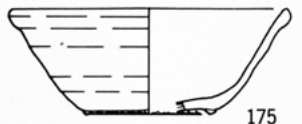
174



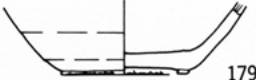
178



182



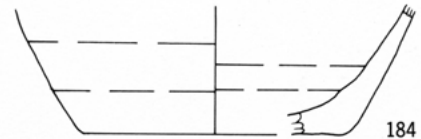
175



179



183



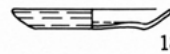
184



187



191

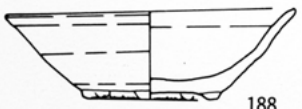


185

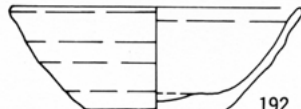


186

185 · 186...SE04  
187~200...SE07



188



192



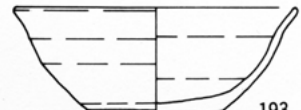
195



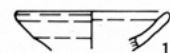
196



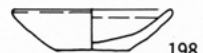
189



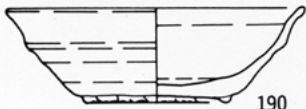
193



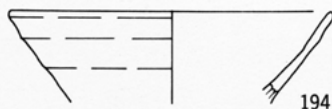
197



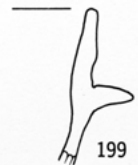
198



190



194



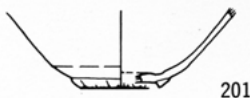
199



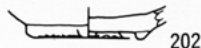
200



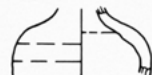
201...SE08  
202~205...SE10



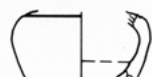
201



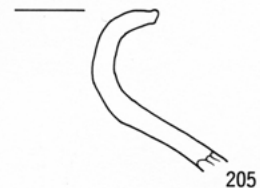
202



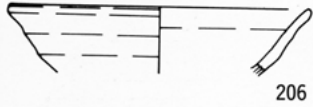
203



204



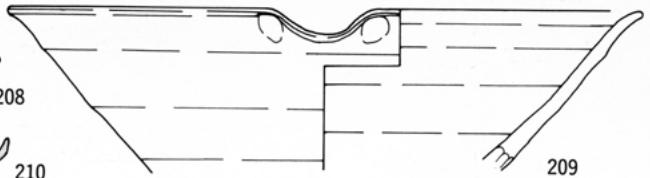
205



206



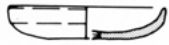
208



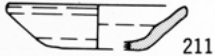
209



207



210

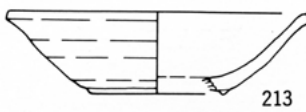


211

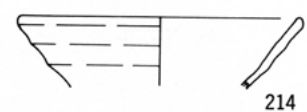
206~210...SK26  
211...SK27  
212~231...SK28



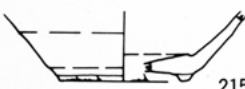
212



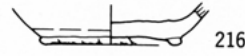
213



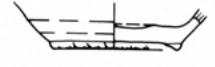
214



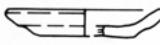
215



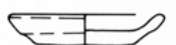
216



217



218



219



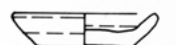
220



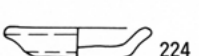
221



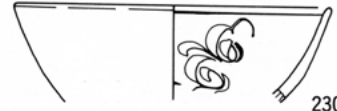
222



223



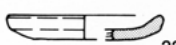
224



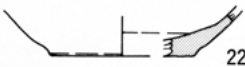
230



225



226



229



227



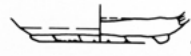
228



231



232



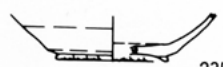
233

232~234...SK34

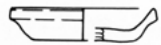


234

235~237...SK37



235

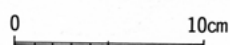


236

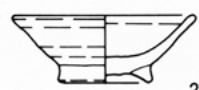
238...SK41  
239...SK42  
240...SK43  
241...SK44  
242...SK45



237



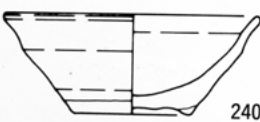
238



239



242

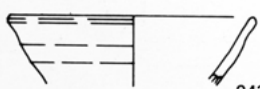


240

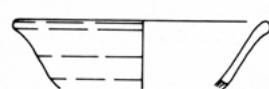


241

243~245...SK46  
246...SK47  
247~249...SK48



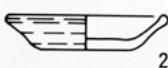
243



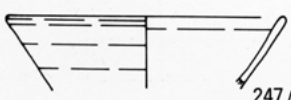
244



245



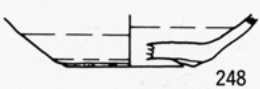
246



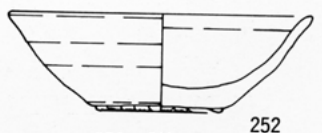
247



251



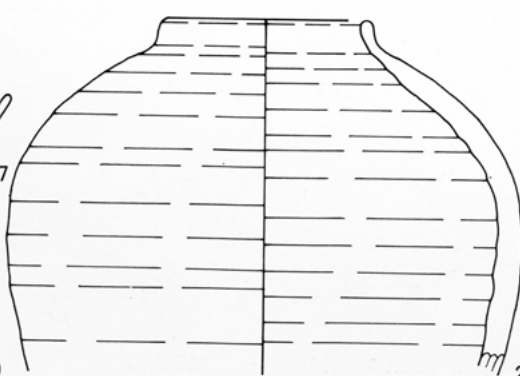
248



252

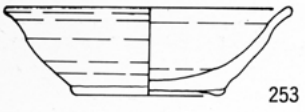


249

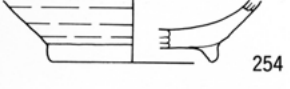


250

250...SK49  
251・252...SK50



253



254



255



256



257



267



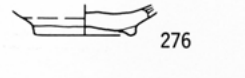
270



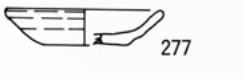
271



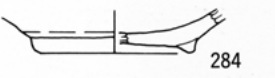
275



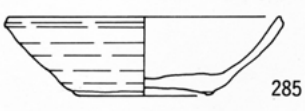
276



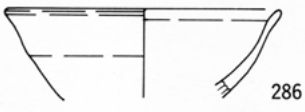
277



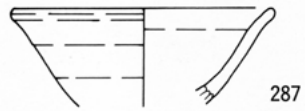
284



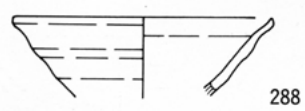
285



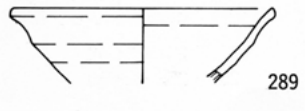
286



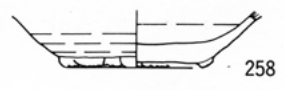
287



288



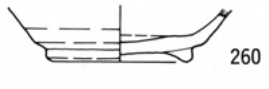
289



258



259



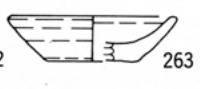
260



261



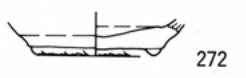
262



263



268



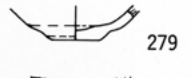
272



273



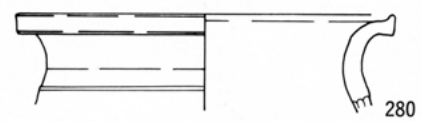
278



279



281



280



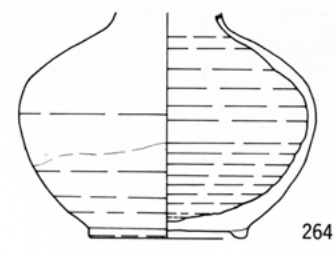
282



283



284...SD07  
285~302...SD08



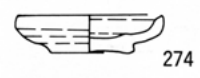
264



265

253~265...SD02  
266...SD03  
267~269...SD04

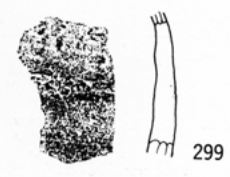
270~274...SD05  
275~283...SD06



274



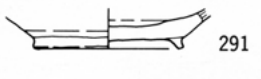
302



299



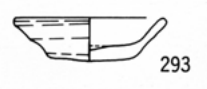
290



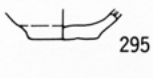
291



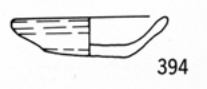
292



293



295



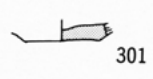
294



296



300



301

图版 19

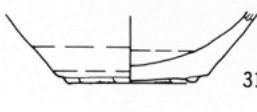
土器 10



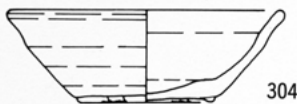
303



307



311



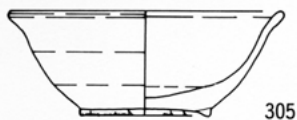
304



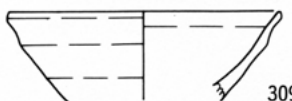
308



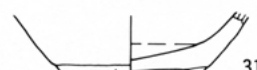
312



305



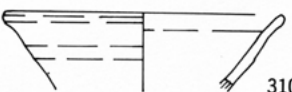
309



313



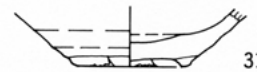
306



310



314



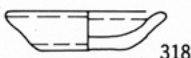
315



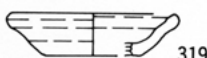
316



317



318



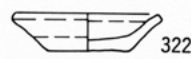
319



320



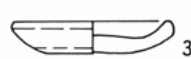
321



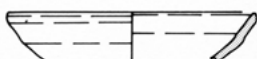
322



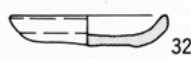
323



324



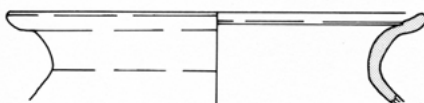
325



327



328

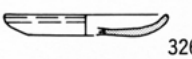


330

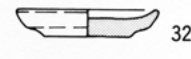


331

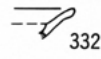
303~333...SD10



326



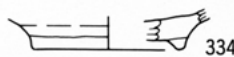
329



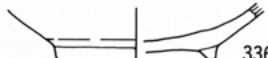
332



333



334



336

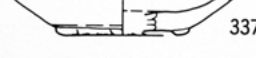


0 10cm

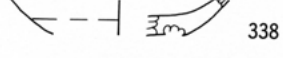


335

334 · 335...SD11  
336~338...SD12



337



338



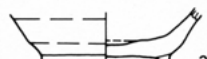
339



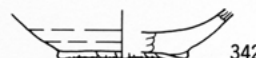
341



344



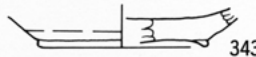
340



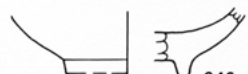
342



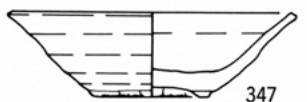
345



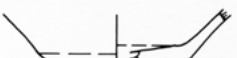
343



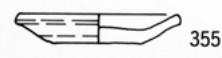
346



347



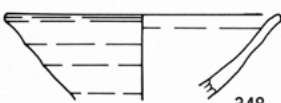
351



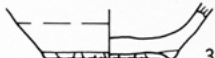
355



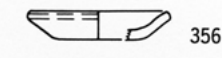
358



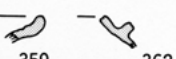
348



352

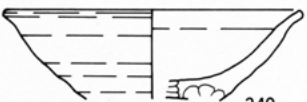


356



359

362



349



353



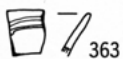
354



360



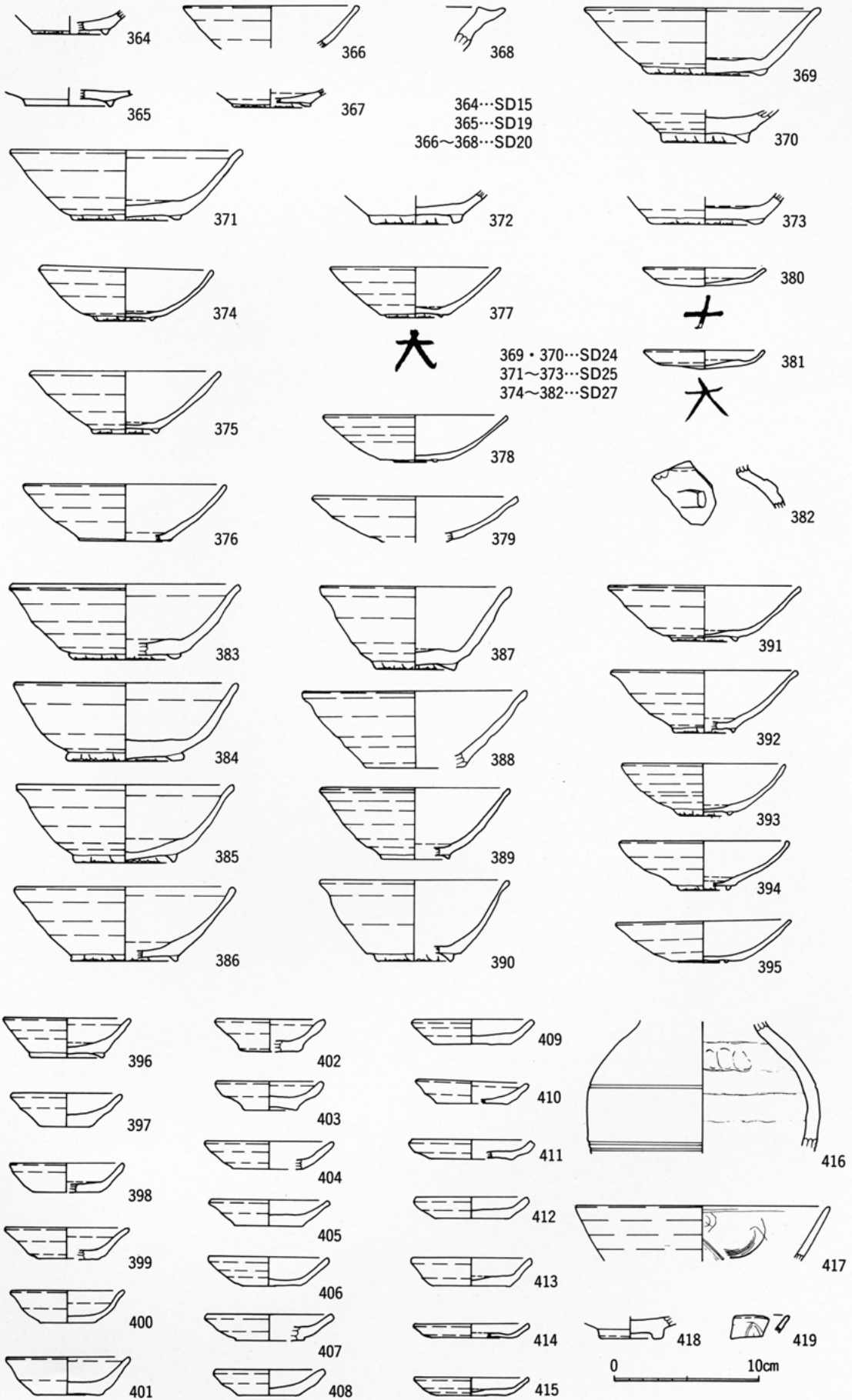
350



363



361



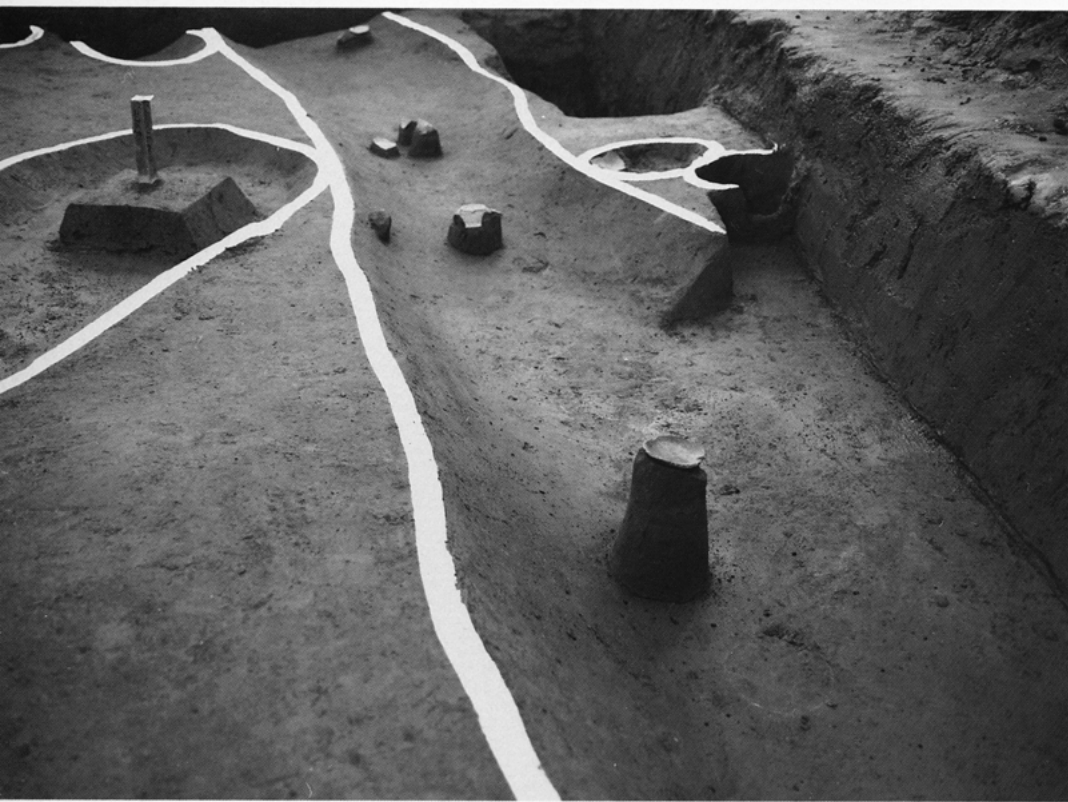
図版21

遺構 1



93区全景 東から

93区の全景。中央に多量の出土遺物をみたSK19(C期)が確認できる。



SD02 東から

93区東部で検出したC期の溝。灰釉系陶器(図版18-253~265)が比較的まとまって出土している。



SK01 東から

93区東部で検出したA期の土抗A。

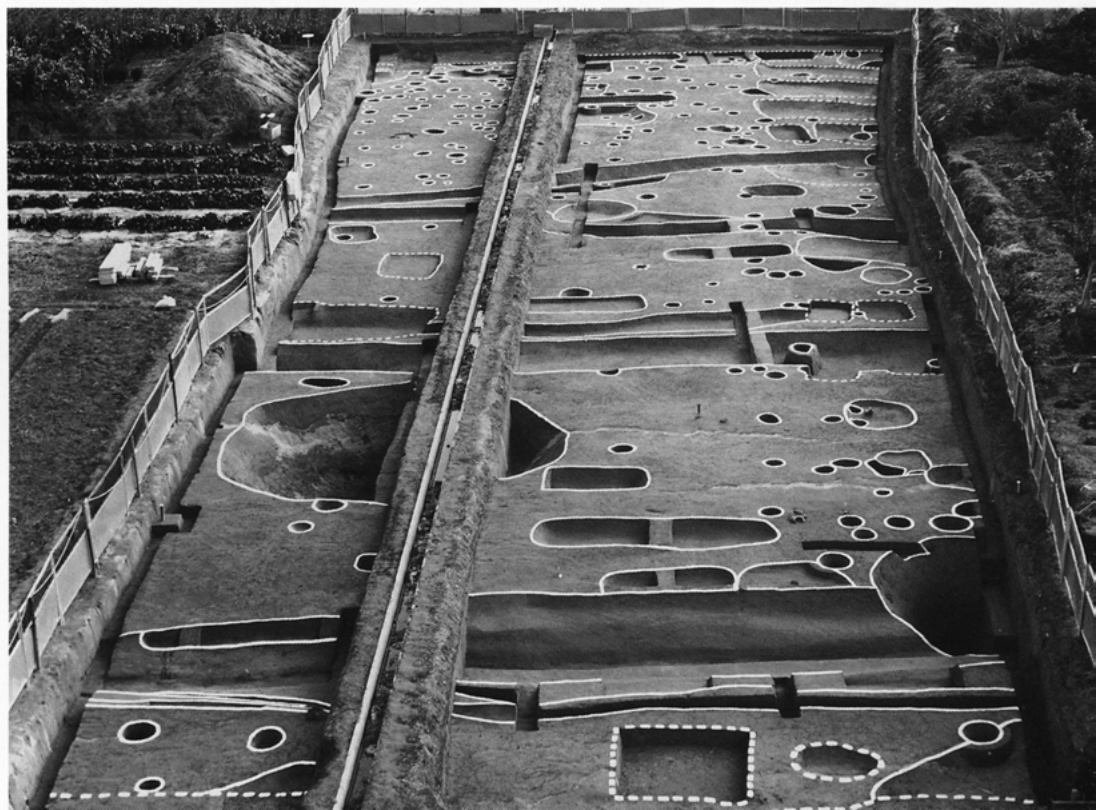
A区航空写真

下方に小土坑の集中部分が確認できる。



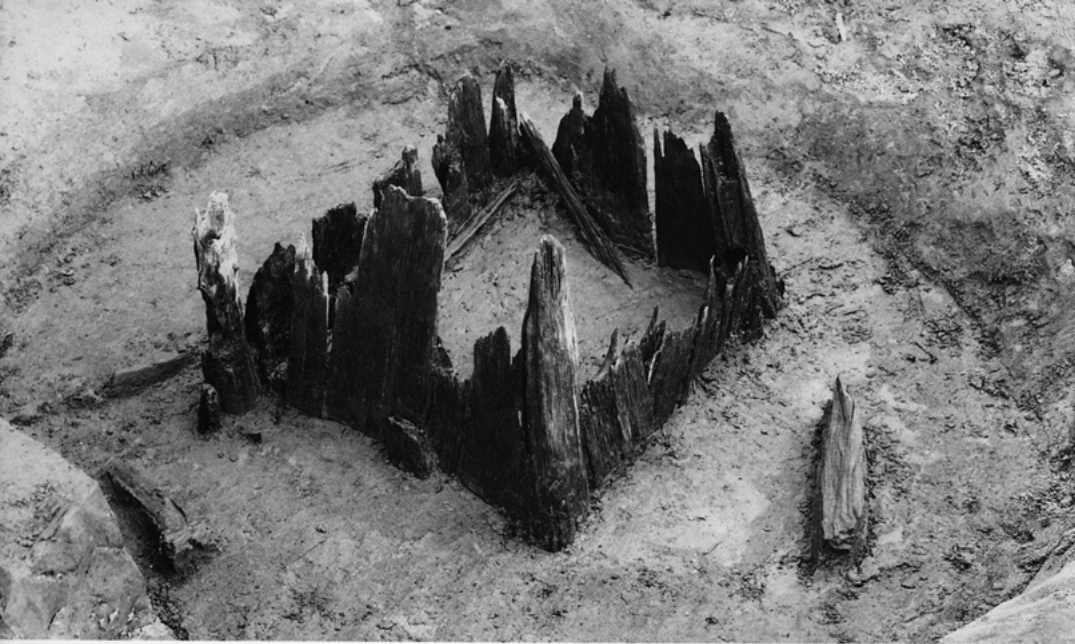
A区全景 西から

A区の全景。中央の大型土坑はSE01。



図版23

遺構 3



SE01 北から

94A区で検出したC期の井戸。写真は井戸枠の近景。



SE01 南から

SE01の井戸枠を側面から見た状態。



SE01 東から

井戸枠の埋土を断ち割った状態。竹状の植物質が直立して検出できた。

図版24  
遺構 4

SE02 北から

94A区西部で検出したC期の井戸。上面をSD29(D期)により破壊される。



SE02 北から

SE02の断ち割り状況。基底部の井戸枠のみが残存していた。



SD10 東から

94A区中央部で検出したIII期の溝。灰釉系陶器(図版19-303~333)が比較的まとまって出土している。





**B区航空写真**

B区の航空写真。現道との交差点に溝が集中して掘削されていることが確認できる。



**NR01 東から**

B区で検出された谷。古墳時代のうちに自然埋没している。

図版26  
溝構 6

遺物出土状況 東から

B区西側から出土した高杯  
(図15-1)。



SK10 西から

94B区西部で検出したA期の  
土坑D。土師器甕(図版11-25)  
が確認できる。



SK11 北から

94B区西部で検出したA期の  
土坑D。SK10の遺物出土状  
況。土師器甕(図版11-21)が  
確認できる。



図版27

遺構 7



SK06 東から

94B区中央部で検出したII期の土坑C。西側の溝はSD11(C期)。



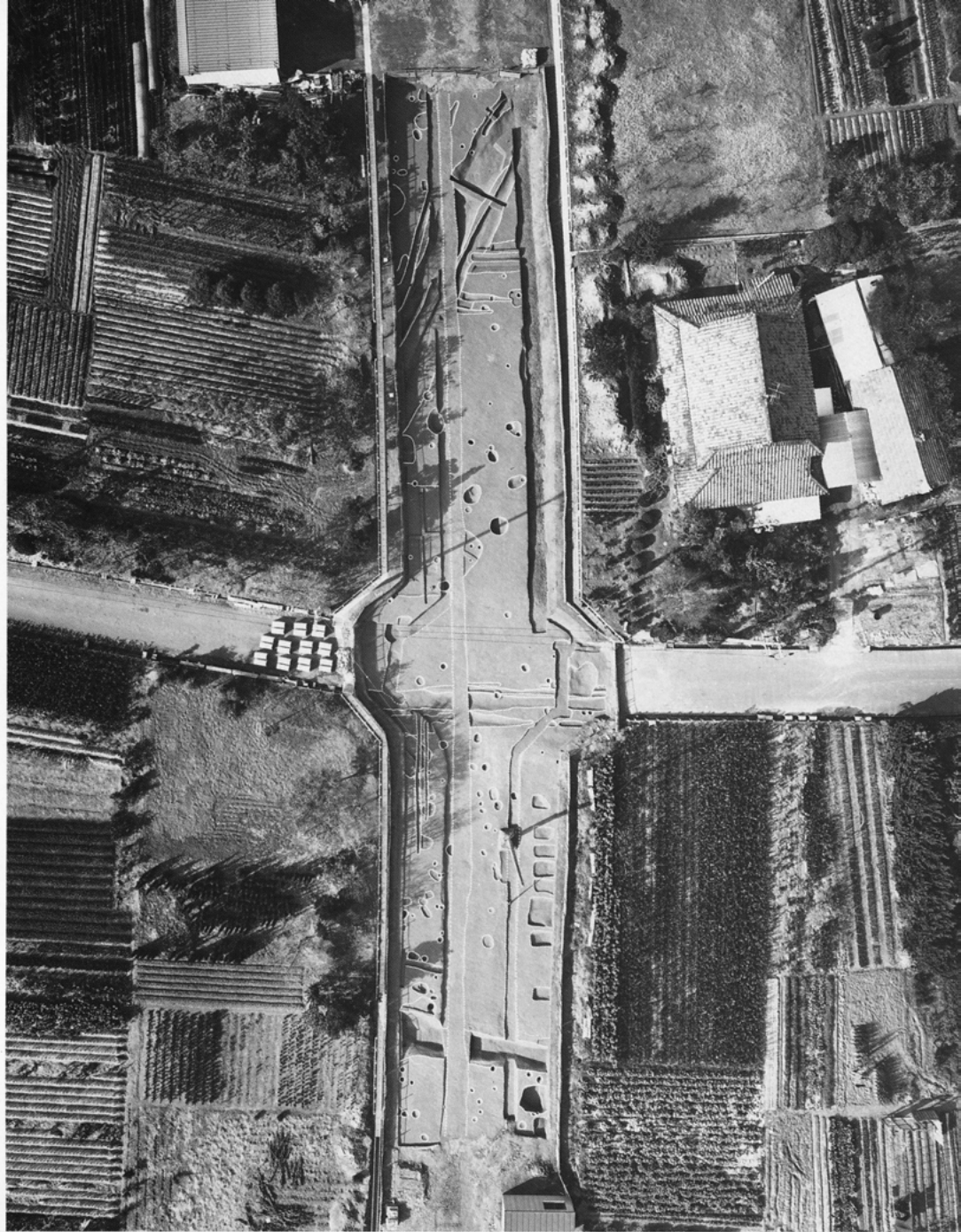
SK06遺物出土状況 北から

SK10の遺物出土状況。須恵器甕(図版11-16)が確認できる。



SK28 南から

94A区東部で検出した土坑A。

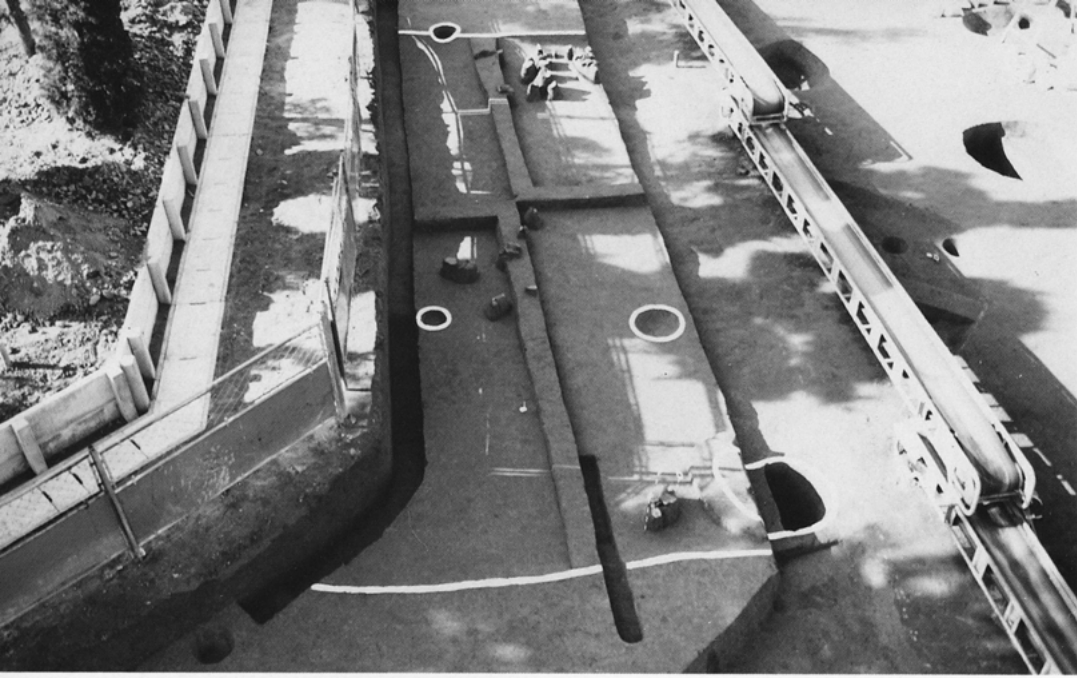


C区航空写真



C区全景 西から

C区の全景。手前の溝はSD38~40 (D期)。



図版29

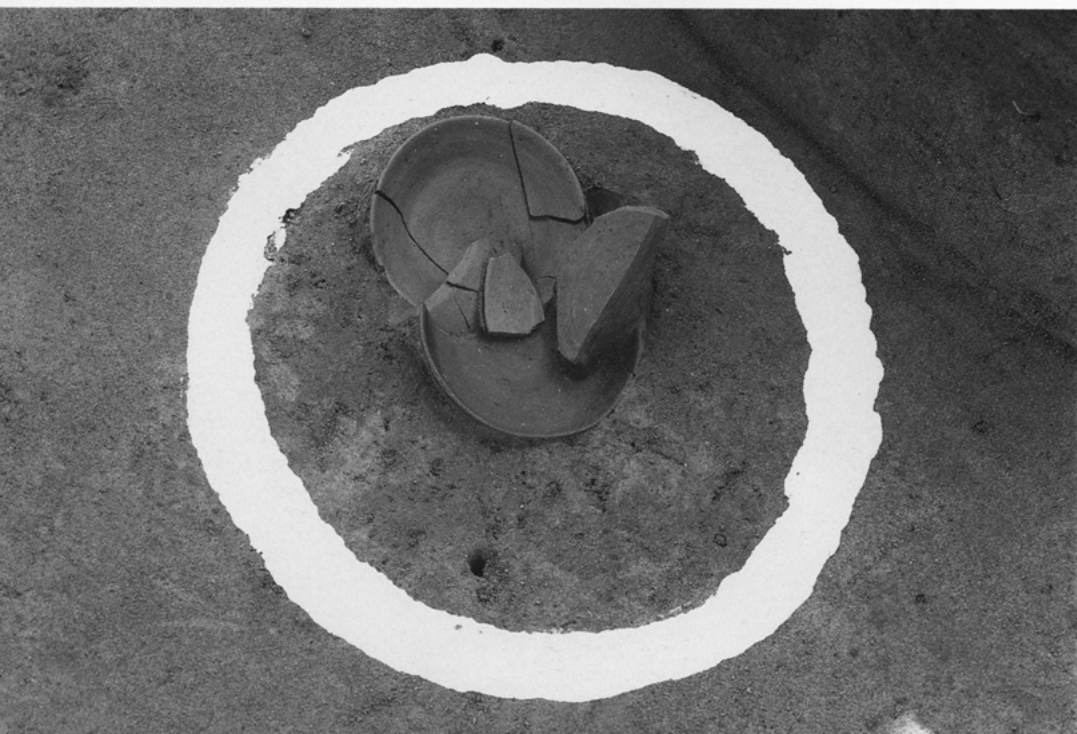
遺構 9

SK05 東から

94C区中央部で検出した土坑A。A期の良好な資料（図版10-6～15）を出土した土坑A。



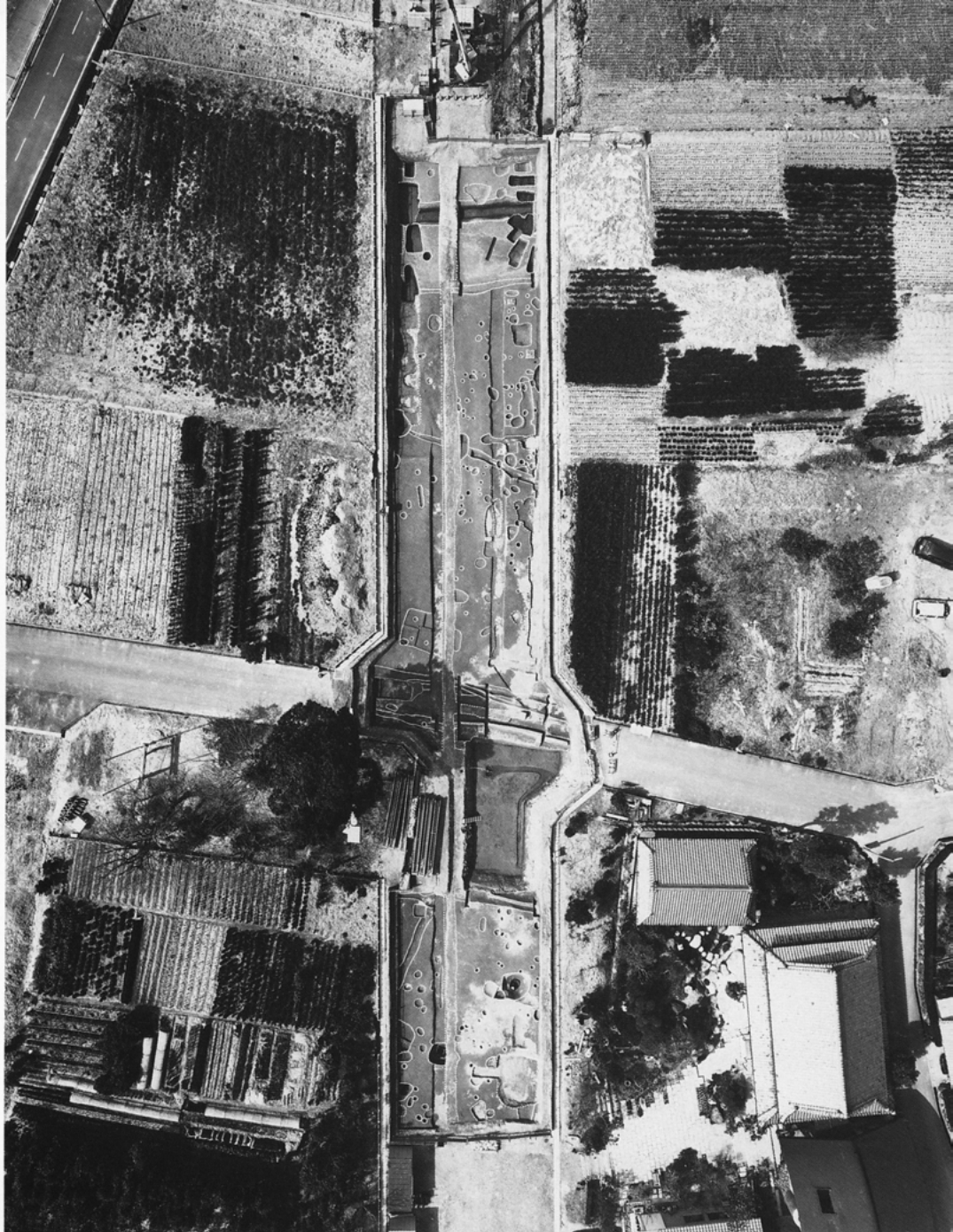
SK05遺物出土状況 北から



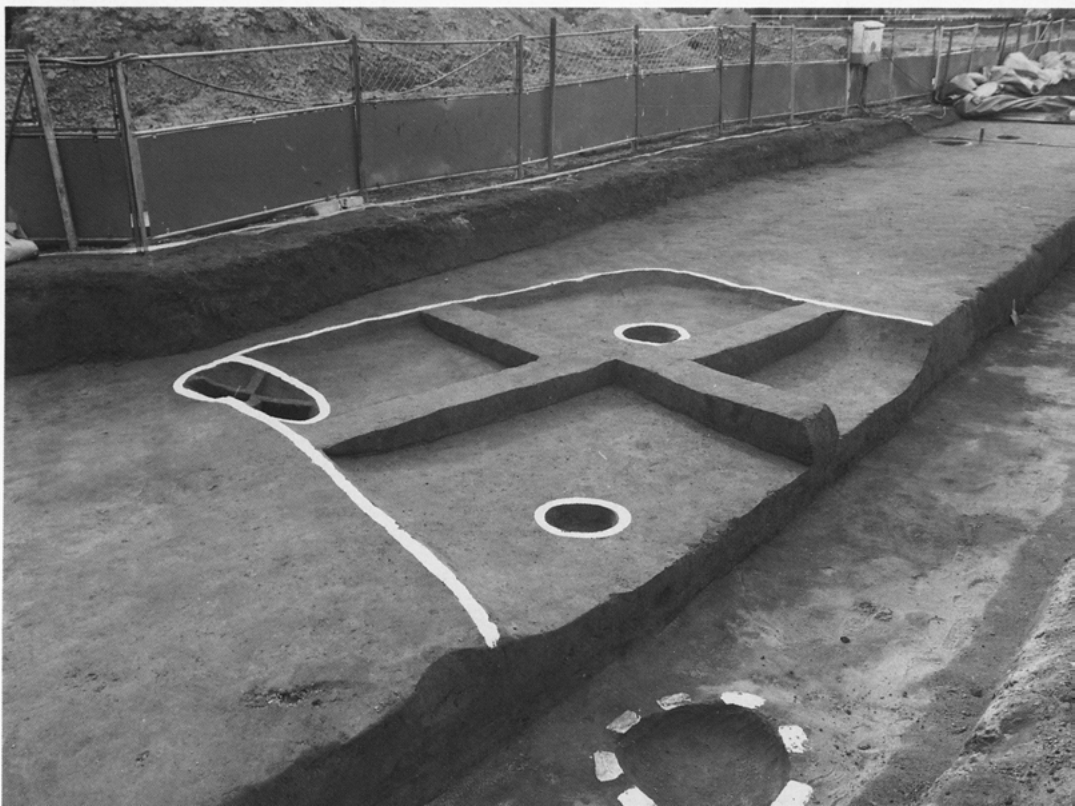
SK13遺物出土状況 北から

94C区東部で検出した土坑D。A期の須恵器杯（図版12-27～30）が集中して出土した。

図版30  
遺構10



D区航空写真

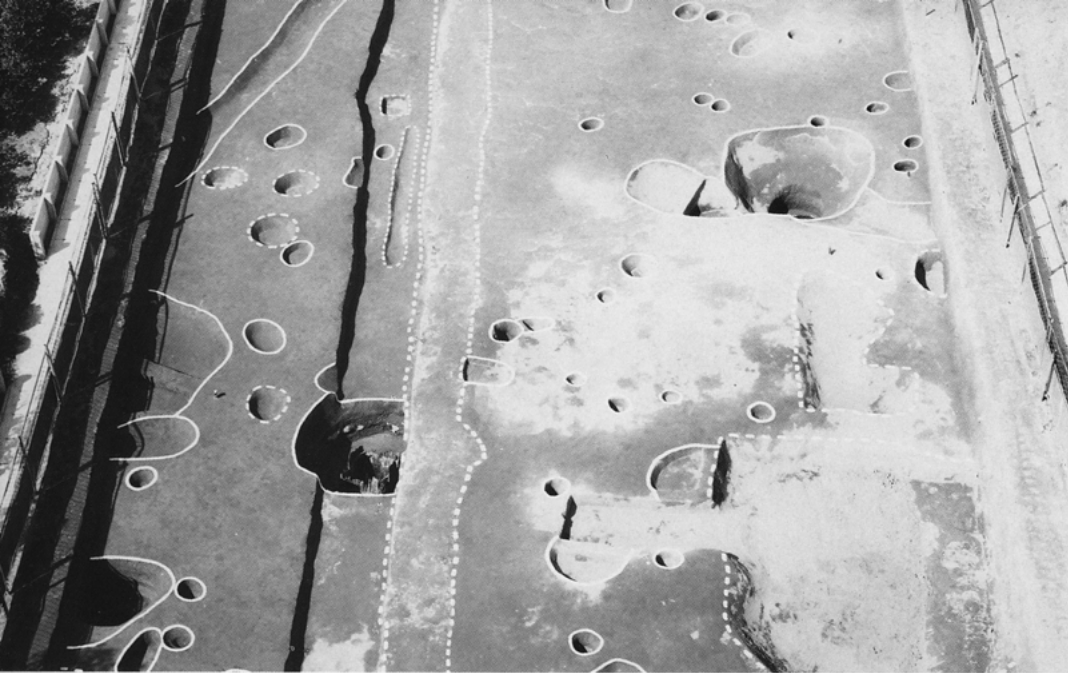


SB02 東から

94D区中央部で検出したA期の  
竪穴住居。

図版31

遺構11



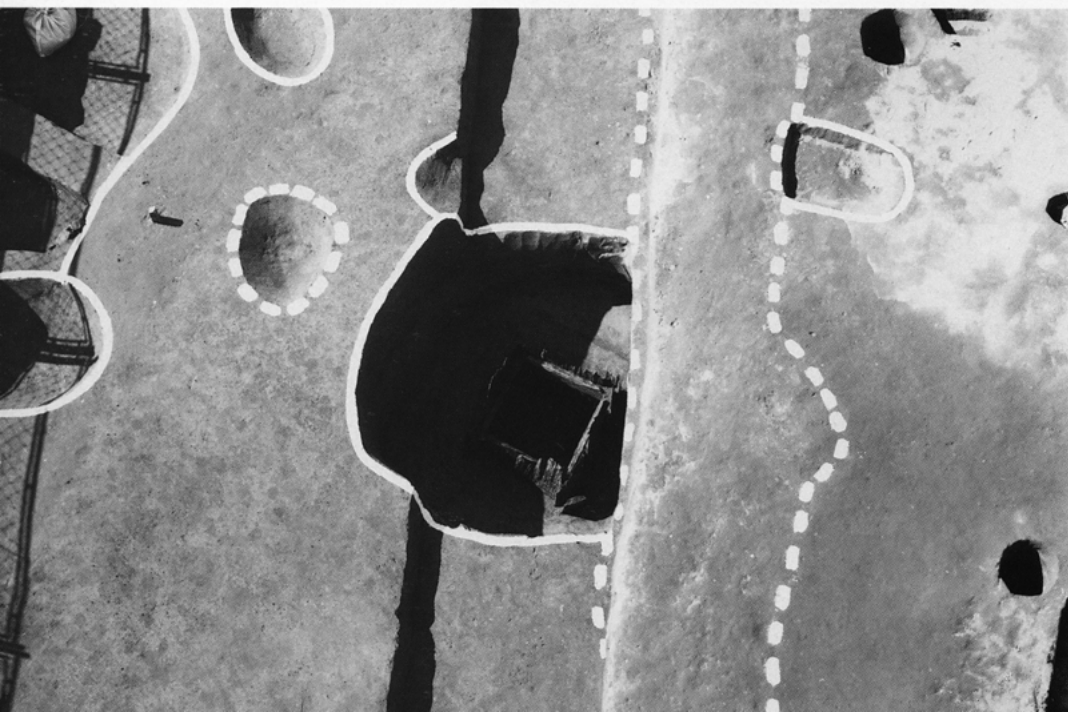
D区東側部分 東から

94D区東側部分の小土坑集中域。左下にSE08、右上にSE07が所在する。



SE07 西から

94D区東部で検出したC期の井戸。



SE08 東から

94D区東部で検出したC期の井戸。

図版32  
遺構12

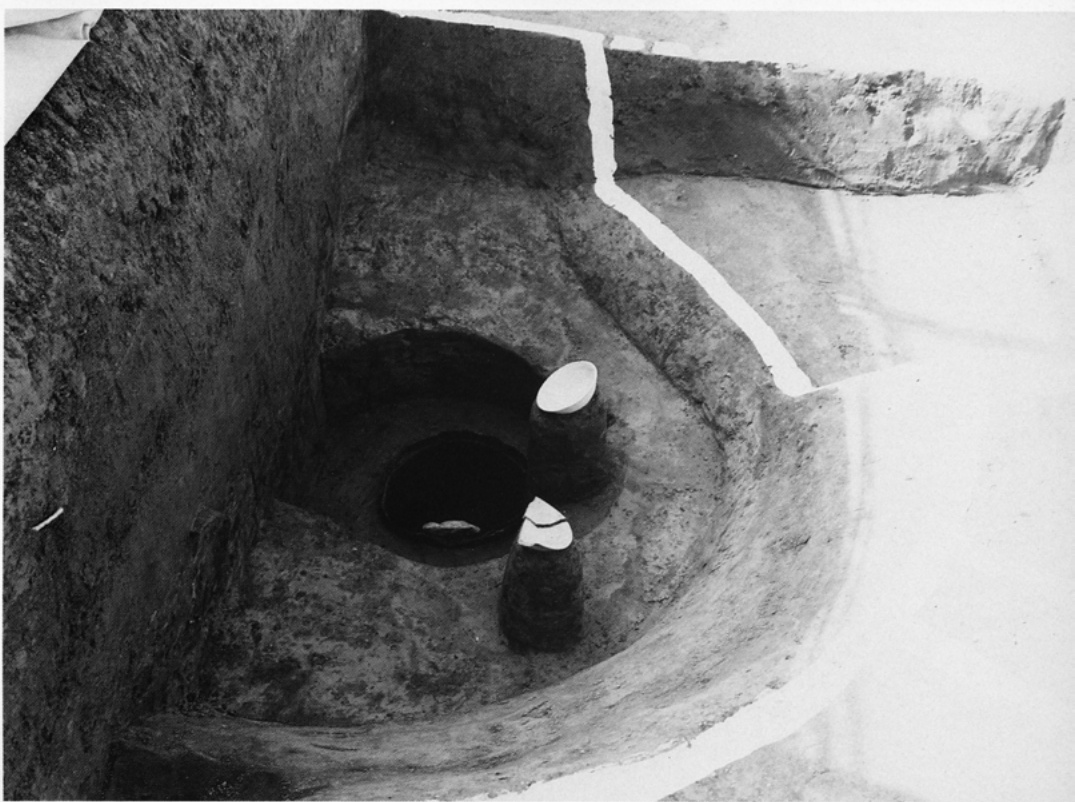
SE09 北から

94D区西部で検出したC期の  
井戸。



SE10 東から

94D区西部で検出したC期の  
井戸。中央に曲物が残存する。



SD27 北から

94D区西部で検出したC期の  
溝。灰釉系陶器（図版  
20-374～382）が比較的まと  
まって出土している。





图15-1



5



10



11



15



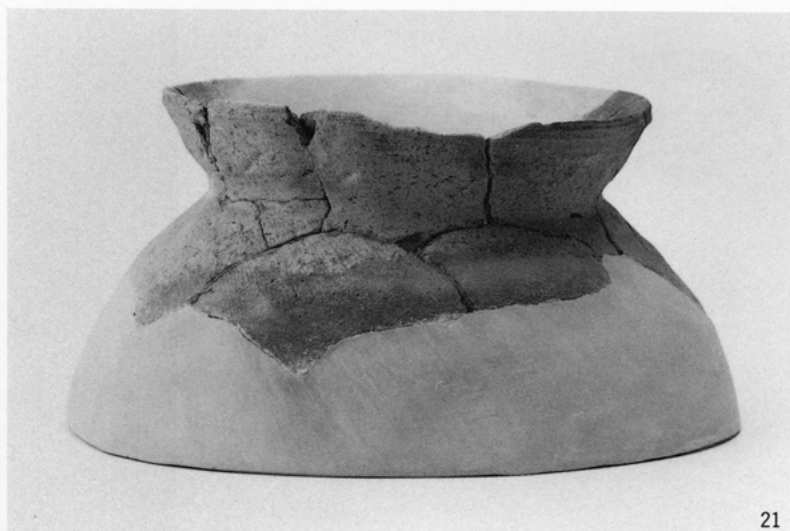
17



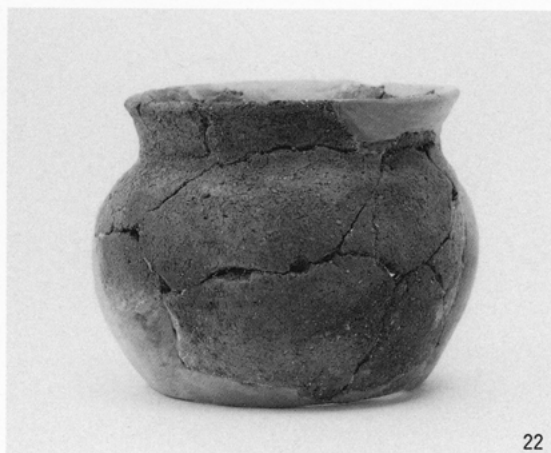
18



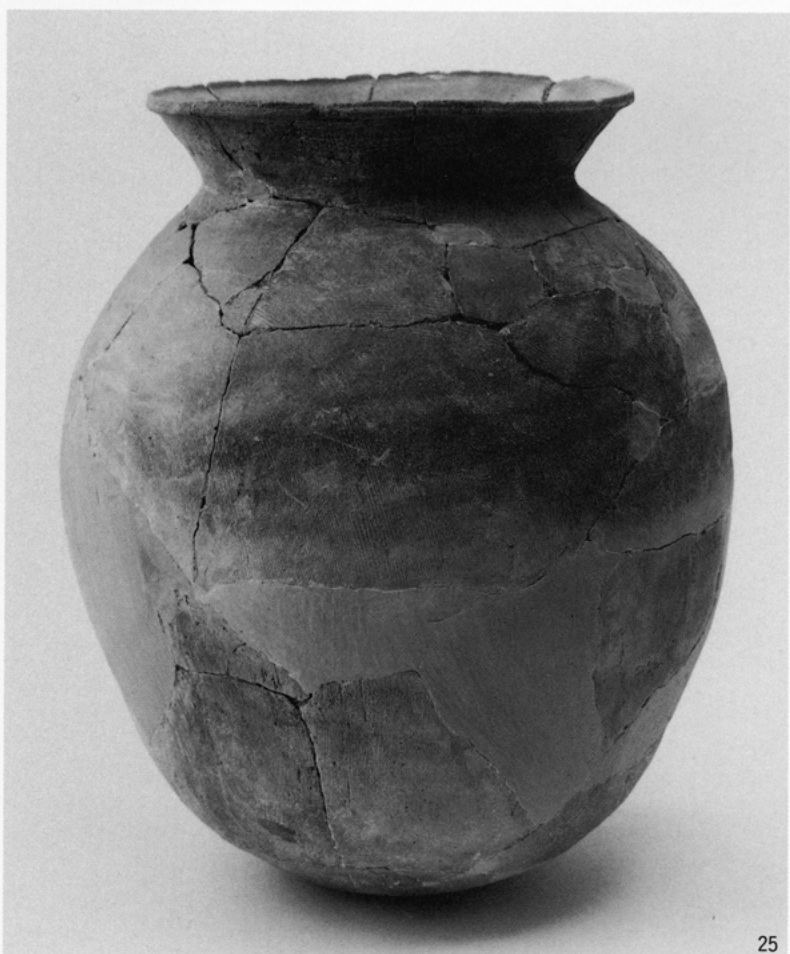
19



21



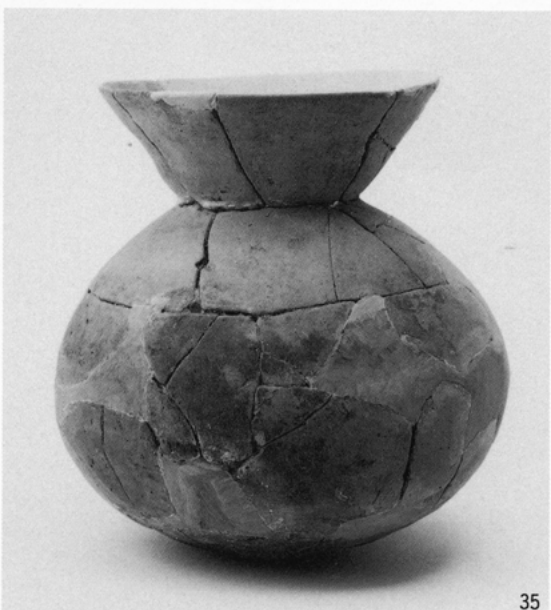
22



25



33



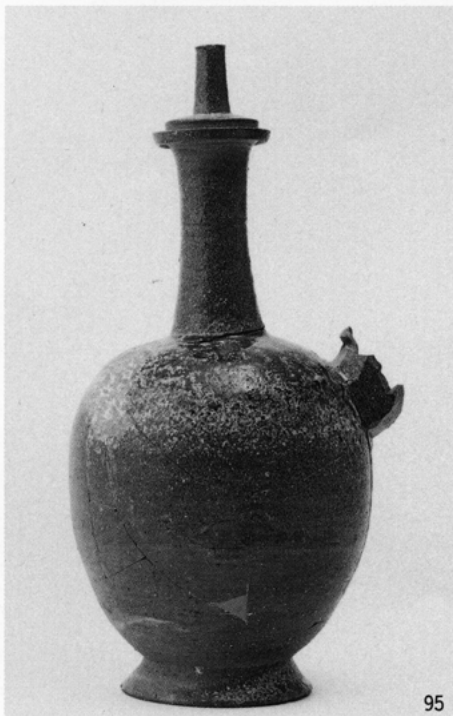
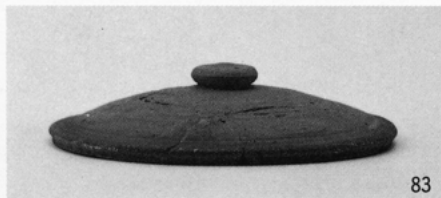
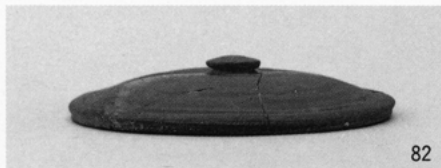
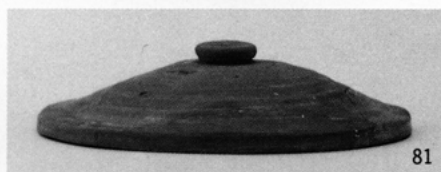
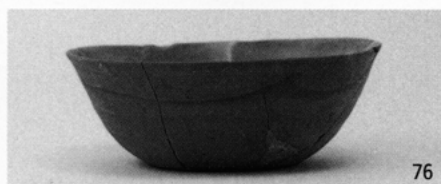
35



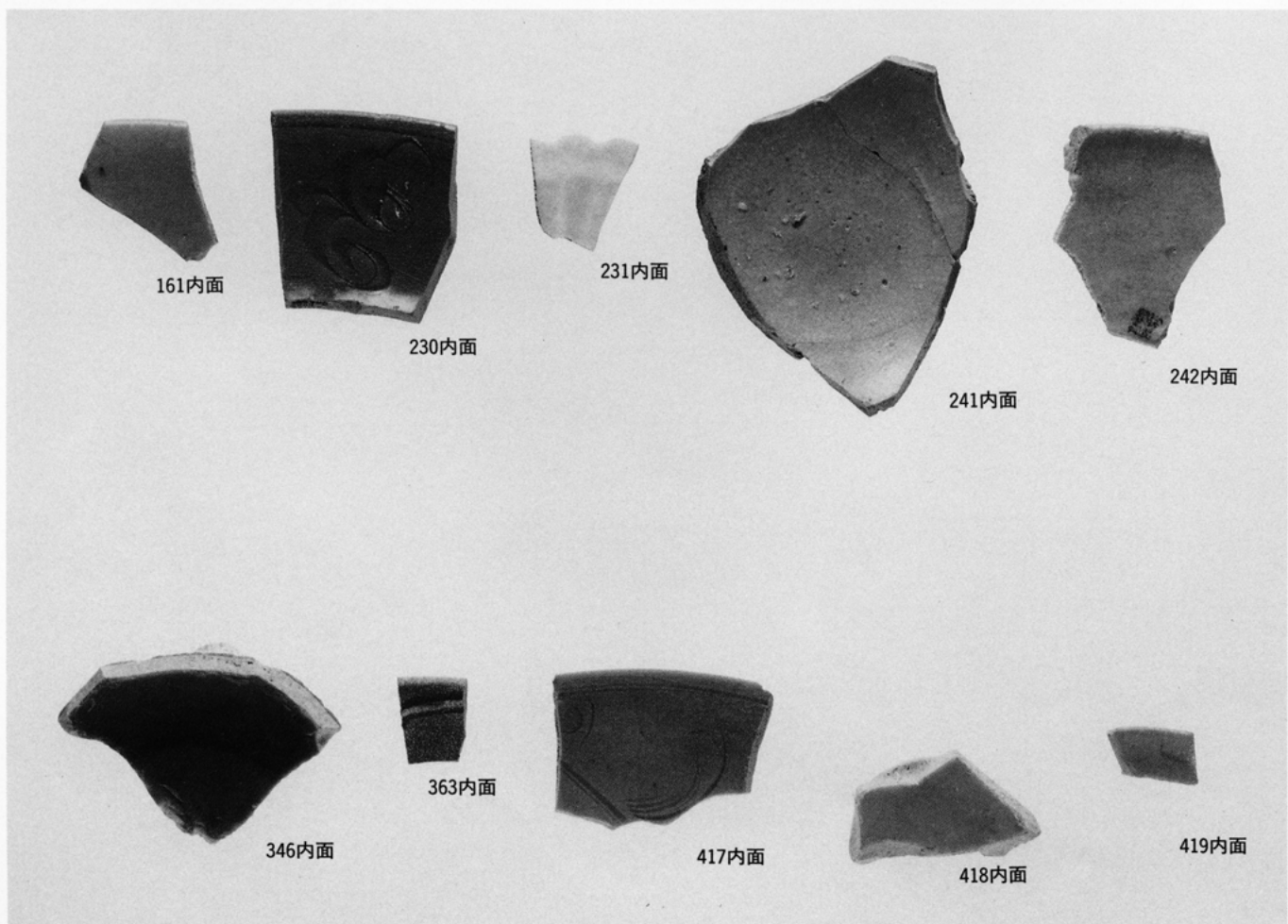
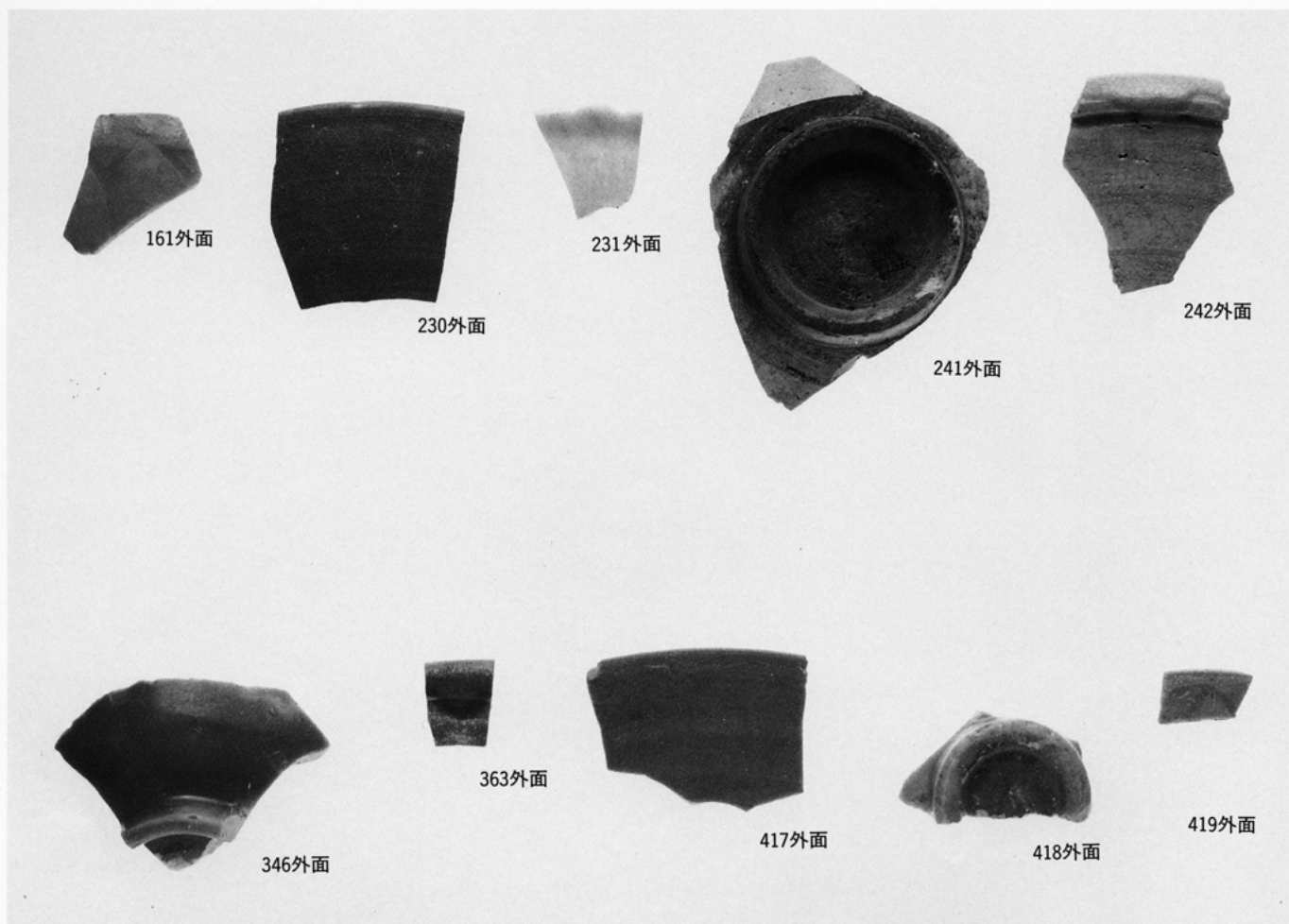
49



51







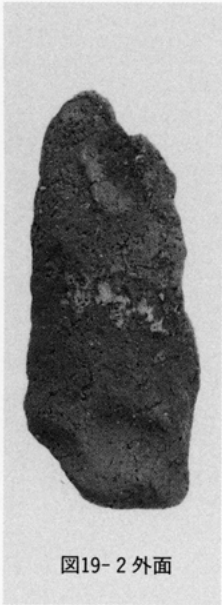


图19-2 外面



图19-2 内面



图19-3



图19-4

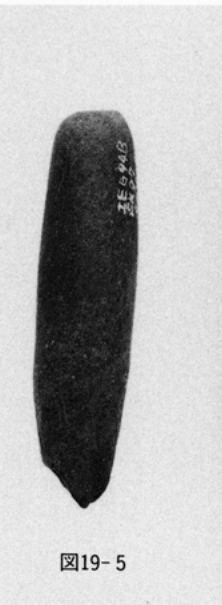


图19-5

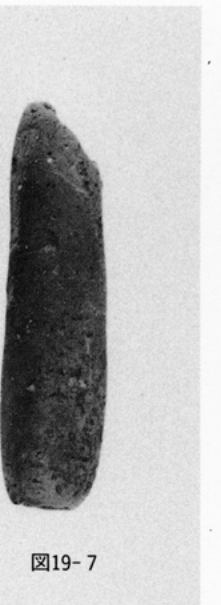


图19-7

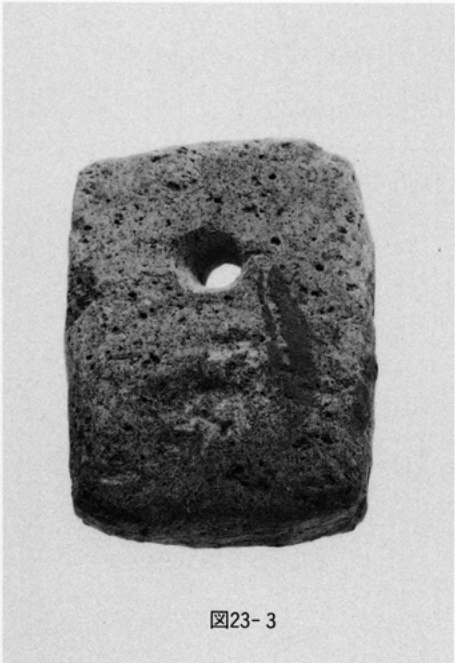


图23-3

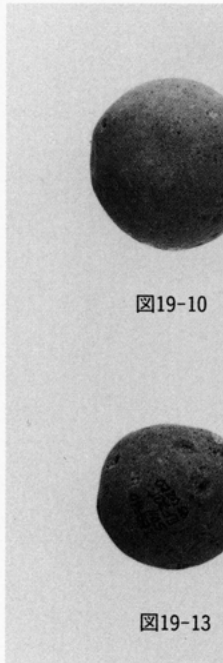


图19-10

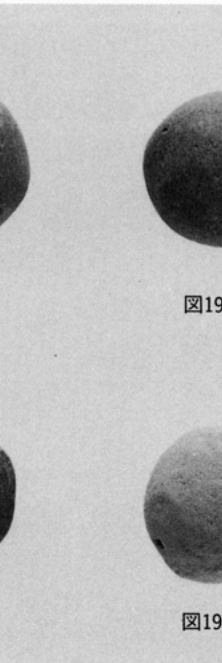


图19-11

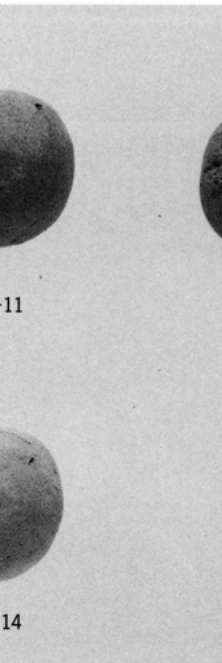


图19-12



图19-13

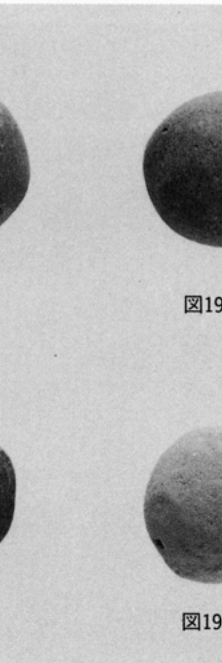


图19-14



图20-1



图20-2



图20-3



图20-4



图20-5

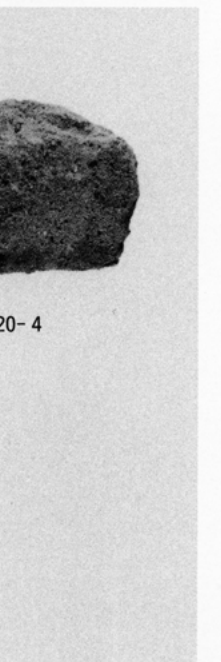


图20-6



图20-7

# 報告書抄録

ふりがな	ぎちようしょうらくじいせき							
書名	儀長正楽寺遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第68集							
編著者名	池本正明・前田雅彦・水谷寛時・鬼頭剛・水野多栄							
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田 TEL0567-67-4163							
発行年月日	西暦 1996 年 8 月 30 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぎちようしょうらくじ 儀長正楽寺	いなぎわし ぎちようちよう 稲沢市儀長町	23220	9027	35度	136度	19940104	5630m <sup>2</sup>	道路建設
			9028	13分	46分	}		
			9153	49秒	11秒	19940331		
						19940901		
						19950331		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
儀長正楽寺	集落跡	古墳時代  奈良・平安時代  鎌倉・室町時代  江戸時代	竪穴住居 土坑  土坑  掘立柱建物 土坑 溝  溝	須恵器・土師器   須恵器・灰釉陶器  灰釉糸陶器  近世陶磁器		弥生から江戸までの複合遺跡。 弥生の遺構は検出されてはいない。		

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第68集

## 儀長正楽寺遺跡

1996年8月30日

財団法人  
編集・発行 愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社